小淵沢町埋蔵文化財調査報告第３集

前田遺跡

山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾地区県営圃場整備事業に伴う

前田遺跡発掘調査報告書

1985

小淵沢町教育委員会

序　　文

小淵沢町は、そのほぼ全域が八ケ岳連峰より続く南西傾斜の台地上に位置し、古来より気候、風土に恵まれ、いまなお、随所に豊かな緑が見られます。

このような環境に恵まれた我町は、古くから人々が生活を営んでおり、祖先の文化遺産である埋蔵文化財の宝庫であります。

この度、県営圃場整備事業にともなって、下笹尾字前田の遺跡発掘調査を行いました。

その結果多数の住居跡の発見があり、縄文時代と平安時代の遺跡であることがわかりました。この成果は小淵沢町の古代を解明する上での手がかりとなる重要な遺跡であることがあきらかになり、このたび、これらの成果をまとめた報告書を刊行するはこびになりました。

本報告書が我々の祖先の歴史を解明するうえで貴重な資料となることを念願するとともに、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願ってやみません。

最後に、調査整理にあたって多大な御協力を賜った、県文化課、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

小淵沢町教育委員会

教育長　宮　沢　辰　雄

例　　言

1．本書は山梨県北巨摩郡小淵沢町下笹尾地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査である。

2．本調査は、峡北土地改良事務所の委託を受けて、小淵沢町教育委員会が実施した。

3．本書の執筆、遺物の実測、トレース、図版作成、遺物の写真撮影は佐野勝広が行なった。

4．出土遺物は、小淵沢町郷土資料館に展示保管し、図面類は、小淵沢町教育委員会に保管している。

5．遺構番号は、昭和57年度の発掘調査使用の続き番号とする。

6．発掘調査及び報告書刊行に際しては、以下の方々に御指導、御助言をいただいた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる。（順不同）

末木健氏（県文化課）、坂本美夫氏（県埋文センター）、新津健氏（県埋文センター）、米田明訓氏（県埋文センター）、保坂康夫氏（県埋文センター）、山路恭之助氏（須玉町教育委員会）、平野修氏（白州町教育委員会）、櫛原功一氏（大泉村教育委員会）、深沢裕三氏、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区

7．調　査　組　織

1．調査主体　小淵沢町教育委員会

2．事務局

教育長　　宮沢辰雄
教育課長　　田中吉彦
教育課係長　小林和幸

3．調査担当

佐野勝広

4．調査参加者（順不同）

三井貢、平田敦子、三井ちかよ、内田つゆ子、伊藤とめ子、伊藤きよ子、坂井ふじ、坂井けさ子、坂本はる代、内田とくえ、久保田鈴子、草野光夫

目　　次

序　　文
例　　言
Ⅰ　調査に至る経緯と経過 …… 4
Ⅱ　地理的・考古学的環境 …… 9
Ⅲ　遺　　構 …… 15
Ⅳ　ま　と　め …… 55
　　おわりに …… 60

挿　図　目　次

第１図　遺跡付近の地形図 …… 5
第２図　遺跡配置図・グリッド図 …… 7～8
第３図　遺跡位置と小淵沢町の遺跡 …… 11～12
第４図　第２号住居址とカマド …… 26
第５図　第５号住居址とカマド …… 27
第６図　第６号住居址とカマド …… 28
第７図　第７号住居址とカマド …… 29
第８図　第８号・９号住居址とカマド …… 30
第９図　第10号・11号・12号住居址と10号住居、11号住居カマド …… 31
第10図　第２号住居址出土遺物(1) …… 32
第11図　第２号住居址出土遺物(2) …… 33
第12図　第２号住居址出土遺物(3) …… 34
第13図　第５号住居址出土遺物 …… 35
第14図　第６号住居址出土遺物(1) …… 36
第15図　第６号住居址出土遺物(2) …… 37
第16図　第７号・８号・９号・10号・11号住居址出土遺物 …… 38
第17図　第９号住居址出土遺物 …… 39
第18図　第11号住居址出土遺物 …… 40
第19図　第11号、12号住居址、第１号土師器窯址出土遺物 …… 41
第20図　第１号掘立柱建物址 …… 47
第21図　第２号・３号掘立柱建物址 …… 48
第22図　第４号・５号掘立柱建物址 …… 49
第23図　第１号・２号土師器窯址、第１号・２号集石遺構、第12号土壙 …… 50
第24図　第３・４号・５号・６号・７号・８号・９号・10号・11号土壙 …… 51
第25図　第６号・７号・８号土壙出土遺物、遺構外出土遺物 …… 52
第26図　第９号・10号土壙出土遺物 …… 53
第27図　第11号・12号土壙、第１号集石遺構出土遺物 …… 54
第28図　前田遺跡編年図 …… 58～59

Ⅰ．調査に至る経緯と経過

小淵沢町下笹尾字前田の周辺は、昭和55年度から県営圃場整備事業が開始されており、笹尾墨址から南東に延びる細長い水田地帯が、大規模につくり変えられている。この水田地帯の東側に向かって、半島状に突き出た丘陵があり、昭和53年の分布調査により発見された前田遺跡はこの丘陵上にある。縄文時代と平安時代の遺跡として知られている。昭和55年、前田遺跡の南側が圃場整備の工事に入った時、そこに至る農道が拡張され、その断面から竪穴住居址が存在することが確かめられた。次いで、昭和57年、圃場整備事業に伴なっておこなわれる農道拡張工事が前田遺跡の一部にかかることになったため、小淵沢町教育委員会は、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区、県文化課と協議の結果、拡張部約 400㎡の発掘調査を実施することになった。発掘調査は、峡北土地改良事務所の委託を受けて小淵沢町教育委員会が、昭和57年10月25日より同年11月25日までの30日間おこなった。その結果、平安時代の竪穴住居址４軒と、掘立柱建物址１軒、縄文時代中期の土壙２基を検出した。その成果は刊行済みである。

その後、昭和60年度の県営圃場整備事業が、前田遺跡の存在する丘陵全体におよぶことになったため、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区、県文化課、小淵沢町教育委員会の四者協議の結果、発掘調査を実施することになった。発掘調査は、事業主体者である峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、県より補助金を受け、峡北土地改良事務所の委託によって、小淵沢町教育委員会が発掘調査主体者となり、記録保存を目的として、昭和59年10月１日より同年12月31日まで発掘調査が実施された。調査の結果、平安時代後半の集落址で、平安時代後半の竪穴住居址９軒、掘立柱建物址５軒、土師器窯址２基、集石土壙２基、土壙10基を検出した。

発掘調査方法

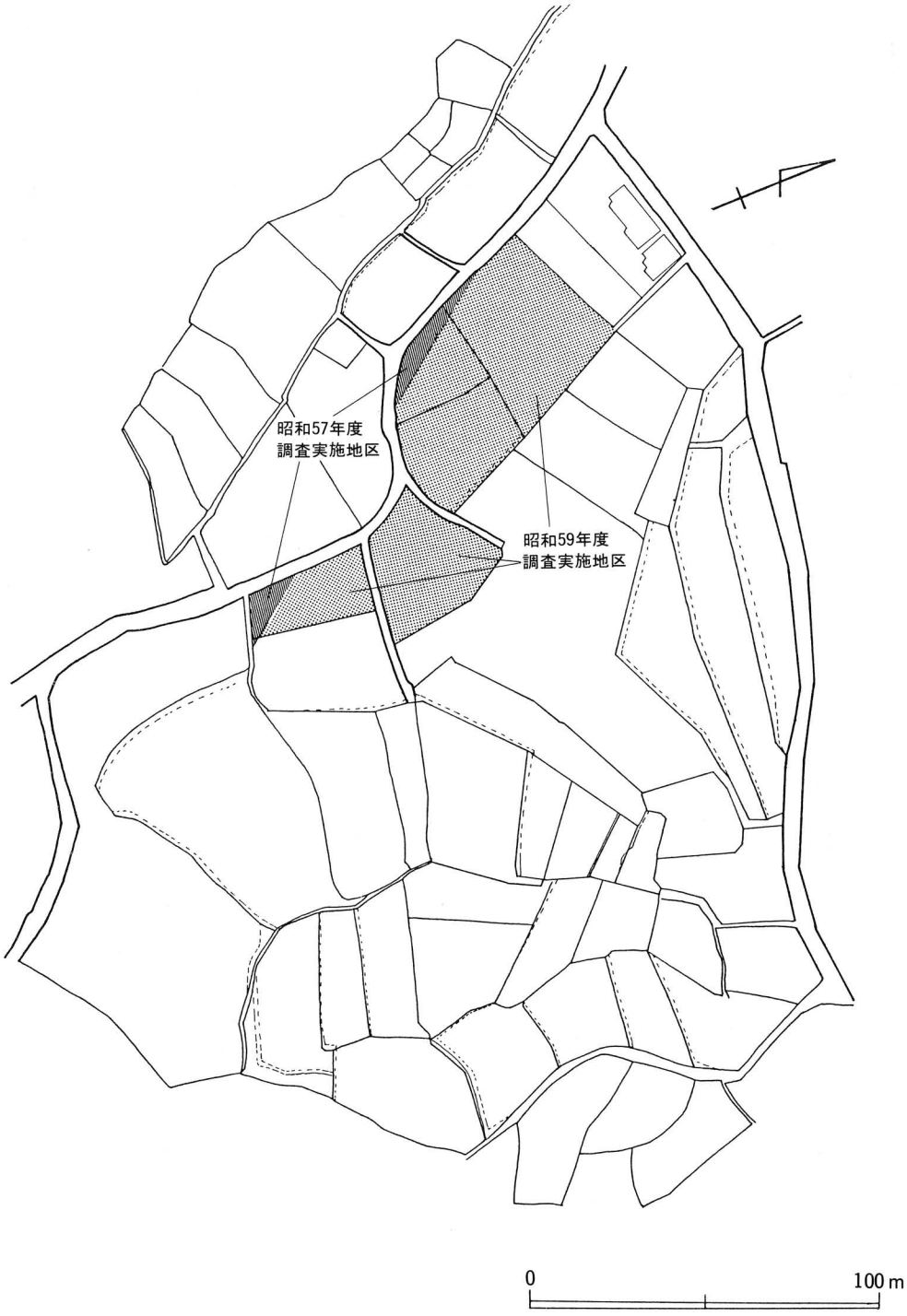
調査区全体を東西南北にあわせて10ｍ 方眼のグリットを設定、北から南へＡ～Ｉ列とし、西から東へ１～９列として、例えば、Ａ－１と呼称した。表土層は遺構面までの深さを確認した後、大型重機による排土を行ない、その後全域を遺構確認面まで人力によって掘り下げた。

層　　序

本遺跡は、南に緩傾斜する丘陵に立地するが、上層の堆積状態は、それほどの差はなく、後世の撹乱を除いて、比較的単純な層序を呈している。小淵沢町の土壌は八ケ岳火山灰であり、下笹尾地区もその例外ではない。本遺跡の層序は、地目が、畑地と水田であったため２種類の層序を呈していた。

畑地

第１層　表土層　耕作土層　黒褐色を呈する。堆積の厚さは13～17センチである。



第１図　遺跡付近の地形図

第２層　黄褐色土層　ソフトロームで堆積の厚さは15～36センチである。

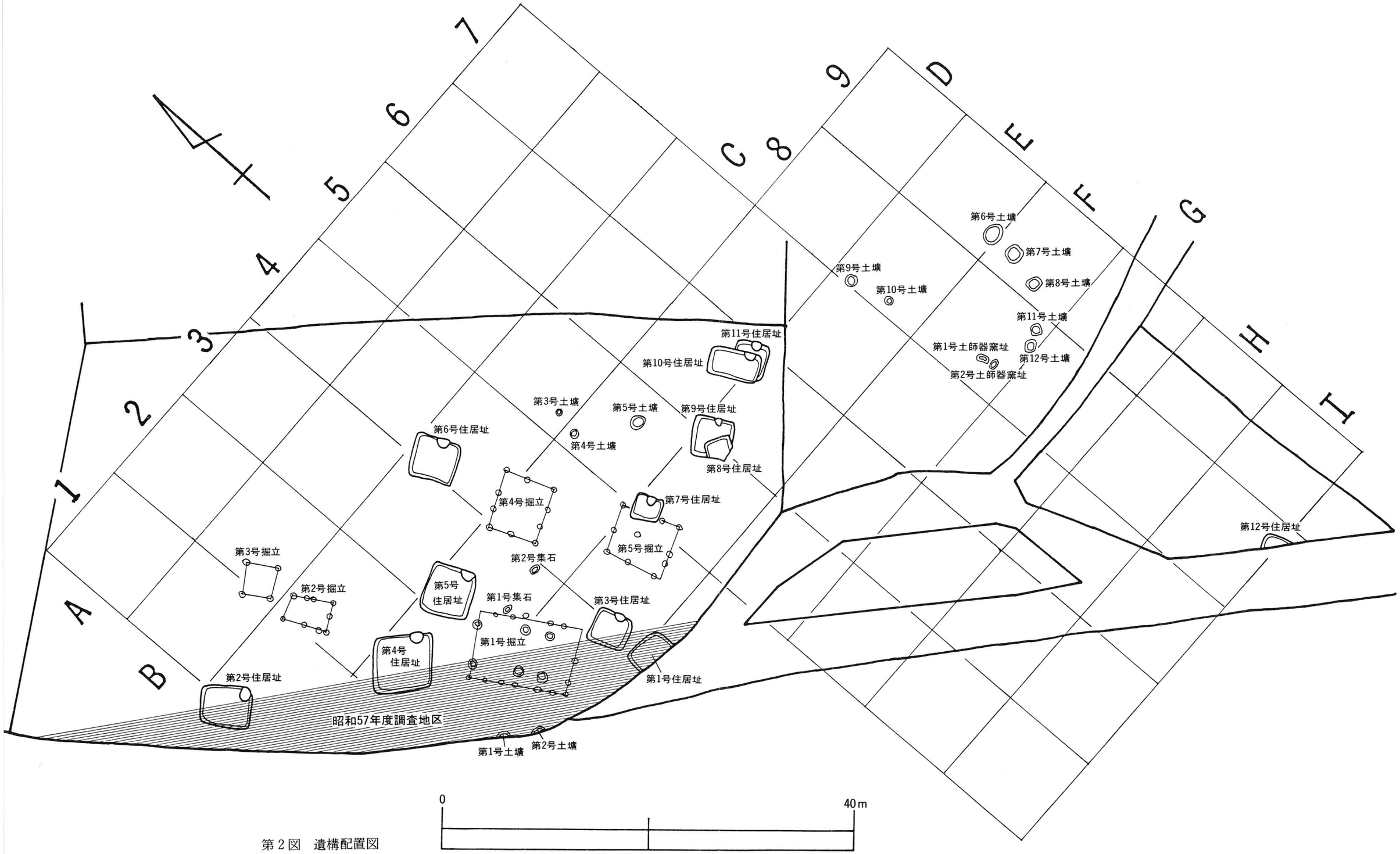
第３層　黄褐色土層　ハードロームである。

水田

第１層　表土層、耕作土層　黒色（いわゆる黒ボク）を呈し、堆積の厚さは10～20センチである。

第２層　鉄分集積土層　水田の床土で堆積の厚さは、６～10センチである。

第３層　黄褐色土層　ハードロームである。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
A
B
C
D
E
F
G
H
I
第1号住居址
第2号住居址
第3号住居址
第4号住居址
第5号住居址
第6号住居址
第7号住居址
第8号住居址
第9号住居址
第10号住居址
第11号住居址
第12号住居址
第1号土師器窯址
第2号土師器窯址
第1号土壙
第2号土壙
第3号土壙
第4号土壙
第5号土壙
第6号土壙
第7号土壙
第8号土壙
第9号土壙
第10号土壙
第11号土壙
第12号土壙
第1号集石
第2号集石
第1号掘立
第2号掘立
第3号掘立
第4号掘立
第5号掘立
昭和57年度調査地区
0
40m

第２図　遺構配置図

Ⅱ．地理的・考古学的環境

小淵沢町は、山梨県の北西部に位置し、北巨摩郡に属している。当町は八ケ岳連峰の権現岳を頂点とする南西傾斜の広大な台地上に占地し、北から南に延びるくさび形を呈している。総面積３４２６㎢の町である。北は権現岳の山頂を境に、長野県訪諏郡富士見町、南は釜無川を経て白州町、東は、女取川を境として長坂町にそれぞれ隣接している。

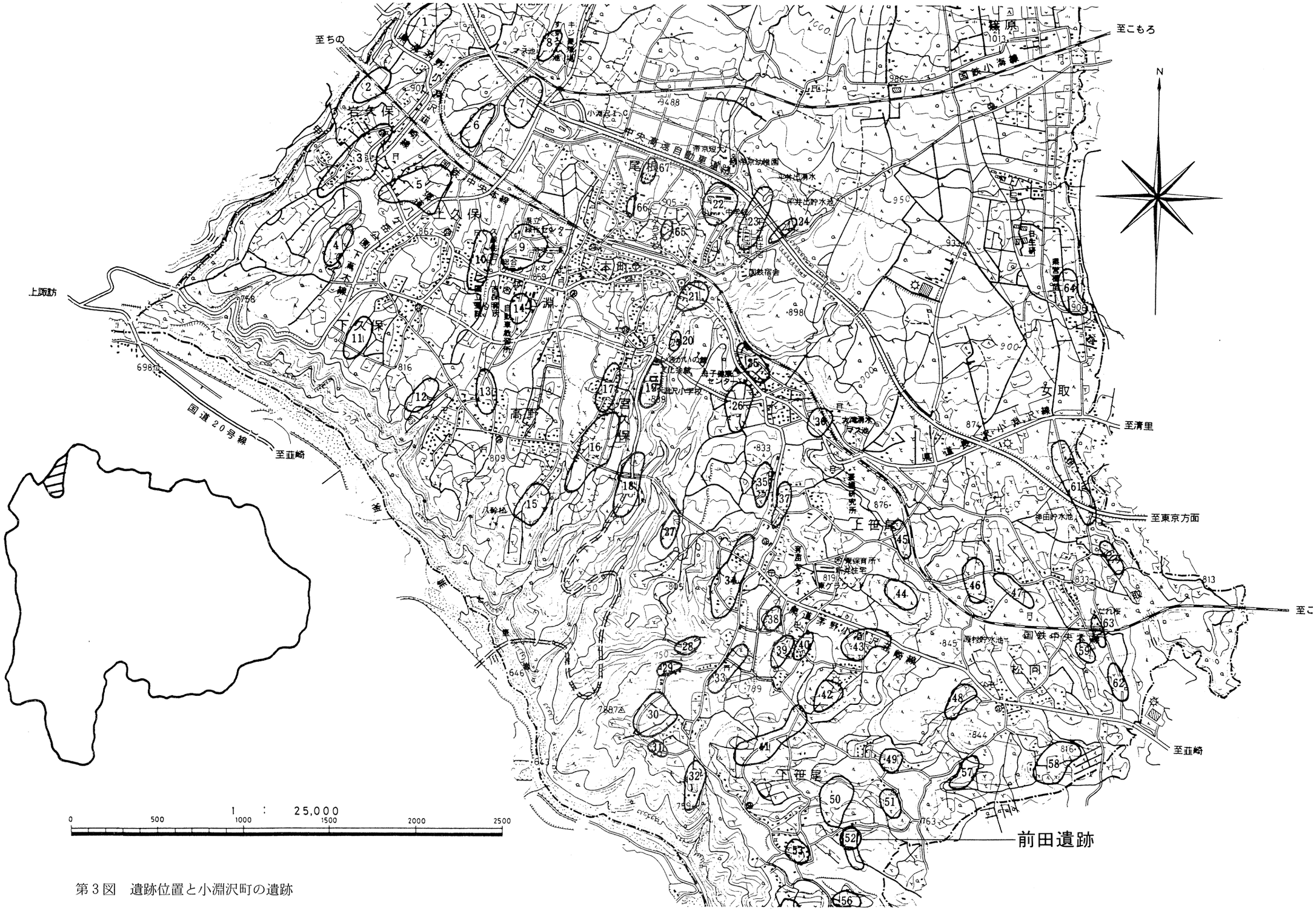
八ケ岳は最高峰が赤岳（２８９９メートル）で、日本列島を地質学上東西に二分する糸魚川―静岡構造線の東縁にフォッサマグナに沿って、噴出した南北２５０キロメートル、海抜２０００メートルを越える一連のみごとな火山列を形成する。その山頂部は、著しい浸食作用により、荒々しくけずられている。さらに八ケ岳南麓の小淵沢町をはじめ火山砕屑物の裾野は広大なスロープをつくる。このスロープの北部海抜１１００メートル以上は、林野を形成し、海抜６２０メートルから１１００メートルの地帯は緩かな斜面が続き、八ケ岳南麓から流れでている甲六川、女取川の湧水を利用し、耕地が、拓け、その間に集落が点在している。このような地勢のなかにあって、前田遺跡は、小淵沢町下笹尾字前田を中心に所在し、国界橋付近より釜無川ぞいに韮崎市にいたる左岸には、八ケ岳の山体崩壊期の韮崎泥流の活動により形成された、高さ７０～８０メートル、延長２８キロメートルにおよぶ、通称「七里岩」と呼ばれている急崖の内奥部で南に向かって三角に突き出た半島状の丘陵に位置する。標高は約７７０メートルを測る。調査前の地目は畑地と水田であった。

小淵沢町域の遺跡は、昭和53年におこなわれた分布調査の結果、67ケ所の遺跡が確認された。これらの遺跡を時代別に整理すると、先土器時代の遺跡は、調査例はなく、町内での遺跡の在り方自体不明な点が多い。表面採集で、松向字杉の木平より、縦長剥片、上笹尾字夏秋より、細石核が発見されている。小淵沢町域内ではまだ未知な部分が多く今後の調査に期待される。

縄文時代は、最も遺跡の数が増加する時期であり、小淵沢町の分布調査の結果においても、発見数67ケ所中、縄文時代の遺跡数は60ケ所発見されている。特に縄文時代中期は八ケ岳南麓で最も遺跡数が増えた時期で、八ケ岳南麓一帯が「縄文文化の宝庫」と言われるゆえんである。縄文時代の早期及び前期後半の遺跡は少なく、発見されていないが、隣接町村で、この時期の遺跡が発見されていることから今後当町でも発見される可能性はある。縄文時代前期後半の時期の諸磯式、十三菩提式の土器は各地で発見され、岩久保字岩窪、上久保字上井詰、下久保字加室、高野字殿平、宮久保字上八野田、他数遺跡で発見されている。縄文時代中期では定着型の集落が出はじめる。上久保字中原からは、酒醸造具に使用されたといわれる有孔鍔付土器が農作中に掘り出されている。又中原遺跡は、昭和47年に中央道建設に先立って緊急調査が実施され、10軒の縄文時代中期の住居址が発見された。その大部分は曽利式期（縄文時代中期後半）である。縄文時代後期は、中期に比べて、遺跡数の少なくなる時期である。後期の遺跡としては、宮久保の上平井出遺跡があり、中央道建設に伴う発掘調査で後期の敷石住居址が１軒発見

されている。縄文時代晩期は、上笹尾字雪車、上笹尾字源氏籠、上笹尾字猟尾の遺跡で晩期終末の土器が出土している。弥生時代の遺跡は、雪車遺跡、茶屋久保遺跡、夏秋遺跡、源氏籠遺跡、田頭遺跡、長尾根遺跡、猟尾遺跡、江戸山遺跡、向原遺跡、頭佐沢南遺跡、篠八田遺跡の他数遺跡が発見されている。中でも弥生時代中期初頭の遺跡が多く、この後の弥生時代後期の遺跡数は、少くない。続く古墳時代は、高塚古墳の時代である。町内において、明瞭な古墳時代の遺跡は発見されていない。しかし、少量ではあるが、4世紀中頃の遺物が、松向の宝ケ森遺跡で発見されている。調査によっては、今後、新たに発見される可能性は高いであろう。歴史時代の奈良平安になる遺跡の数は増してくるが、小淵沢町内では、奈良時代の遺跡は確認されていない。平安時代集落の存在したことは上平出遺跡や中原遺跡、前田遺跡で確認されているが、分布調査においても、26ケ所の存在が知られる。平安時代の八ケ岳山麓は牧場や荘園関係で人々が山野に入り込み、盛んに開墾した時代で、集落数も急増する。水田耕作のできそうな湿地帯に面した丘陵上に立地することが多いことから、定住的な生活が想像できる。

中世以降の遺跡としては、下笹尾に地元では城山と呼ばれている「笹尾塁跡」があり、七里岩上の要地に位置し、土塁の形跡を処々に残している。又本塁跡の南には、数十人を入れる洞穴があり、この穴で警鐘を打ち鳴らしたと伝えられている。なお、本塁跡周辺の地名、小字の中には、北に「馬場」、「馬場の井戸」、北東に「御所屋敷」、「上屋敷」、東に「上屋敷」、東屋敷」、「中屋敷」、「御蔵屋敷」、「堀の内」などが見られ、この塁跡の歴史的な姿を残していると思われる。



第３図　遺跡位置と小淵沢町の遺跡

小淵沢町の遺跡

No.	遺跡名	所在地	地目	地形、標高	遺物	備考
1	上前後沢	岩久保上前後沢	畑、桑	尾根 940	縄文中(新道、曾利)、平安	
2	下前後沢	岩久保下前後沢	畑、桑、山林	〃 860	縄文中(五領ヶ原)、平安	
3	岩窪	岩久保、岩窪、岩窪前	畑、桑、宅地	〃 850	縄文前(諸磯B、十三菩提)中(五領ヶ台、藤内、曾利)	(文)信濃14の3 S37. 武藤孟 (所)大阪市立博物館、町教育委員会 (旧)岩窪前 S38. S47.
4	上宮原	岩久保、下原、上久保、上宮原	畑、桑、山林	〃 820	縄文中(五領ヶ台、曾利)	(旧)下原遺跡 S38. S47 S47.
5	竹原	上久保竹原、宗高上宮原	桑	〃 870	縄文中(井戸尼、曾利)平安	(旧)宗高B遺跡 S47.
6	宗高	上久保宗高	畑、桑、山林	〃 890	縄文中(曾利)後(堀の内)	(旧)宗高A遺跡 S47.
7	中原	上久保中原	畑、牧草、桑	〃 920	縄文中(五領ヶ台、新道、藤内、井戸尻、曾利)後(堀の内)平安	(文)山梨県中央道発掘調査報告書 S49. (所)山梨県教育委員会、井戸尻考古館
8	上井詰	上久保上井詰	山林、畑	〃 940	縄文前(諸磯C)中(井戸尻、曾利) 後期	(所)進藤亮三 S38.
9	淵平	尾根淵平	宅地、畑	〃 850	縄文中(井戸尻、曾利)	S38.
10	天神宮	上久保、天神宮下久保、東窪	宅地、畑	〃 840	縄文中(五領ヶ台、新道、藤内、井戸尻、曾利)後(堀の内)	(所)小林潤三(八ヶ岳山荘) (旧)東窪 S47.
11	下久保	下久保石上り	畑	〃 820	平安	
12	加室	下久保加室	畑、桑	〃 810	縄文前(十三菩提)中(五領ヶ台、井戸尻)	
13	高野	高野舟久保	桑、宅地	〃 820	縄文前、中(井戸尻、曾利)後	S38.
14	殿平	高野殿平	宅地、畑	〃 850	縄文中(井戸尻、曾利)	S38. S47.
15	前窪	高野前窪	畑、桑	〃 790	縄文前(諸磯C)中、平安	
16	上八里田(宮久保)	宮久保上八里田	畑、桑	〃 820	縄文前(諸磯)中(藤内、曾利)	
17	西屋敷	宮久保西屋敷、家の前	宅地、桑	〃 830	縄文中、平安	
18	深沢	宮久保下深沢、上深沢	山林	〃 820	縄文前(諸磯A)中期(曾利)	
19	上深沢 A	宮久保上深沢	宅地	〃 830	縄文中(曾利)	(所)町教育委員会
20	上深沢 B	〃 上深沢	墓地	〃 850	一字一石経70コ	(所)名取保
21	原東沢	〃 原東沢	宅地、畑	〃 870	縄文中、晩(後半)	(所)大正堂
22	小淵沢中学校々庭	〃 古番屋	学校	〃 910	縄文中、弥生(中)	(所)小淵沢中学枚
23	上平井出	宮久保上平井出	道路、宅地、畑	〃 910	縄文中(五領ヶ台、藤内、井戸尻、曾利)後(称名寺、堀の内、加曾利B)平安	(旧)下平井出 (文)山梨県中央道報告書 S49. (所)県教育委員会
24	下平井出	宮久保下平井出	道路、桑	〃 900	縄文中(曾利)	
25	茶屋久保	上笹尾、茶屋久保	桑、宅地	〃 870	縄文前(十三菩提) 弥生中	
26	夏秋	上笹屋、夏秋	桑、畑	〃 850	縄文前(諸磯C)中(五領ヶ台、曾利)弥生中、(先土器)	
27	中深沢	上笹尾、中深沢	桑、畑、山林	〃 800	縄文中	
28	加倉 B	下笹尾加倉	畑	〃 800	縄文前(十三菩提) 中(五領ヶ台)	S47.
29	加倉 A	下笹尾加倉	畑、山林	〃 790	縄文中	S47. (旧)天狗岩
30	田頭	下笹尾田頭、天狗岩	畑、桑	〃 790	縄文前(諸磯C) 中(井戸尻、曾利) 弥生中	
31	耕地久保	下笹尾耕地久保	桑	台地 770	縄文中	
32	笹尾塁跡	下笹尾耕地久保	桑、山林	尾根 750	縄文前(諸磯)中世	(文)笹尾塁跡(町教委)
33	雪車	上笹尾雪車、下笹尾宮の前	畑、宅地	〃 790	縄文中(曾利) 弦生中	
34	源氏籠	上笹尾源氏籠	畑、水田	〃 800	縄文早、前(諸磯A、B) 中(五領ヶ台、新道、藤内、井戸尻、曾利)後(堀の内)晩(氷)弥生中	(所)今井兵衛

№	遺跡名	所在地	地目	地形、標高	遺物	備考
35	長尾根	上笹尾長尾根	畑、水田	尾根 820	縄文前(諸磯C)中(五領ヶ台、曾利) 弥生中、平安	
36	滝の前	上笹尾滝の前	水田、畑	斜面 870	縄文前(諸磯B)中(井戸尻、曾利)後(堀の内)	S38.
37	中林	上笹尾中林2166	宅地、桑、畑	尾根 820	縄文中、平安	
38	御崎	上笹尾御崎	畑、桑	窪地 790	縄文中、平安	
39	鼡尾(ネゾー)	上笹尾鼡尾	宅地、畑、桑	尾根 790	縄文前(諸磯B) 縄文中(五領ヶ台、藤内、曾利) 後(堀の内)弥生中、平安	㊀青木春重 ㊁根造 S47.
40	寺田	上笹尾寺田	宅地、桑	〃 795	縄文中、平安	
41	江戸山	下笹尾江戸山	桑	〃 780	縄文前(十三菩提)中(曾利)弥生中、平安	
42	西堀込南	上笹尾西堀込	桑	〃 800	弥生中	
43	西堀込北	上笹尾西堀込、高原	桑、畑	〃 810	縄文前(諸磯B)中(五領ヶ台、曾利)	㊁高原 S38. S47.
44	上駒場	上笹尾上駒場	桑、牧草	丘陵 840	弥生中	
45	穴之沢	上笹尾穴之沢	桑、牧原	尾根 840	縄文中(五領ヶ台)	
46	西三蔵主	上笹尾西三蔵主	桑、畑	〃 840	縄文前(諸磯C) 中(五領ヶ台)平安	
47	柳沢北	松向柳沢	桑、山林	斜面 820	縄文中(五領ヶ台)	
48	宝ヶ森	松向宝りヶ森	桑、畑	800 800	縄文中、古墳時代	
49	本村	松向本村	桑、宅地	〃 780	平安	
50	前田北	下笹尾前田北	桑、宅地、水田	〃 770	縄文前(諸磯B)中(曾利)平安	
51	深町	松向深町	桑、畑	〃 770	縄文中(五領ヶ台、曾利)平安	
52	前田南	下笹尾前田南	水田、畑、桑	丘陵 750	縄文中(曾利)後(堀の内)平安	
53	蔵屋敷	下笹尾蔵屋敷	畑、宅地	斜面 740	縄文中、平安	
54	向原	下笹尾植木林向原	桑、山林	丘陵 740	縄文中(藤内)弥生中	
55	頭佐沢南	下笹尾頭佐沢	山林、桑、牧原	尾根 710	縄文中、弥生中	
56	頭佐沢北	下笹尾頭佐沢	桑、山林	〃 730	縄文中	
57	横山	松向横山	桑、山林	斜面 810	縄文中	
58	杉の木平	松向杉の木平	桑、畑	〃 810	(旧石器)縄文中、平安	
59	柳沢南	松向柳沢南	桑、山林	尾根 810	縄文中	㊁柳沢 S47.
60	神田	松向神田	桑、牧草	〃 840	縄文晩、弥生中、平安	㊁神田とは別遺跡
61	小野	上笹尾女取区小野	桑、畑	〃 870	縄文中(井戸尻、曾利)平安	
62	広面南	松向広面	桑、畑、山林	丘陵 710	縄文中(曾利)平安	
63	広面北	松向広面	桑、畑	微高地 710	平安	
64	篠八田	上笹尾女取区篠八田	桑、畑	尾根 910	縄文中(曾利)晩(未)弥生中	㊁篠原御料地 S38. S47.
65	上圧	尾根上圧	宅地、畑	斜面 890	縄文中 (曾利) 平安	
66	天神森	尾根天神森	宅地、畑	斜面 900	縄文中(井戸尻) 弥生	
67	西上圧	尾根西上圧	宅地、畑	尾根 920	縄文中	削平されて消滅か(?)

Ⅲ. 遺　　構

1. 竪穴住居址

第２号住居址（第４図）

平面プランは南北 5.2 メートルを測り、隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方向はN―95°―Wを示している。壁は床面から外傾斜しながら立ち上がり、壁高は40センチを測る。床面はロームに白色粘土が混入した状態で平担に固くしまっていた。柱穴は１個確認され、径40×50センチの円形を呈し、深さは70センチを測る。柱穴の底には10×30センチの平石が置かれていた。

ピットは東壁の中央下に直径70×70センチの隅丸た形を呈し、深15センチを計測して検出された。断面形は皿状を呈する。ピットの覆土は５層に分かれ、焼土を基調とする土層に炭化物を含み、中層には焼けたロームブロック、下層には多量の炭化物がみられた。底面及び壁は焼成を受けて硬化している。本ピットの周辺を中心に数個の鉄滓が出土し、数片の鉄片も認られることから小鍛冶用の炉の可能性がある。本ピットの北側で東壁に寄りつくようにして、20～40センチの角礫があり、上面はなにかでたたかれような剥離痕が明瞭に残り、小量の鉄分が付着し、一部は赤く変色していた。小鍛冶の作業に関係する台石と考えられる。

カマド

カマドは、東壁の南偶に構築され、全長 1.4メートル、幅50センチの石組粘土カマドである。カマドの袖部は、平石を芯に白色粘土とロームで固めたものであった。焚口部は両袖部に位置するもので、焼土が厚く堆積していた。この焚口部の前に張り出した形で楕円形の掘り込みがある。床面からの深さ25センチで皿状を呈している。支脚は幅約10センチ、長15センチの長方形を呈した角礫である。煙道部は、壁体を半円状に若干掘り込み底部は楕円形を呈し、底部から緩らかな傾斜をもつて立ち上がっている。火床部は壁下の床面を楕円形に掘り窪めたものである。本カマドは袖部、煙道部が強い熱をうけて赤変して、ボロボロした状態となっている。

出土遺物（第10図、第11図、第12図）

本住居址より出土した遺物は、土師器坏、土師器甕、須恵器壷、須恵器甕、緑釉陶器、鉄滓で総数 240点であった。出土遺物のうち35点を精選して実測に示した。

第５号住居址（第５図）

平面プランは、ほぼ正方形で各壁の長さはそれぞれ、東壁４メートル、南壁 4.4メートル、西壁4.4メートル、北壁 4.2メートルである。主軸方向はN―65°―Wを示す。壁はほぼ垂直に

立ち上がり、現在高は約60センチを測る。壁際には壁溝が巡る。壁溝幅20～30センチ、深さ15～20センチを測り、断面形はU字形を呈する。床面は全体に白色粘土と黒褐色土を混ぜた土を貼床として使用しているが、遺存状態は全体に軟弱で悪い。柱穴は、認められないが、床面直上に15～20センチ大の扁平な石が北壁付近と住居の中央、又南壁の東隅に認められ、石の位置、形態、石の大きさ等から、本住居址に認められた石は礎石としての用途をもつたものと考えられる。ピットは東南隅に直径60～100 センチの不整円形を呈し、深さ25センチを測り検出された。

カマド

カマドは東壁の南寄りにあり、全長 1.5メートル、幅80センチの規模を有する。遺存状況は悪い。壁体を幅50センチ、凸字形に約20センチ切り込んで煙道部を作る。袖部は火床部の両側に平石を立てて、それを被うようにして白色粘土、ロームブロックを構築材とし使用していたものと思われる。天井部は既に崩落し、旧状をとどめないが、白色粘土、ロームブロックと平石が構材となつていたと考えられる。支脚は検出されなかつた。火床部は煙道部下の床面を50～70センチの楕円状に掘り込んでいる。煙道部は、燃焼部より急激に立ち上がり、断面はU字状を呈する。焚口部は加熱による赤化現象が著しく認められた。

出土遺物（第13図）

本住居址からは、土師器坏、土師器甕、砥石等総数約50点が出土した。このうち図示しえたのは土師器11点と砥石１点である。

第６号住居址（第６図）

平面プランは東壁 4.2メートル、南壁 4.4メートル、西壁 4.4メートル、北壁 4.3メートルを側り、南北にやや歪んだ方形を呈する。主軸方向はN―68゛―Wを示す。壁は､ほぼ垂直に立ち上がり現在高は、50センチを測る｡壁溝は４壁下を一周しているが､幅10～20センチと一定ではなく、深さは10センチ内外である。床面は堅く踏み固められ、若干の凹凸はあるもののおおむね平担であった。柱穴と考えられるピットは東壁の中央下、南壁の中央付近、西壁コーナー付近の３ケ所で検出された。ピット１は東方向に傾斜をつけて掘り込まれ、径30センチ、深さ48センチの円形を呈する。ピット２は径15×20センチの円形を呈し､10 センチの深さを有す。P3 は西壁より続く溝の先端につくピットで円形を呈し、径20センチ、深さ25センチを測る 。東壁より北壁に平行にのびる溝があり、溝は一見、間仕切りのように見えるが、本住居址の規模から考えて、拡張による何らかの痕跡を示すものかよくわからない。住居址の中央部に径80～90センチ、深さ15センチの不整円形を呈するピットが認められ、ピットの覆土は焼土と灰層を中心にしたもので、ピット内には２個の平石がみられ、ピットの壁から底にかけて赤く焼け

変色していた。このピットの東上に25～30センチの平石が据えられ、平石の上面は剥離痕があり、一部に鉄分が付着していた。又ピットと平石の周辺からは数個の鉄滓が出土している。ピットは小鍛冶用の炉であり、平石は台石と思われる。

カマド

本住居址のカマドは東壁の南側に構築され、全長 1.4メートル、幅50センチの石組カマドである。極めて良好な遺存状態で検出された。カマドを構成する土層はやや黒味をおびている。袖部の芯には平石を２枚重ね合わせのように配し、それを白色粘土、ロームブロックを混ぜた土により補強している。天井部はすでに崩落してないが、一部に、30～50センチの石を使用し、アーチ状に袖部にのせられていた。燃焼部は最大幅50センチ、奥行１メートルである。焚口部は床面を約10センチ掘り込み、平面は方形を呈する。焚口部の両壁は火をうけて堅くしまっている。カマドの中央には多角柱状の角礫を直立させ支脚としている。煙道部は壁を約30センチ掘り込まれ、急傾斜をもつて立ち上る。

出土遺物（第14図、第15図）

本住居址より出土した遺物は、土師器、須恵器であり、総計 220点に達するが、完形品は僅かである。

第７号住居址（第７図）

平面プランは、東壁 2.4メートル、南壁 2.6メートル、西壁 2.4メートル、北壁 2.4メートルの隅丸方形を呈している。主軸方向は、N―69°―Wを指示する。壁は床面より垂直に立ちがり、壁高は約40センチを測る。壁体はやや軟弱である。床は比較的良好で、ロームブロックと白色粘土を使用して貼床にしており、中央部分は非常に堅く、周辺部になるにつれて黒色が混入し、軟弱な状態となる。壁溝は幅15～20センチ、深さ約８～10センチで全周する。断面形はU字状を呈している。柱穴は住居址内の精査にもかかわらず確認することはできなかった。柱穴は認められなかったが、北壁の西側に２個の上面が平担な平石が置かれ、礎石的な用途をもつものかもしれない。

カマド

カマドは東壁の南側にあり、全長1.15メートル、幅１メートルの規模を有する。遺存状況は非常に悪い。煙道部は壁を20センチ、幅40センチを計測する。袖部は、地山を整形して構築したように見受けられるが、袖となる石を抜きとつたものと思われる。焚口部に長さ50センチ、幅25センチの石が落ちこんでいた。燃焼部は床面を約10センチ掘り込み、南北60センチ、東西１メートルの楕円形を呈しており、焼土の多量な堆積がみられた。焚口部は、床面を掘り込ん

であり、焼土、白色粘土、炭化物の堆積が見られる。

出土遺物（第16図１～３）

本住居址の出土遺物は、土師器で総数30点を数えた。出土遺物のうち図示できたものは３点である。

第８号住居址（第８図）

本住居址は９号住居址を切り込んで構築されている。平面プランはわかりにくく、不整方形を呈している。壁は直に落ち込み、壁高は40～60センチを測る。床面はロームで軟弱である。柱穴、カマド、壁溝も認められなかつた。

出土遺物（第16図４）

出土遺物は灰釉陶器片１点である。

第９号住居址（第８図）

南半分は第８号住居址によって切断されている。平面プランは東壁 3.6メートル、北壁 3.8メートルで方形を呈する。主軸方向はN―60° Wを示す。壁はソフトロームより切り込まれており、壁高は約40センチで、堅緻である。床面はロームブロックに黒褐色土の混在する土をもつて貼床としている。全体的に凹凸が著しい。柱穴はない。壁溝は第８号住居址部分を除いて、周つている。幅は一定せず15～30センチとなる。深さは５～８センチである。

カマド

カマドは、東壁中央部よりやや南に寄った位置に設けられ、全長 1.2メートル、幅１メートルを測る。煙道部は、壁を約20センチ掘り込み、奥壁から急傾斜をもって立ち上がっている。煙道部の傾斜に沿って、平石が置かれ、煙道の一部を形成していると推測される。袖部は角礫状の平石を芯にして、白色粘土、ロームブロックで支える形である。焚口部の規模は比較的小さく、幅40センチ程である。袖部の内側は火熱をうけて若干赤化して堅くなっている。燃焼部は焼土が多く認められ、ここを覆っていた天井部の一部の石が残存していた。支脚を埋め込んでいたと思われるピットが検出されている。

出土遺物（第16図５～８、第17図）

本住居址からの出土遺物は、土師器、灰釉陶器で総数 160点出土した。そのうち、実測図示しえたものは、土師器19点、灰釉陶器３点である。

第10号住居址（第９図）

本住居址は、第11号住居址の西側の半分以上を壊して構築されている。平面プランは、東壁4.4 メートル、南壁 2.4メートル、西壁 4.5メートル、北壁 2.6メートルを測り、長方形を呈する。主軸方向はN―72°―Wを指示する。壁は若干の傾斜をもつ立ち上がり、壁高は約20センチを測る。壁高は全周し、幅５～30センチ、深さ10センチ前後で一定していない。柱穴は認められない。床面は全体に踏み固められ平担を呈する。東壁と西壁の隅に平石が置かれており、前述の住居址と同様に礎石の一部とも考えられる。

カマド

東壁の南コーナーにあり、カマドの遺存状態は悪い。全長90センチ、幅65センチを測る。壁を約25センチ掘り込んで煙道部とし、急角度で奥壁に沿って立ち上がっている。床面を皿状に約５センチ掘り下げて、焚口部としている。袖部は平石を芯に使用していたと思われ、北側の袖部には、袖石を抜いたピットがみられた。燃焼部には長さ16センチ、幅５センチで、高さ25センチの平石を支脚として置いている。

出土遺物（第16図10～12）

本住居址から出土した遺物は土師器、灰釉陶器で、総数10点であった。実測図示したものは３点である。

第11号住居址（第９図）

西側を第10号住居址により切り込まれている。平面プランは、東壁３メートル、南壁 3.2メートルの隅丸方形を呈する。主軸方向N―69°―Wである。床は比較的良好で、ロームブロックと白色粘土を用いて貼床としており、南壁側で軟弱、東壁側では堅い。壁はソフトロームを切り込んで作られており、壁高25センチ位で明瞭な立ち上がりをもつ、柱穴と壁溝は認められなかった。

カマド

東壁の南寄りに位置し、全長60センチ、幅70センチを測る。袖部は南側の袖石を１個残すのみで、他はすべて持ち去られている。壁を約18センチほど掘り込んで煙道部をつくり、段をもって急に立ち上がる。

出土遺物（第16図13～16、第18図、第19図６～７）

本住居址より出土した遺物は土師器で総数20点を数える。実測図示したものは11点である。

第12号住居址（第９図）

本住居址は農道工事によりほとんどが削平されていて、北壁の一部と東壁を残すのみである。平面プランは残存部から隅丸方形を呈するものと推定される。壁は堅くしまり、壁体はやや外傾斜しながら立ち上がる。壁高は15～25センチを測る。床面は凹凸のない比較的平担な床である。部分的には軟弱な場所がみうけられた。壁溝は残存部で幅10～20センチ、深さ５センチ内で形態はU字状を呈する。

出土遺物（第19図１～４）

本住居址の出土遺物は総数約30点を数えるが、実測図示したものは４点であり、すべて土師器甕である。

2. 掘立柱建物址

第１号掘立柱建物址（第20図）

本建物址は昭和57年調査（農道拡張部分）によって検出した第１号建物址の残半分である。

形態は３間（6.5 メートル）×６間（9.5 メートル）で主軸方向はN―33°―Wを向き、南北に長い長方形を呈している。柱間寸法は梁行 0.8～1.4 メートル、桁行１～３メートルである。柱穴の覆土は上層に炭化物を少量含む黒褐色土が堆積し、下部にはロームブロック含む黄褐色土が認められた。柱痕は径の大きい内側の３個より検出された。柱穴の掘り方は円形となり、外側の柱穴に比べ内側の柱穴は２～３倍と大きく、深さも深い。外側の径の小さい柱穴は庇と考えられる。

出土遺物

出土遺物としては２～３の柱穴より少量の土師器片が検出されてれているが、図示できる遺物は出土しなかった。

第２号掘立柱建物址（第21図）

本建物址は計10個の柱穴がやや不規則に配列されたもので、主軸方向をN―24°―Eにもつ、２間（2.8 メートル）×３間（4.4 メートル）の建物址である。主な柱穴の径は約30～40センチ、深20～60センチを測る。柱間寸法は、梁行 1.6メートル、桁行 0.6～２メートルである。柱穴の掘り方は円形を呈する。

出土遺物

出土遺物は土師器、須恵器破片が出土しており、平安時代のものと考えられる。

第３号掘立柱建物址（第21図）

形態は１間（３メートル）×１間（2.8 メートル）の不整正方形を呈する掘立柱建物址である。主軸方向はN―31° Eである。掘り方はほぼ円形を呈し、径は約40センチ前後を測る。柱間寸法は、梁行 2.8メートル、桁行３メートルである。柱穴内の覆土は黒褐色土の単層であった。

出土遺物

出土遺物は検出されていないが、時期は前述した掘立柱建物址の時期と同時であると考えられる。

第４号掘立柱建物址（第22図）

形態は２間（4.8 メートル）×３間(5.6メートル）で長方形を呈する。主軸方向はN―69° ―Wで他の掘立柱建物址の主軸方向と異なり、東西方向を示す。柱間寸法は梁行 2.2メートル、桁行２メートルである。掘り方は円形を呈し、径32～60センチ、深さ12～42センチを測る。柱穴内の覆土は黒褐色土が主体となり、下層になるにつれロームが混ざってくる。

出土遺物

出土遺物は２個の柱穴より少量の土師器片が検出された。時期は平安時代に比定される。

第５号掘立柱建物址（第22図）

形態は２間(5.2メートル）×２間（６メートル）で主軸方向N―67° ―Wの掘立柱建物址である。柱間寸法は梁行 2.4メートル、桁行２メートルであり、柱穴の掘り方はほぼ円形を呈し、径は28～50センチ、深さ20～40センチを測る。中央よりやや北側に偏して束柱が検出された。

出土遺物

出土遺物は柱穴内より土師器の破片数点が検出された。破片が小破片のため図示できなかった。時期は平安時代であると思われる。

3.　土師器窯址

本址は土師器などの土器の焼成場であり、２基を検出した。

第１号土師器窯址（第23図）

平面形態は不整な楕円形を呈し、径 1.4メートル×2.6 メートル、深さ15センチを測る。覆土は炭化物、焼土、灰が多く堆積し、複雑な層序を呈している。

出土遺物（第19図５）

本址からの出土遺物は土師器蓋と土師器坏の破片２点である。

第２号土師器窯址（第23図）

平面形態は楕円形を呈し、径 1.5×2.2 メートル、深さ40センチを測る。覆土は焼土、灰が主体となって層を構成している。壁は外にひらくように緩やかに立ち上がっていく。

出土遺物

本址からの出土遺物は土師器坏の破片数点であるが小破片のため実測図示できなかった。

4. 土　　壙

本遺跡から検出された土壙は10基検出された。

第３号土壙（第24図）

径36×80センチ、深さ36センチを測り、平面形態は円形を呈する。底面は平担で、壁は底面より傾斜をもって立ち上がる。

出土遺物

出土遺物は検出されなかった。

第４号土壙（第24図）

径48×60センチ、深さ32センチを測り、平面形態は不整円形を呈する。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、現存壁高は20～28センチを測る。底面は北から南にかけて低くなる。

出土遺物

出土遺物は検出されなかった。

第５号土壙（第24図）

径 1.2×0.8 メートル、深さ20センチを測り、平面形態は不整長方形を呈する。壁は底面よ

り緩やかに立ち上がっている。

出土遺物

出土遺物は検出されなかった。

第６号土壙、第７号土壙、第８号土壙は規則正しく一列に並んでいる。

第６号土壙（第24図）

平面形形は隅丸方形を呈する。径 1.2×1.4 メートル、深さ24を測る。壁は外にやや傾斜をもって立ち上がる。底面は凹凸がみられる。

出土遺物（第25図１、４）

出土遺物は青銅製煙管と寛永通宝１枚が出土した。煙管は「吸い口」部で、長さ 9.2センチ、最大径１センチ、最小径 0.5センチの大きさである。寛永通宝は、「古寛永通宝」と「新寛永通宝」の二つに大別できる。本土壙より出土した寛永通宝は古寛永通宝で、寛永13年以降約30年の間鋳造されたものである。

第７号土壙（第24図）

平面形態は隅丸方形を呈し、径 1.2×1.6 メートル、深さ20センチを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第25図３）

出土遺物は寛永通宝１枚が底より出土した。本土壙より出土した寛永通宝は、いわゆる文銭で、寛文８年（1688）から16年間にわたって江戸の亀戸村で銭造されたものである。

第８号土壙（第24図）

平面形態は隅丸方形を呈する。径は 1.2×1.4 メートル、深さ23センチを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

出土遺物（第25図２）

本土壙より出土した遺物は燧鉄１個で、長さ６センチ、最大幅 1.4センチで比較的原形を保つ。形態は上部に三カ月形のくり込みをもつ長三角を呈する、断面は上部より下部にいくに従って太くなる。一緒に小さい燧石と思われる角ばった小石が出土した。

第９号土壙（第24図）

平面形態は不整楕円形を呈し、径 1.1×1.3 メートル、深さ56センチを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底はやや起伏がみられる。中央に大形ピットを有する。

出土遺物（第26図２）

本土壙からは、中央のピット中より縄文地文で、S字状沈線文が施されている曽利Ⅱ式土器が正位に埋置されていた。

第10号土壙（第24図）

平面形態はほぼ円形を呈し、最大径 1.2メートル、深さ30センチを測る。壁は垂直に立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第26図１）

出土遺物は土壙中央より曽利Ⅱ式土器の大甕が正位に埋置されていた。

第11号土壙（第24図）

平面形態は不整円形を呈し、径 0.9×1.6 メートル、深さ26センチを測る。壁は底よりゆるやかに立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第27図１）

粘板岩ホルンフェルス製の短冊形を呈する打製石斧１点が出土した。

第12号土壙（第24図）

平面形態は円形を呈し、径0.95×１メートル、深さ45センチを測る。壁はやや傾斜して直線的に立ち上がる。底は平坦である。

出土遺物（第27図２、３）

出土遺物は、石質が粘板岩の打製石斧２点である。

5. 集 石 遺 構

本遺構は２基検出された。

第１号集石遺構（第23図）

集石は東西約80×南北約40センチの範囲にあり、10〜20センチの角礫が積み重なつて、土壙の底まで達している。集石の下は径45〜90センチの長楕円形を呈する土壙があり、最大深さは20センチを測る。

出土遺物（第27図４、５）

出土遺物は安山岩製の凹石２点である。

第２号集石遺構（第23図）

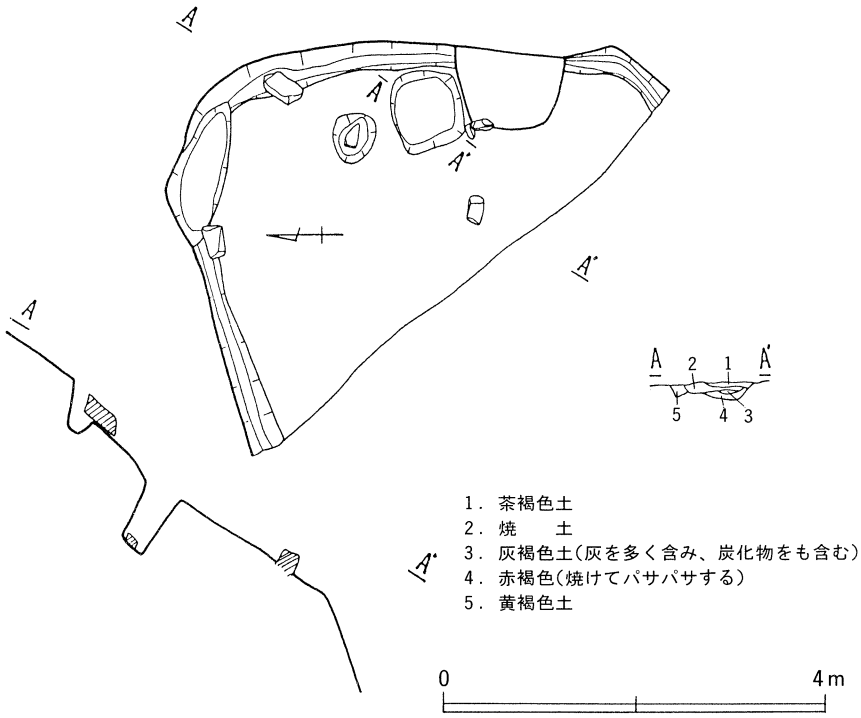
集石は東西約50×南北約60センチの範囲にある。集石は平な礫が用いられている。集石下には径50×70センチの不整楕円形を呈する土壙があり、礫は底の一部に達している。

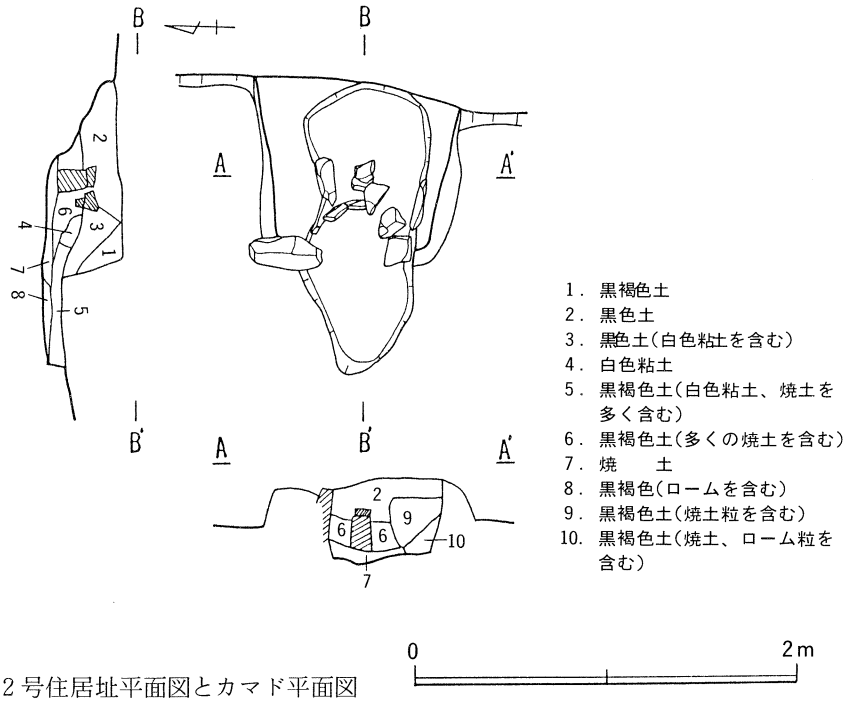
出土遺物

出土遺物は何ら検出されなかった。

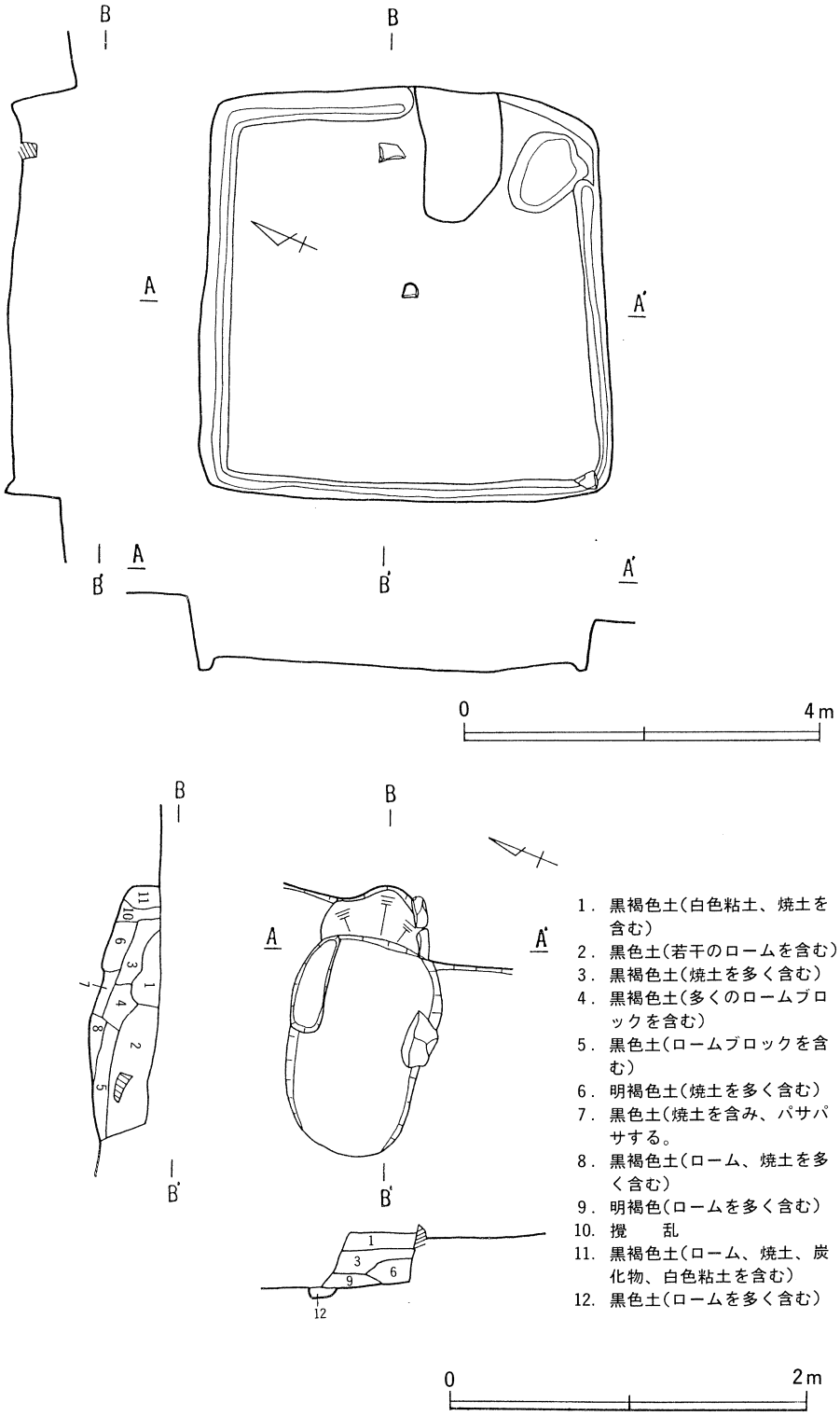
遺構外出土遺物（第25図５）

天保通宝１点が第８号土壙付近で表採された。



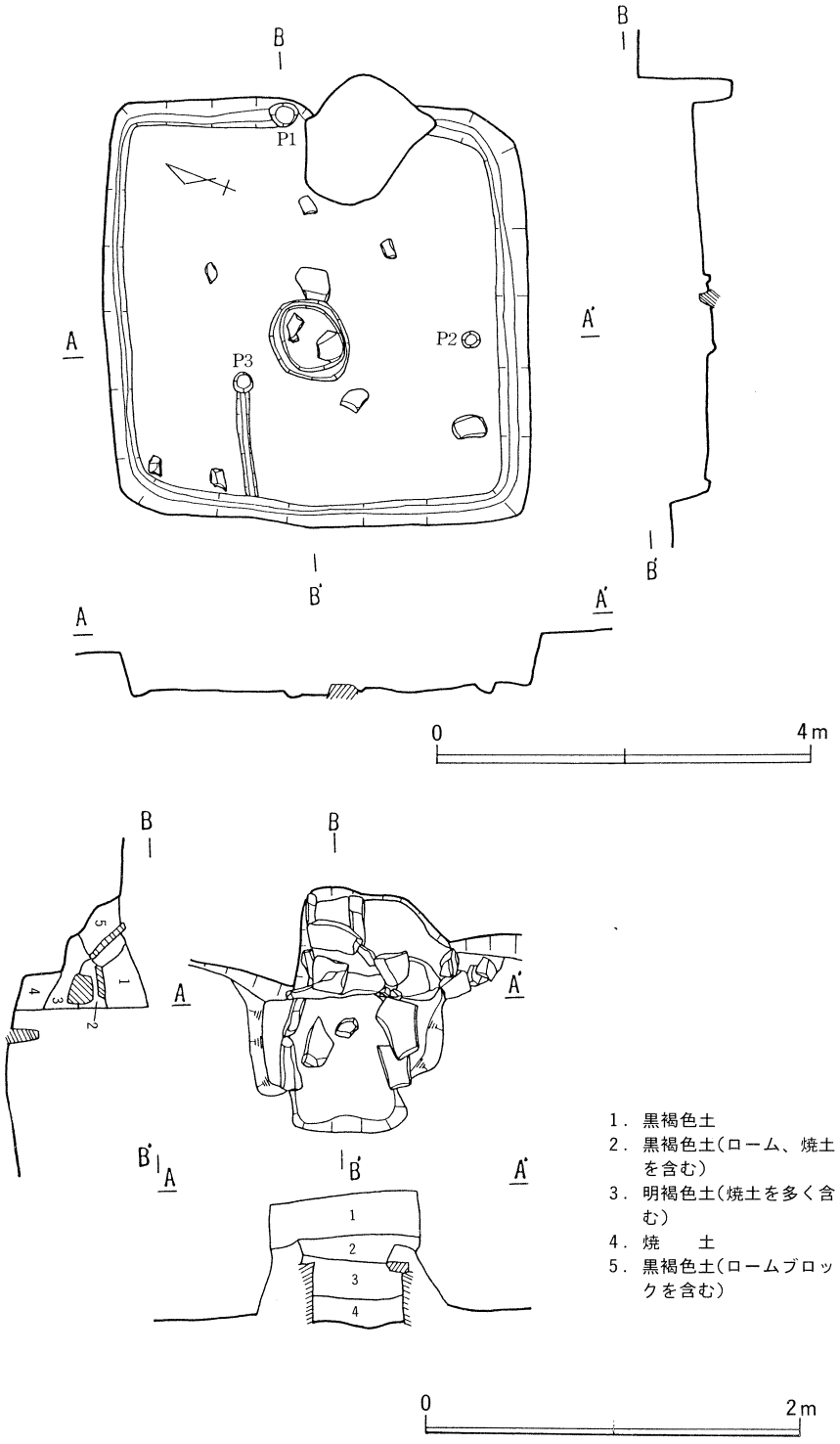


第4図　第2号住居址平面図とカマド平面図

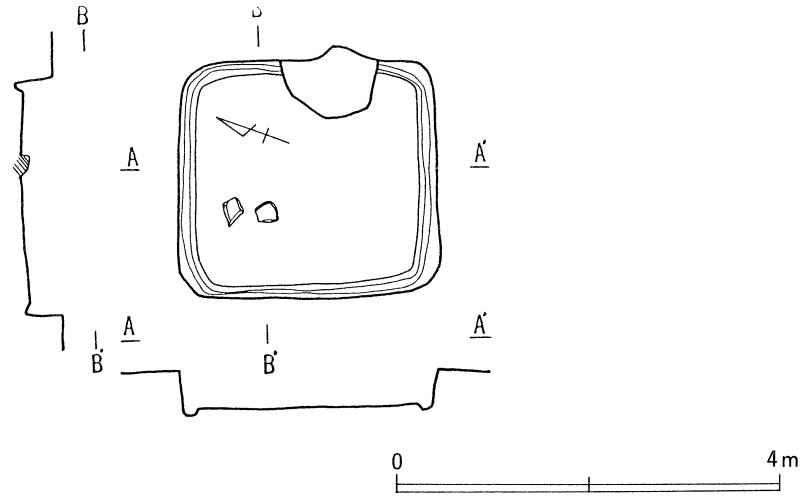


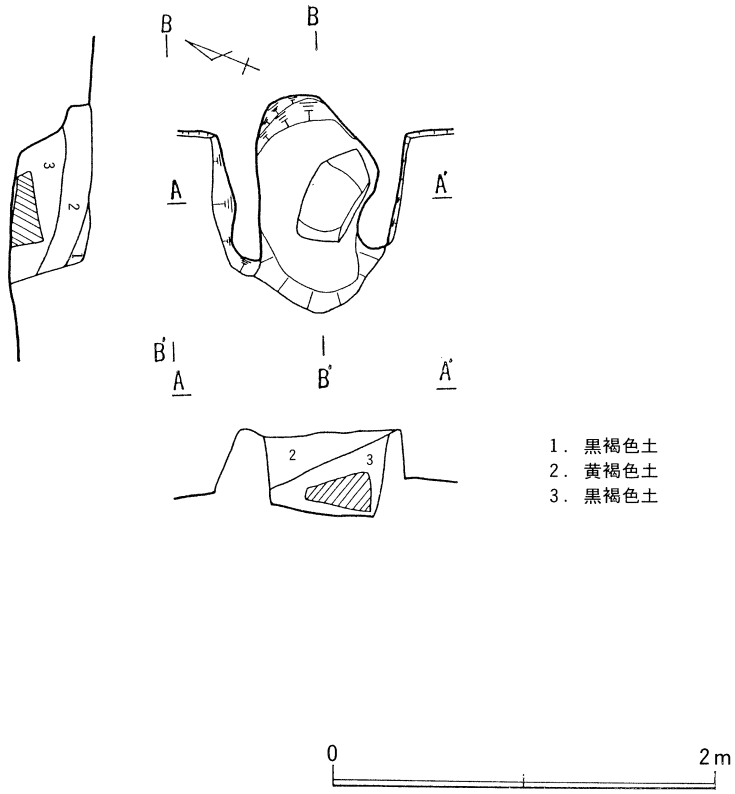
1．黒褐色土(白色粘土、焼土を含む)
2．黒色土(若干のロームを含む)
3．黒褐色土(焼土を多く含む)
4．黒褐色土(多くのロームブロックを含む)
5．黒色土(ロームブロックを含む)
6．明褐色土(焼土を多く含む)
7．黒色土(焼土を含み、パサパサする。
8．黒褐色土(ローム、焼土を多く含む)
9．明褐色(ロームを多く含む)
10．撹　　乱
11．黒褐色土(ローム、焼土、炭化物、白色粘土を含む)
12．黒色土(ロームを多く含む)

第５図　第５号住居址平面図とカマド平面図

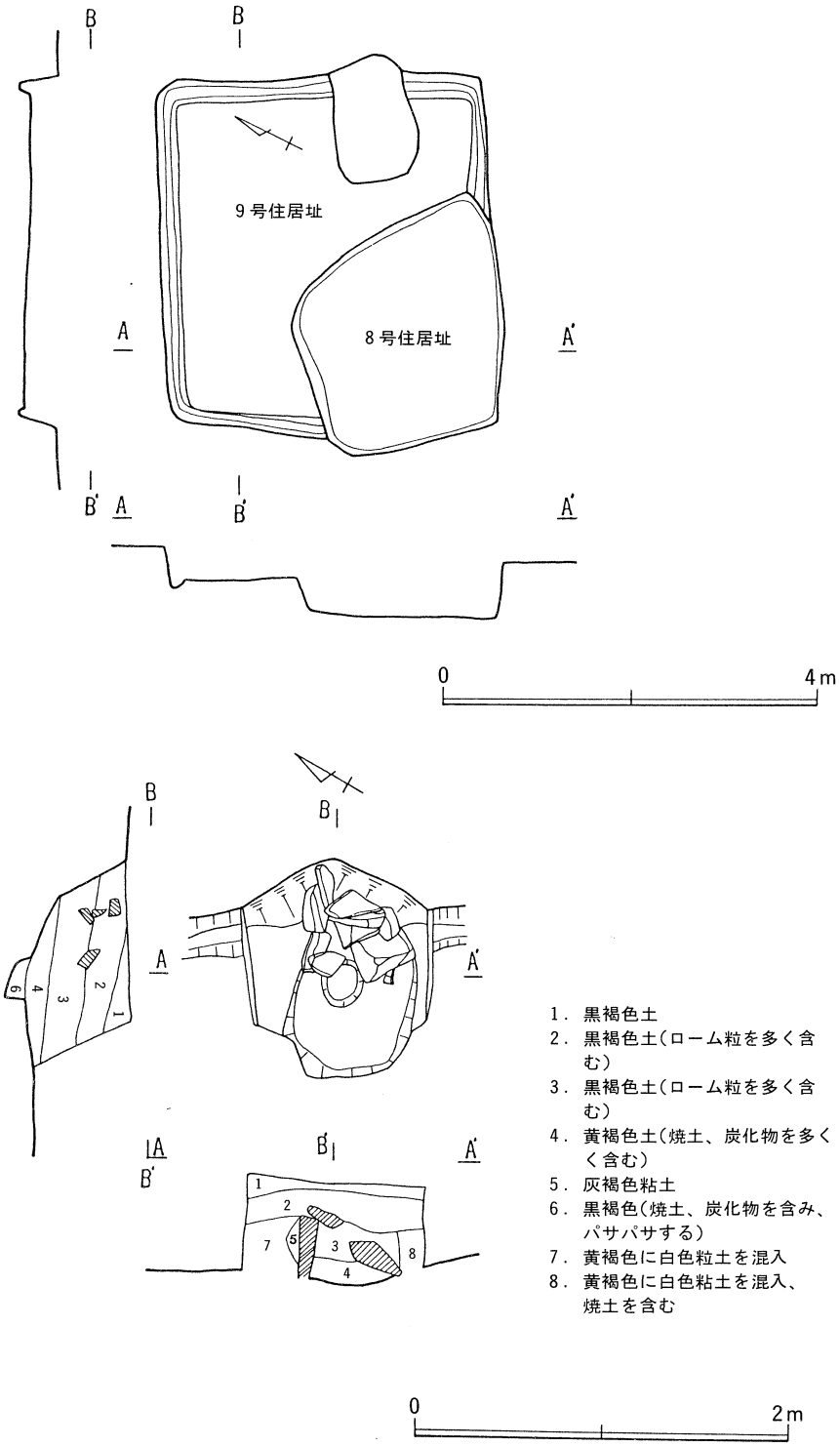


第6図　第6号住居址平面図とカマド平面図

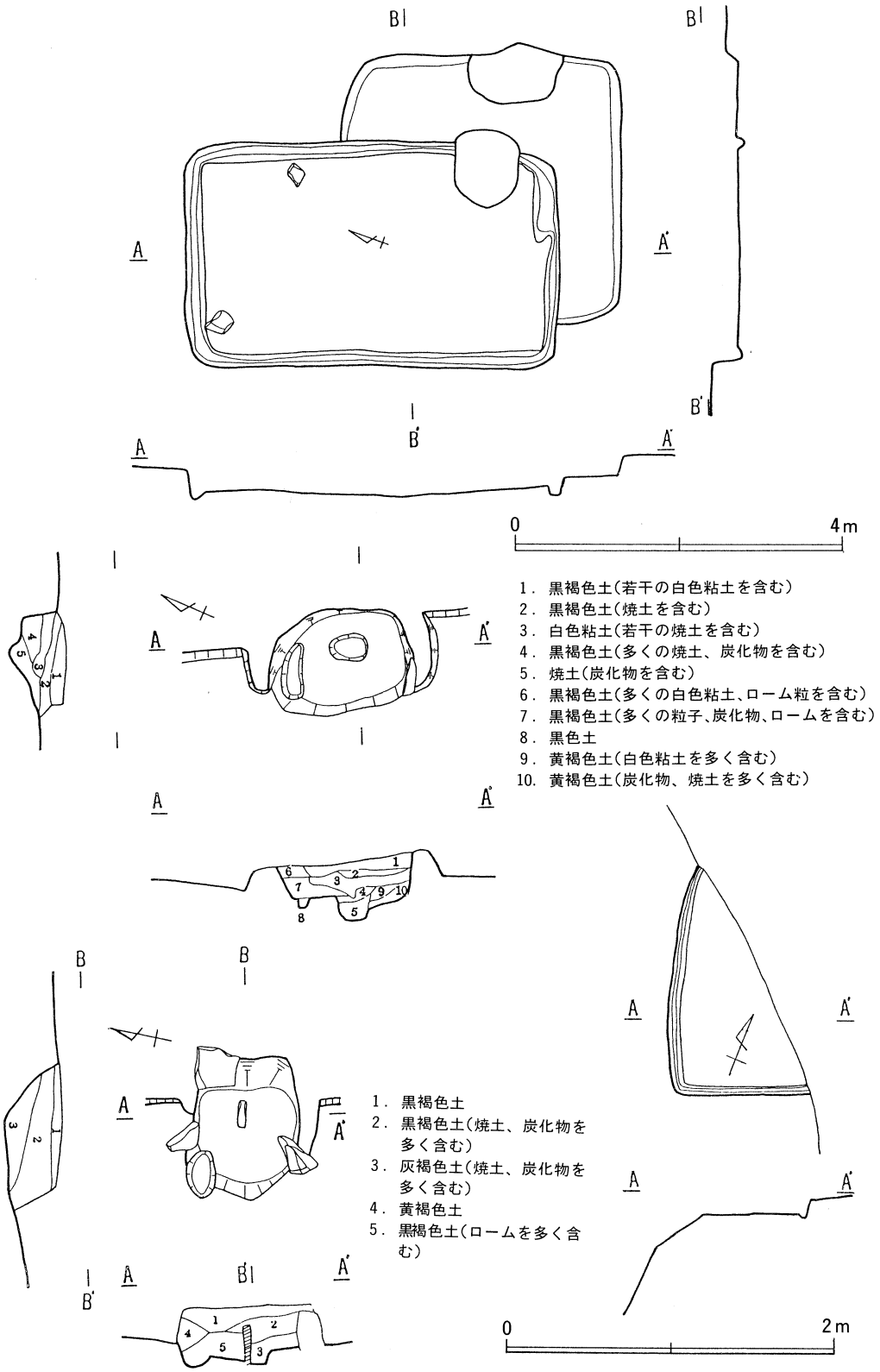




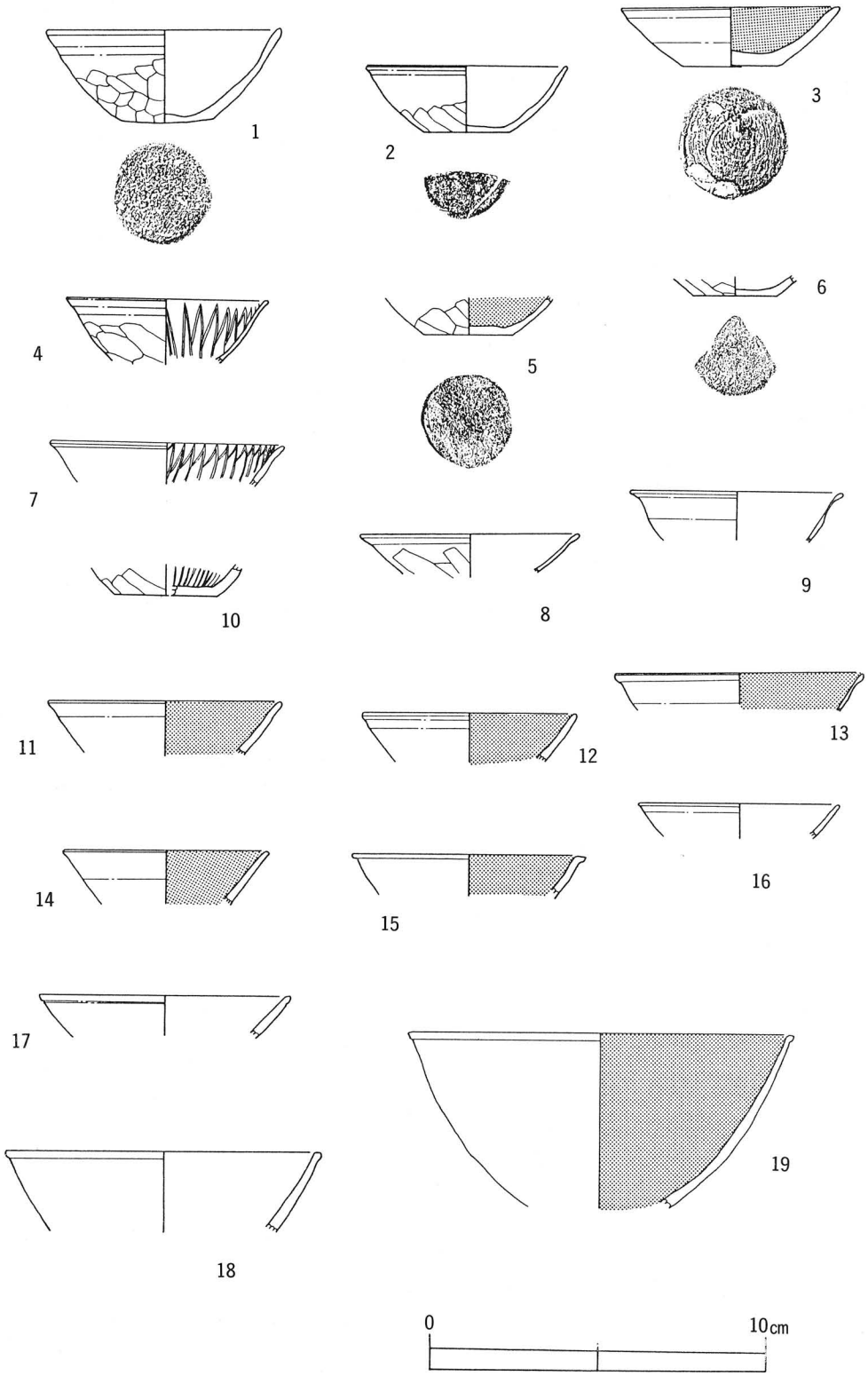
第７図　第７号住居址平面図とカマド平面図



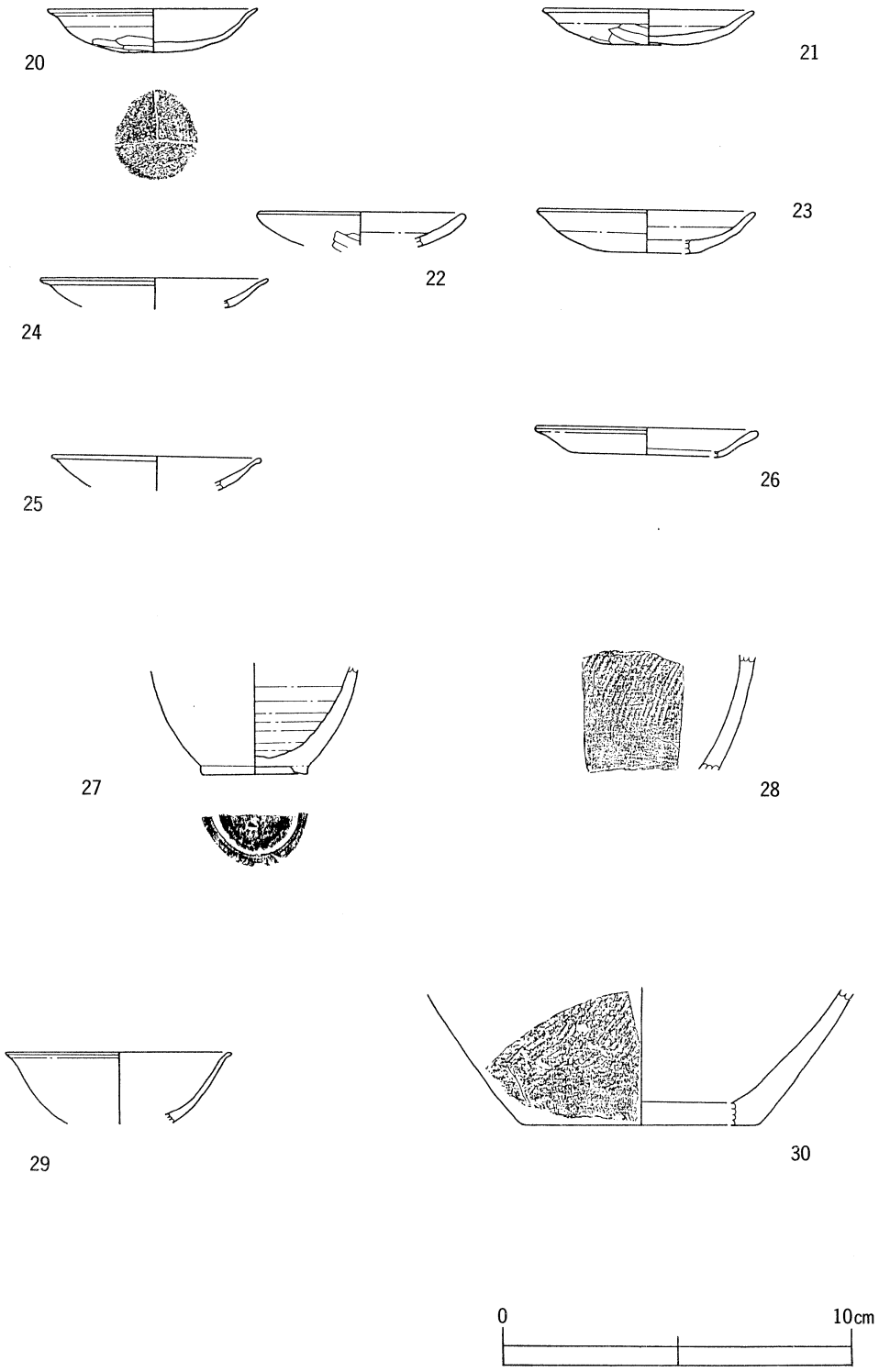
第8図　第8号・9号住居址平面図と9号住居址カマド平面図



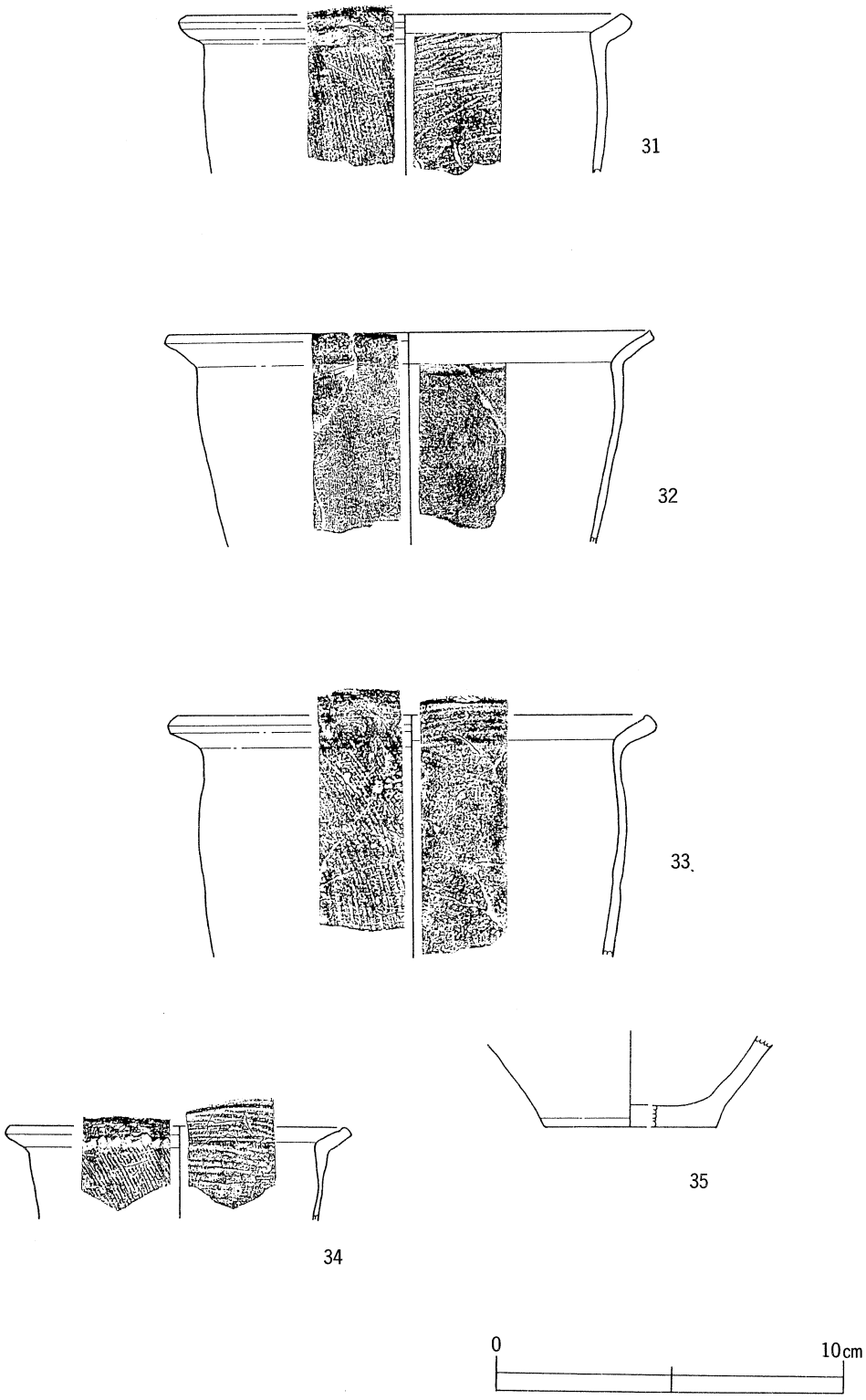
第９図　第10号・11号・12号住居址平面図とカマド平面図



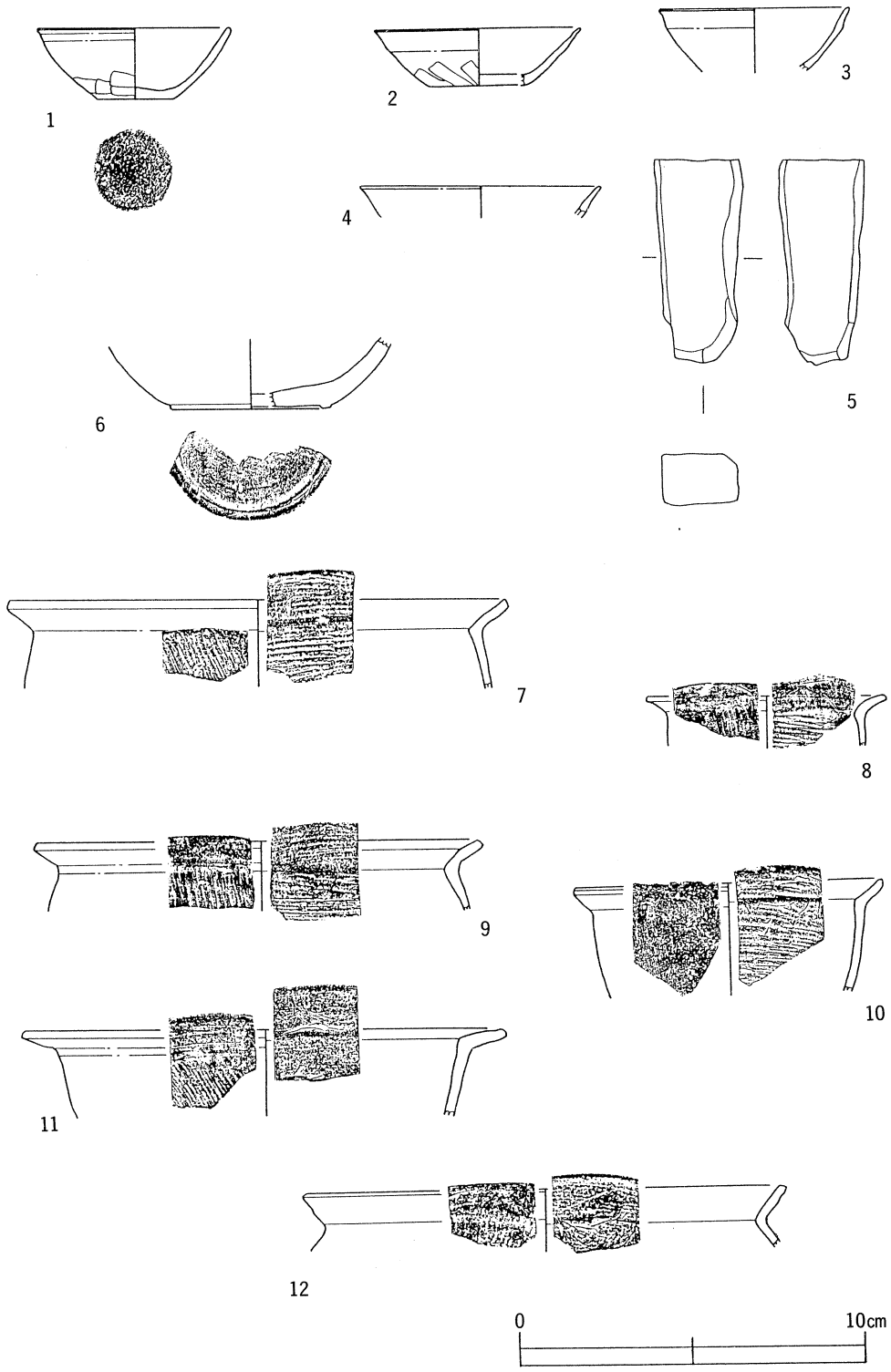
第10図　第２号住居址出土遺物(1)



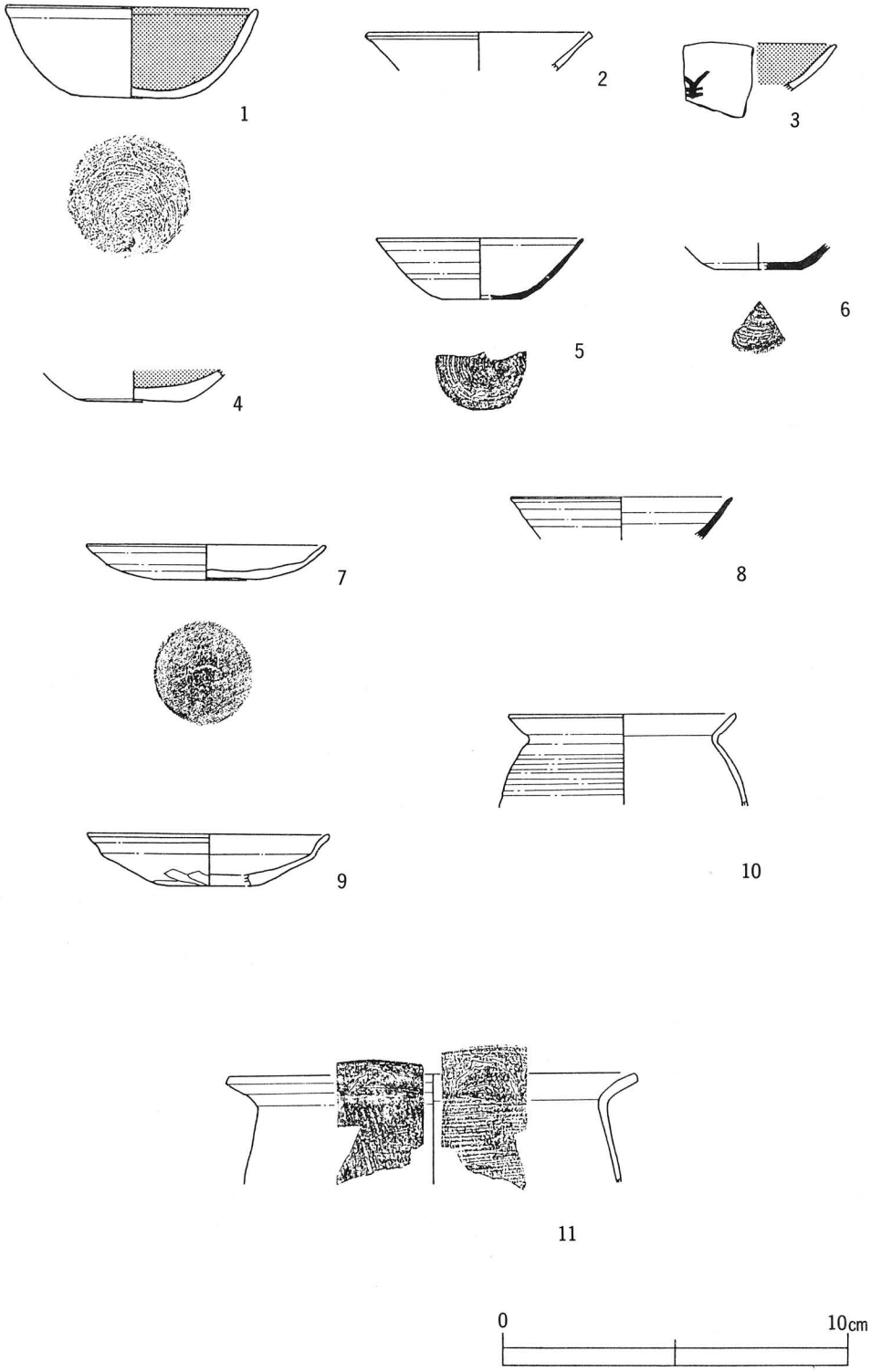
第11図　第２号住居址出土遺物(2)



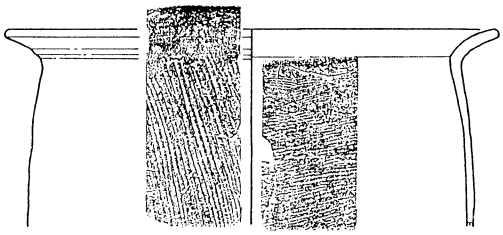
第12図　第２号住居址出土遺物(3)



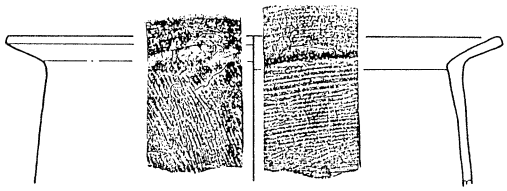
第13図　第５号住居址出土遺物



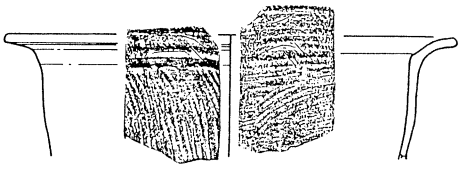
第14図　第６号住居址出土遺物(1)



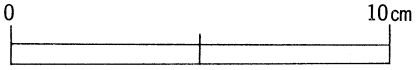
12



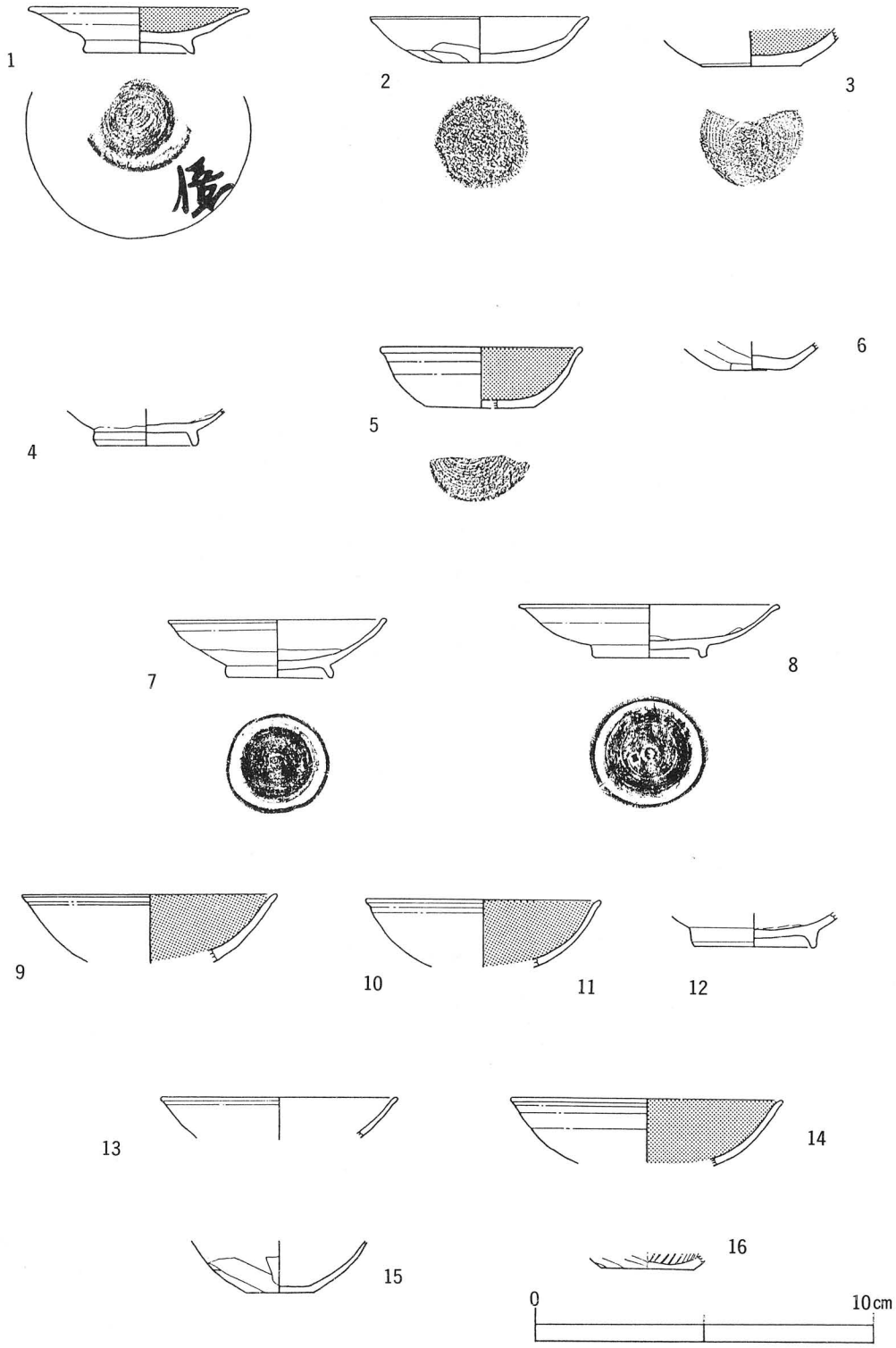
13



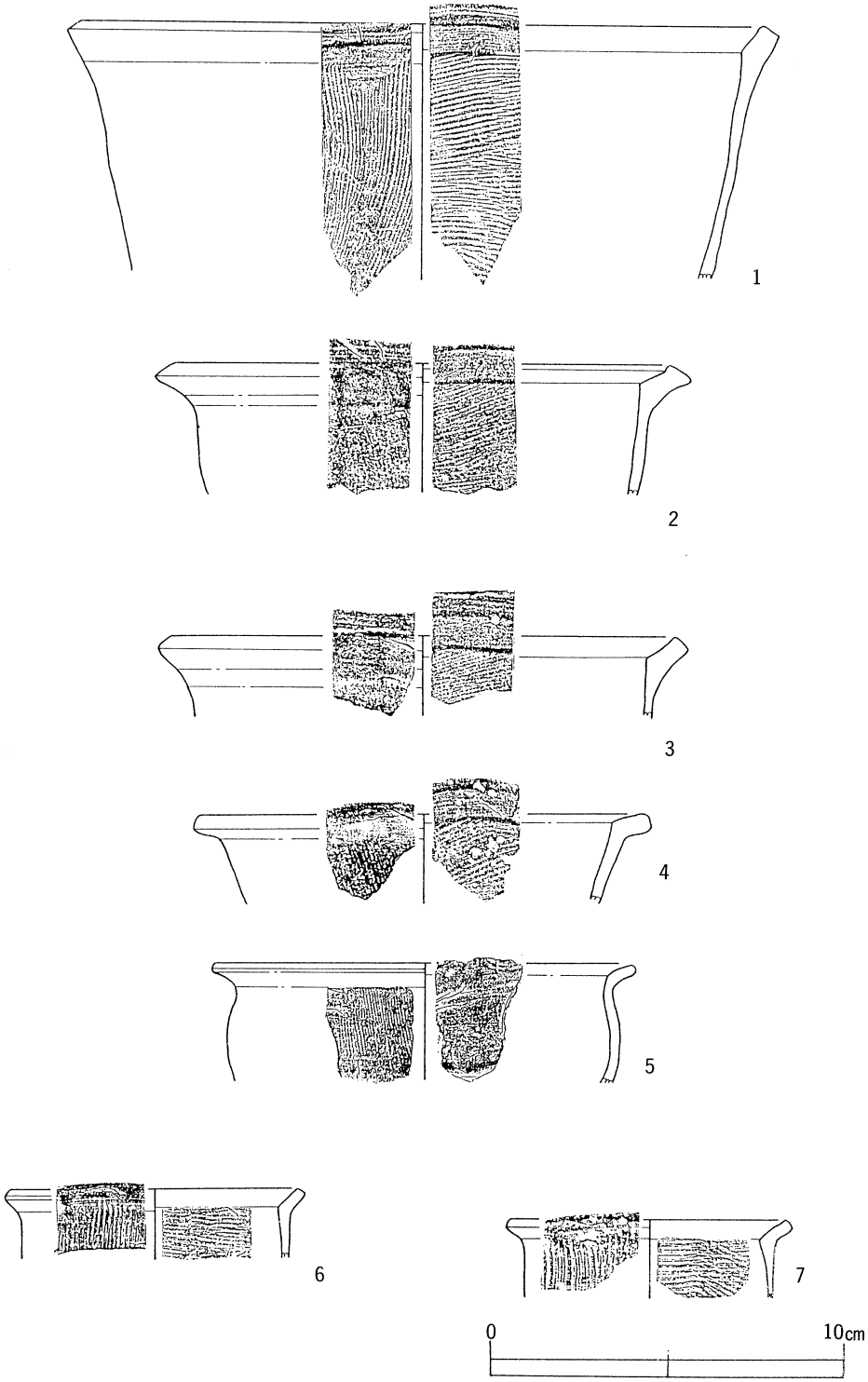
14



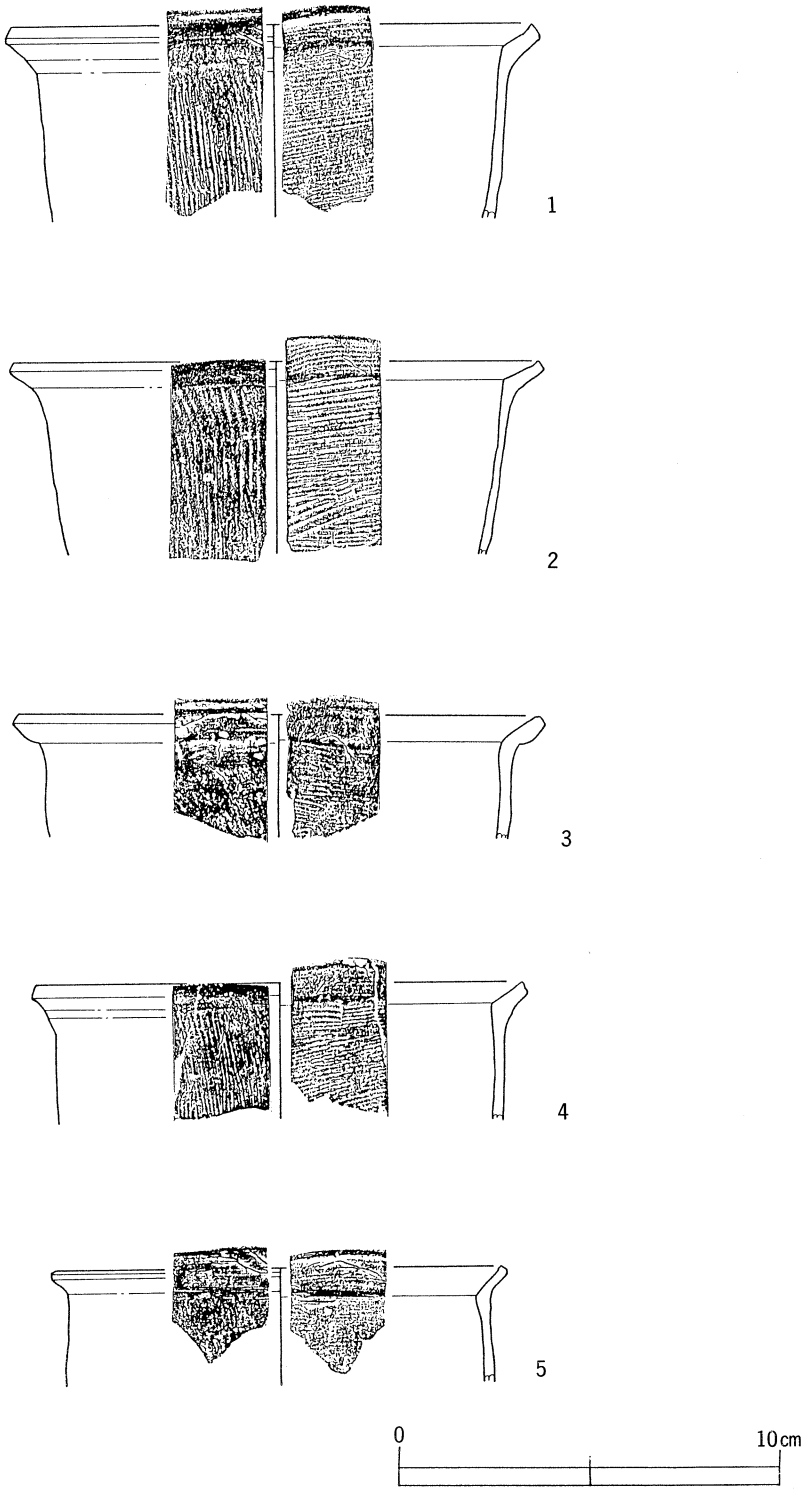
第15図　第６号住居址出土遺物(2)



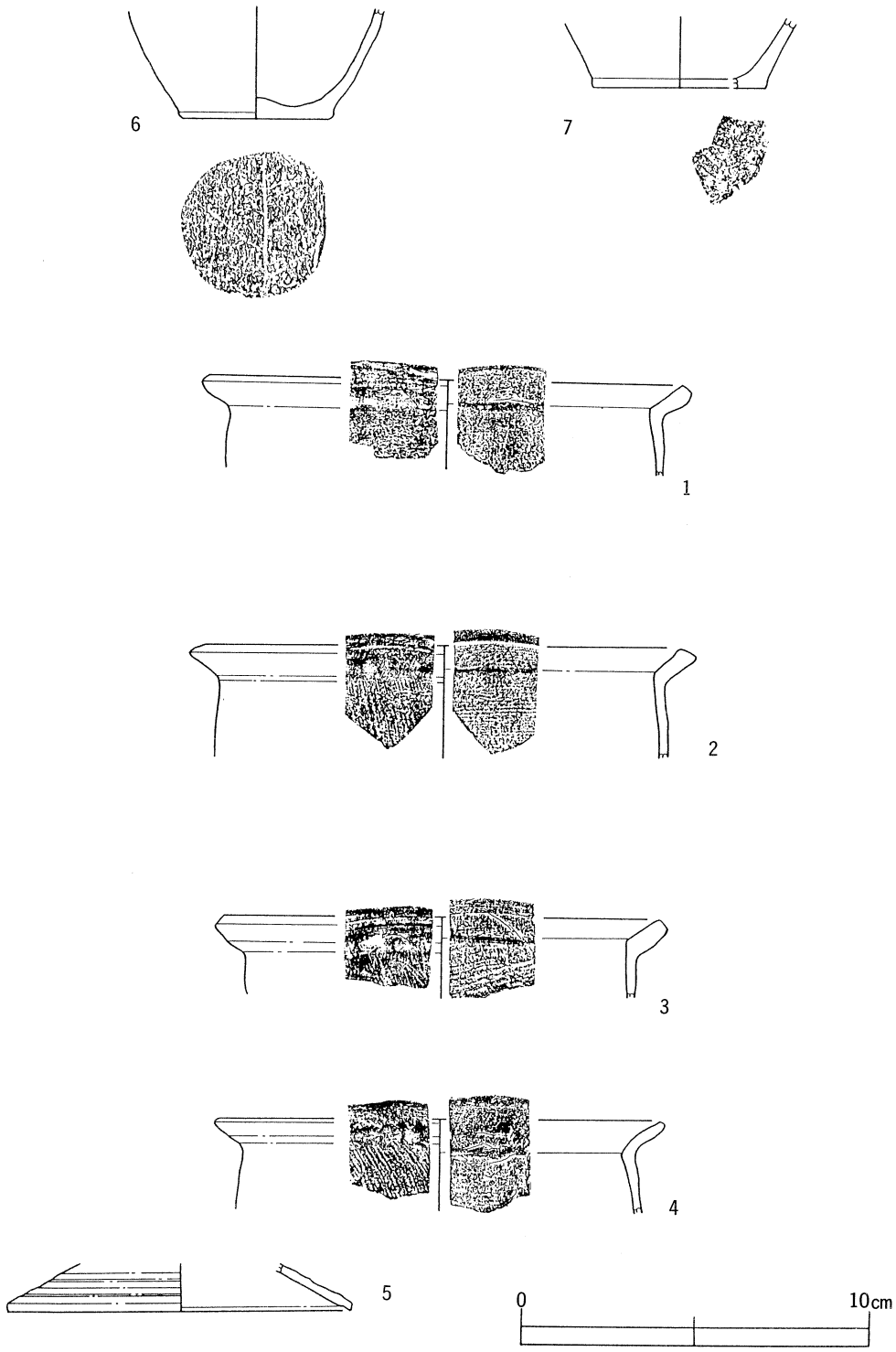
第16図　第７号（１～３）、８号(4)、９号（５～８）、10号（10～12）、11号（13～16）
住居址出土遺物



第17図　第９号住居址出土遺物



第18図　第11号住居址出土遺物



第19図　第11号（６～７）、 12号（１～４）住居址、第１号土師器窯址(5)出土遺物

図 表 I （出土遺物表）

挿図番号	器形	法量cm（口径 器高 底径）	土器の観察	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	調整 底	遺構	備考
10図 1	坏	14.0 5.6 5.5	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部尖縁	口縁部、ロクロ横ナデ、器体下半に斜位ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手持ちヘラ削り	第2号住	
10図 2	坏	12.0 4.0 5.0	胎土 砂粒を多く含む 色調 赤褐色 焼成 不良	口縁部尖縁	口縁部、ロクロ横ナデ、器体下半に斜位ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手持ちヘラ削り	第2号住	
10図 3	坏	13.0 3.5 6.0	胎土 やや粗い 色調 外 黒色 内 黒褐色 焼成 良好	口縁部尖縁で外反する。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黒色研磨	回転糸切り	第2号住	
10図 4	坏	12.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ後花弁状暗文		第2号住	
10図 5	坏	— — 5.4	胎土 精々 色調 外赤褐色 内黒色 焼成良好		器体下位に斜位ヘラ削り	ロクロ横ナデ 黒色研磨	回転糸切り後手持ちヘラ削り	第2号住	
10図 6	坏	— — 5.0	胎土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好		器体下位に斜位ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手持ちヘラ削り	第2号住	
10図 7	坏	14.0 — —	胎土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部尖縁	ロクロ横ナデ	花弁状暗文		第2号住	
10図 8	坏	13.0 — —	胎土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	口縁部ロクロ横ナデ器体下半斜位ヘラ削り	ロクロ横ナデ		第2号住	
10図 9	坏	12.8 — —	胎土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁部でやや外反する。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
10図 10	坏	— — 6.0	胎土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好		器体下半に斜位のヘラ削り	ロクロ横ナデ後方射状暗文	回転糸切り後手持ちヘラ削り	第2号住	
10図 11	坏	14.0 — —	胎土 砂粒を少量含む 色調 外黒褐色 内黒色 焼成 良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黒色研磨		第2号住	
10図 12	坏	13.0 — —	胎土 砂粒を含む 色調 外黒褐色 内黒色 焼成 良好					第2号住	
10図 13	坏	14.8 — —	胎土 精々 色調 外赤褐色 内黒色 焼成 良好	口縁部玉縁（折り返し口縁にもみられる。）	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黒色研磨		第2号住	
10図 14	坏	12.0 — —	胎土 砂粒を含む 色調 外黄褐色 内黒色 焼成 良好	口縁部丸縁上部で外反	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
10図 15	坏	14.0 — —	胎土 精々 色調 外茶褐色 内黒色 焼成 良好	口縁部屈曲縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ 黒色研磨		第2号住	鉢とも考えられる。
10図 16	坏	12.0 — —	胎土 精々 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
10図 17	坏	15.0 — —	胎土 精々 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部尖縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
10図 18	鉢	19.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部屈曲口縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
10図 19	鉢	23.0 — —	胎土 砂粒を少量含む 色調 外赤褐色 内黒色 焼成 良好	口縁部屈曲口縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	

図 表 Ⅱ（出土遺物表）

挿図番号	器形	法量cm（口径 器高 底径）	土器の観察	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	調整 底	遺構	備考
11図 20	皿	12.0 2.5 3.5	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部尖縁上部で外反する。	ロクロ横ナデで器体下半横位のヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手持ちヘラ削り	第2号住	
11図 21	皿	12.0 2.5 5.0	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁、内面中央部で明瞭なくびれがみられる。	ロクロ横ナデで器体下半に斜位のヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手持ヘラ削り	第2号住	
11図 22	皿	12.5 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部丸縁 全体に厚い	ロクロ横ナデで器体下半に斜位のヘラ削り	ロクロ横ナデ		第2号住	
11図 23	皿	12.6 2.5 —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部丸縁、内面中央部に明瞭なくびれをもつ。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
11図 24	皿	13.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁 上部で外反する。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
11図 25	皿	12.0 — —	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
11図 26	皿	13.0 — —	胎土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第2号住	
11図 27	須恵器壺	— — 6.0	胎土 精々されている 色調 青灰色 焼成 良好	高台部は貼り付けによる。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ	回転糸切り	第2号住	
11図 28	須恵器甕	— — —	胎土 精々されている 色調 青灰色 焼成 良好		縦位に平行叩き文	ロクロ横ナデ		第2号住	
11図 29	緑釉陶器	13.0 — —	胎土 緻密 色調 淡い緑 焼成 良好	口縁部玉縁				第2号住	
12図 30	須恵器甕	— — 13.5	胎土 少量の小石を含む 色調 青灰色 焼成 良好		器体下半に平行叩キ文を有する	ロクロ横ナデ		第2号住	
12図 31	土師器甕	25.0 — —	胎土 砂粒・小石を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	大きく外反し肥厚する。最大径が口縁部にある。	口縁部横ナデ、胴部縦位の刷毛目	口縁部刷毛目 胴部縦位の刷毛目		第2号住	
12図 32	土師器甕	27.5 — —	胎土 砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部がくの字状を呈する。口縁部は比較的薄い作りである。	口縁部横ナデで胴部縦位の細い刷毛目	口縁部は横ナデ整形	胴部は横位の刷毛目整形後手頭による整形	第2号住	
12図 33	土師器甕	27.0 — —	胎土 砂粒を多く含む 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は肥厚気味で外反し、内面の口縁部で段をもつ	口縁部横ナデで胴部は縦位の刷毛目整形	口縁部は横ナデ整形	胴部は横位の刷毛目整形後手頭による整形	第2号住	
12図 34	土師器甕	— — 10.0	胎土 若干の砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	底部から緩やかに立ち上がる。底部は木葉痕が認められる。	縦位の刷毛目整形	刷毛目による整形痕が認められる。		第2号住	
12図 35	甕	19.0 — —	胎土 砂粒雲母を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部がくの字状に外反し、胴部で薄くなる。	口縁部横ナデで口縁部下位より胴部に縦位の刷毛目	口縁部は刷毛目による横位の整形、胴部は横位の刷毛目整形		第3号住	
13図 1	坏	11.0 4.1 4.4	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 やや不良	口縁部丸縁	口縁部ロクロ横ナデで器体下半に横位のヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後手持ちヘラ削り	第5号住	
13図 2	坏	12.0 3.3 5.5	胎土 精々されている 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部尖縁	口縁部ロクロ横ナデで器体下半に斜位のヘラ削り	ロクロ横ナデ		第5号住	
13図 3	坏	11.0 — —	胎土 精々されている 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁部玉縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第5号住	

図 表 Ⅲ（出土遺物表）

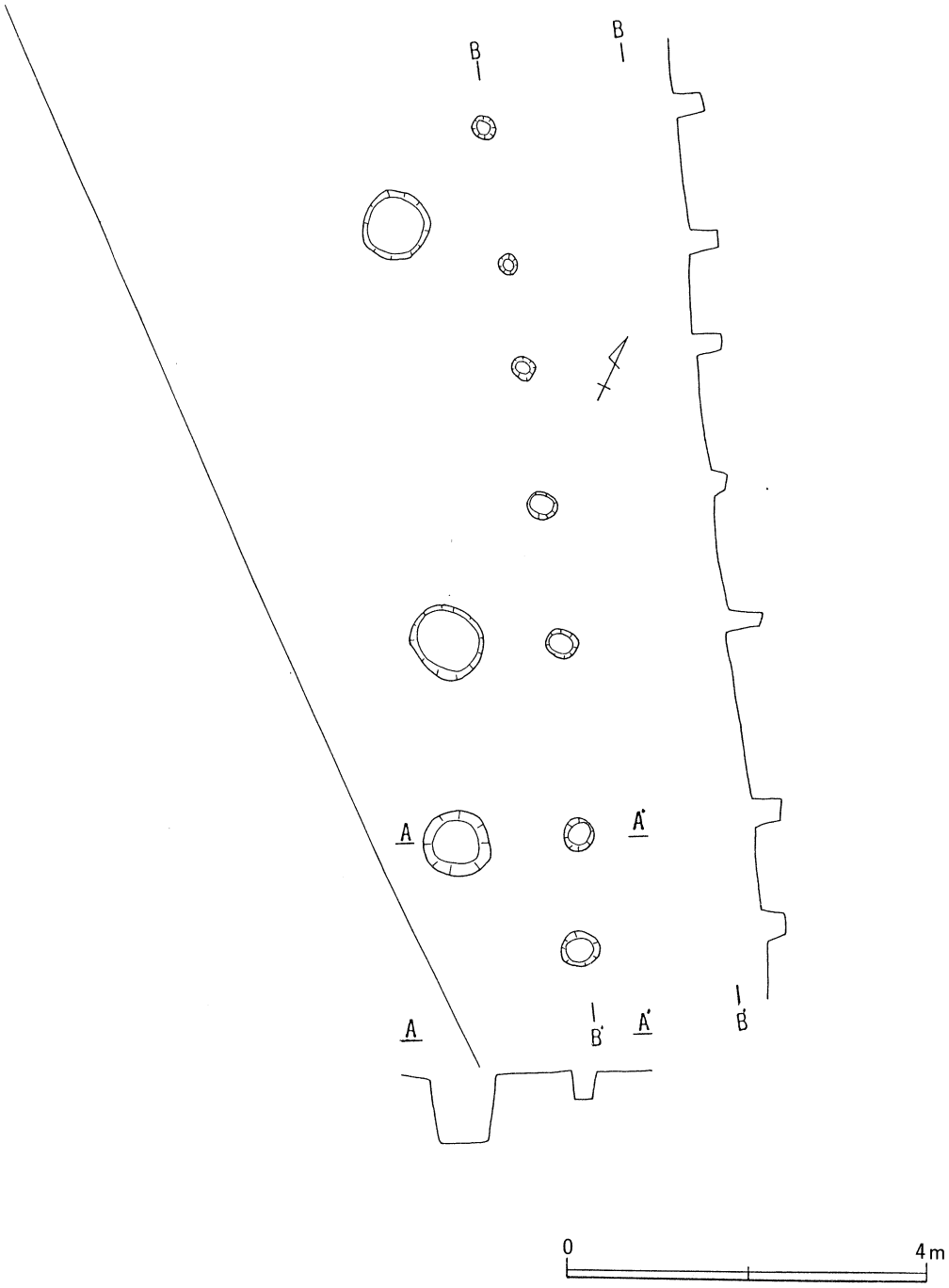
挿図番号	器形	法量cm（口径 器高 底径）	土器の観察	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	調整 底	遺構	備考
13図 4	坏	14.0 — —	胎土　精々される 色調　赤褐色 焼成　良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第5号住	
13図 5	砥石	長さ12.0 幅 3.5 厚さ 3.0	石質は硬質 砂岩					第5号住	
13図 6	高台坏	— — 9.4	胎土　精々 色調　赤褐色 焼成　良好	削りだし高台				第5号住	
13図 7	甕	28.5 — —	胎土　砂粒を含む 色調　茶褐色 焼成　良好	口縁部は胴部と同じ厚さで外反	口縁部横ナデ 胴部縦位の刷毛目	刷毛目整形		第5号住	
13図 8	甕	14.0 — —	胎土　砂粒を含む 色調　内黒褐色 外茶褐色 焼成　良好	口縁部は屈曲して外反する。	口縁部横ナデ 胴部縦位の刷毛目	刷毛目整形		第5号住	
13図 9	甕	25.5 — —	胎土 色調　茶褐色 焼成良好	口縁部が屈曲しゆるやかに外反	口縁部横ナデ 胴部縦位の刷毛目	刷毛目整形		第5号住	
13図 10	甕	18.0 — —	胎土　砂を含む 色調　茶褐色 焼成　良好	口縁部は薄く外反する。	口縁部横ナデ 胴部縦位の刷毛目	刷毛目整形		第5号住	
13図 11	甕	28.0 — —	胎土　砂粒を含む 色調　内茶褐色 外黒褐色 焼成　良好	口縁部が水平にちかく外反する。	口縁部横ナデ 胴部縦位の刷毛目	刷毛目整形		第5号住	
13図 12	甕	28.0 — —	胎土 色調　内茶褐色 外赤褐色 焼成	口縁部は胴部と同じ厚さで外反する	口縁部横ナデ 胴部縦位の刷毛目	刷毛目整形		第5号住	
14図 1	甕	14.5 5.5 6.0	胎土　粗い 色調　内黒 外茶褐色 焼成　良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	黒色研磨	回転糸切り	第6号住	
14図 2	甕	13.0 — —	胎土　精々される 色調　赤褐色 焼成　良好	口縁部が角ばっている。	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第6号住	
14図 3	坏	12.0 — —	胎土　良好 色調　内黒 外茶褐色 焼成　良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	黒色研磨		第6号住	
14図 4	坏	— — 6.0	胎土　粗い 色調　内黒 外茶褐色 焼成　良好		ロクロ横ナデ	黒色研磨	回転糸切り	第6号住	
14図 5	須恵坏	12.0 3.5 —	胎土　密 色調　灰褐色 焼成　良好	口縁部尖縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ	回転糸切り	第6号住	
14図 6	須恵坏	— — 5.0	胎土　密 色調　灰褐色 焼成　良好		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第6号住	
14図 7	土師器皿	14.0 2.0 6.0	胎土　密 色調　赤褐色 焼成　良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ	回転糸切り後全面ヘラ削り	第6号住	
14図 8	須恵坏	13.0 — —	胎土　密 色調　灰褐色 焼成　良好	口縁部丸縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第6号住	
14図 9	土師器皿	14.0 3.0 6.0	胎土　精々される 色調　赤褐色 焼成　良好	内面中央部付近にくびれあり。	ロクロ横ナデ	同心円状暗文	回転ヘラ削り	第6号住	
14図 10	土師器甕	13.0 — —	胎土　やや粗い 色調　黒褐色 焼成　良好		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第6号住	

図 表 Ⅳ （出土遺物表）

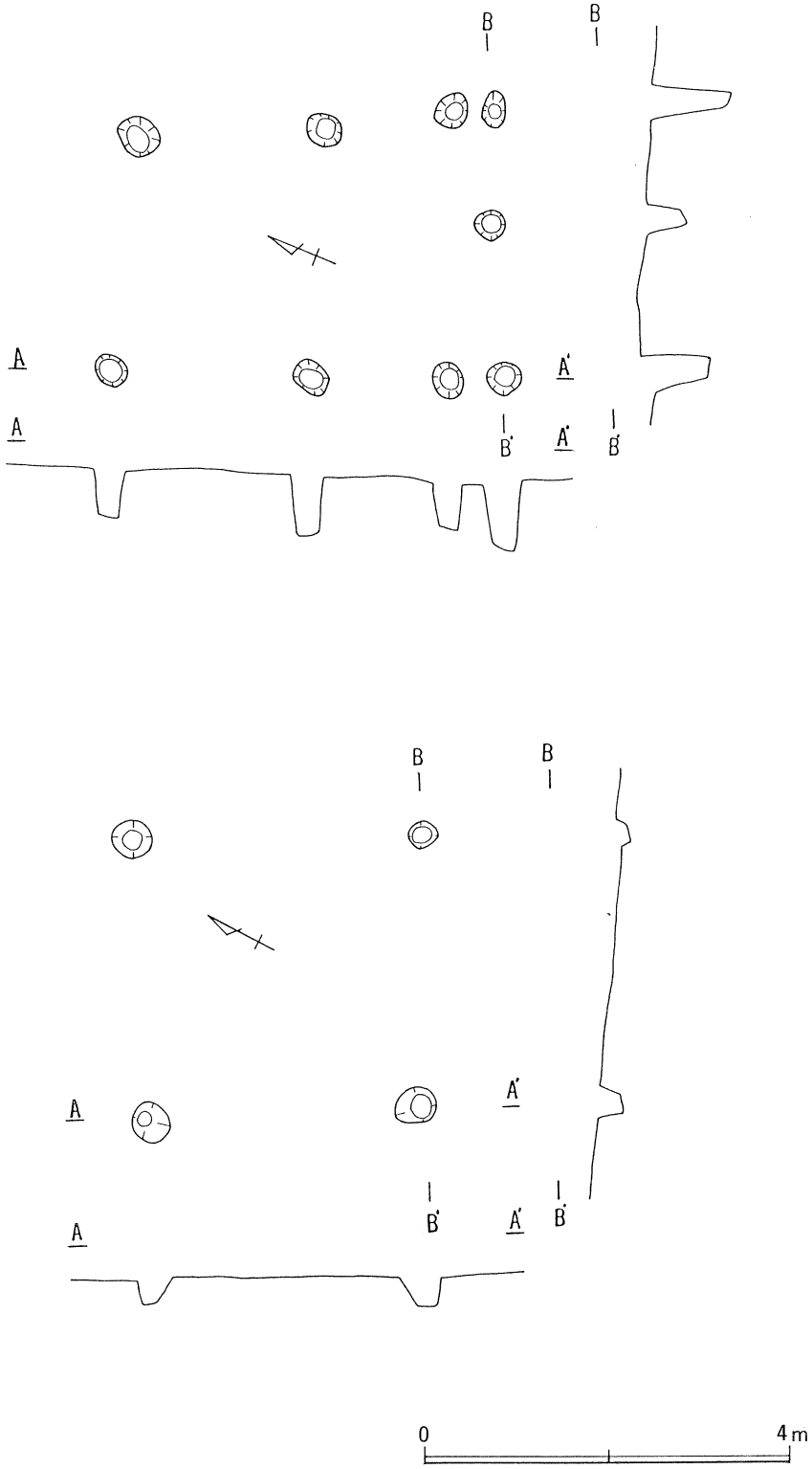
挿図番号	器形	法量cm（口径／器高／底径）	土器の観察	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	調整 底	遺構	備考
15図 11	土器 器甕	23.5 — —	胎土 砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部に比べて胴部が薄くなる	口縁横の刷毛目 胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第6号住	
15図 12	土師 器甕	26.0 — —	胎土 粗い 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部が屈曲し、ゆるやかに外反	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第6号住	
15図 13	土師 器甕	26.0 — —	胎土 砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部は胴部と同じ厚さで外反	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第6号住	
15図 14	土師 器甕	24.0 — —	胎土 粗い 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部は胴部と同じ厚さで外反	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第6号住	
16図 1	土師器高台付皿	13.0 3.0 6.6	胎土 密 色調 内黒 外赤褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黒色研磨	回転糸切り	第7号住	
16図 2	土器 器皿	13.0 3.0 5.0	胎土 やや不良 色調 黄褐色 焼成 よくない	口縁部は玉縁	胴部下半ヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後全面ヘラ削り	第7号住	
16図 3	土師 器坏	— — 6.0	胎土 粗い 色調 内黒 外茶褐色 焼成 不良		ロクロ横ナデ	黒色研磨	回転糸切り	第7号住	
16図 4	灰釉 陶器	— — 6.0	胎土 密 色調 灰色 焼成 良好					第8号住	釉薬はつけかけ
16図 5	坏	12.0 4.0 6.0	胎土 こまかい 色調 内黒 外黒褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黒色研磨	回転糸切り	第9号住	
16図 6	坏	— — 4.5	胎土 密 色調 赤褐色 焼成 良好		胴部下半斜位のヘラ削り	ロクロ横ナデ	回転糸切り後全面ヘラ削り	第9号住	
16図 7	灰釉 陶器 坏	13.0 3.5 6.0	胎土 密 色調 灰色 焼成 良好	口縁部は玉縁を呈する。	釉全面	釉全面	高台釉無	第9号住	O—53窯式期
16図 8	灰釉 陶器 坏	15.5 3.0 7.0	胎土 密 色調 灰色 焼成 良好	口縁部は玉縁	釉 無	釉全面	高台釉無	第9号住	O—53窯式期
16図 9	土師 器坏	15.0 — —	胎土 あらい 色調 内黒 外茶褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黒色研磨		第10号住	
16図 10	土師 器坏	14.0 — —	胎土 あらい 色調 内黒 外茶褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黒色研磨		第10号住	
16図 11	灰釉 陶器 坏	— — 7.0	胎土 密 色調 灰色 焼成 良好		釉 無	釉全面	高台釉無	第10号住	
何図 12	土師 器坏	14.0 — —	胎土 こまかい 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第11号住	
何図 13	土師 器坏	16.0 — —	胎土 こまかい 色調 内黒 外茶褐色 焼成 良好	口縁部は玉縁	ロクロ横ナデ	黒色研磨		第11号住	
何図 14	土師 器坏	— — 4.0	胎土 密 色調 赤褐色 焼成 良好		胴部下半斜位のヘラ削り	ロクロ横ナデ		第11号住	
何図 15	土師 器坏	— — 5.5	胎土 密 色調 赤褐色 焼成 良好		胴部下半斜位のヘラ削り	暗文あり	回転糸切り後全面ヘラ削り	第11号住	

図 表 V

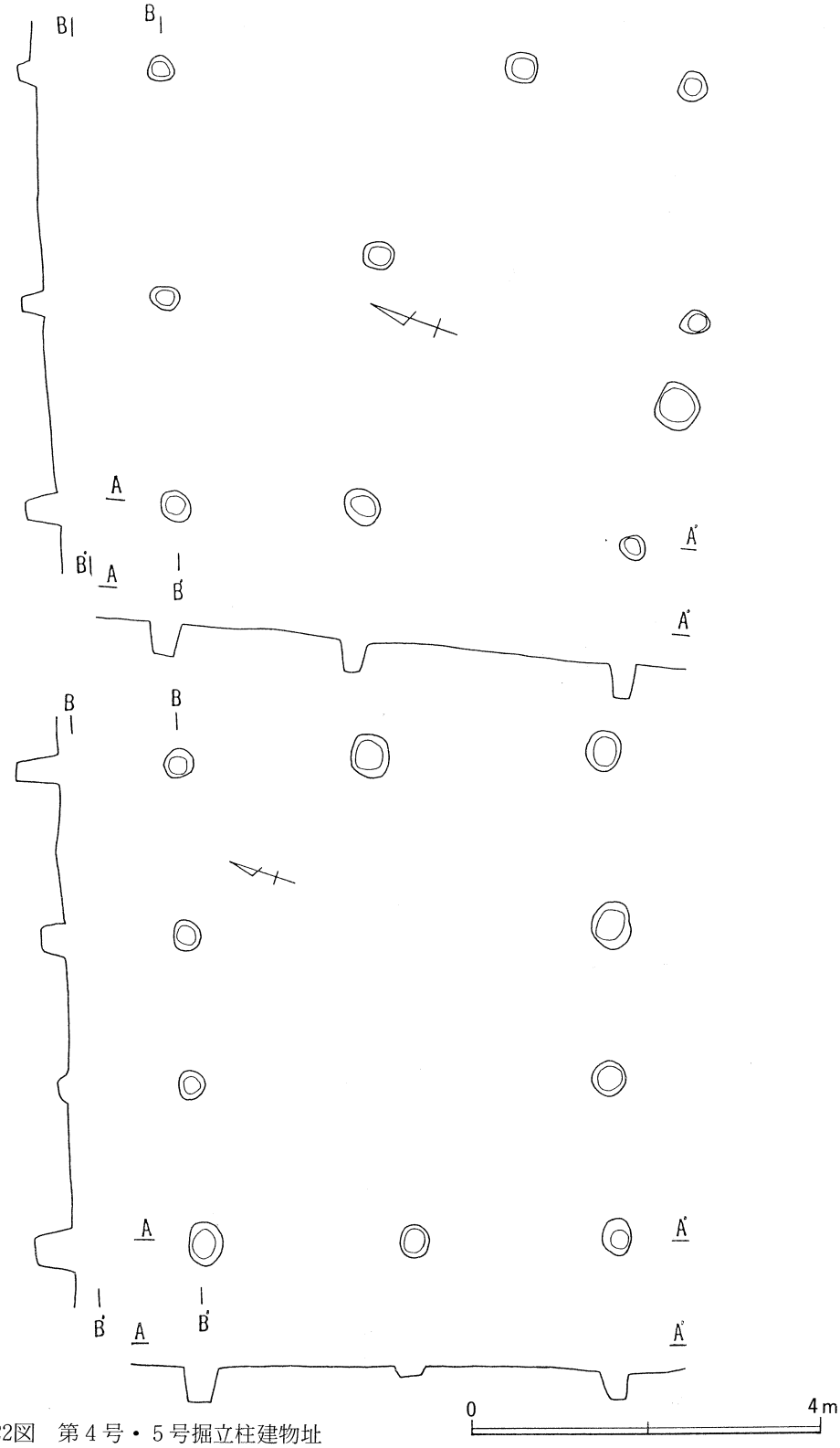
挿図番号	器形	法量cm（口径／器高／底径）	土器の観察	器形の特徴	調整 外面	調整 内面	調整 底	遺構	備考
17図1	土師器甕	38.0 — —	胎土 こまかい 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部は肥厚いちじるしく直線的に外反する	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第9号住	
17図2	土師器甕	28.0 — —	胎土 ややあらい 色調 茶褐色 焼成	口縁部は肥厚化し内に輪をもつ。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第9号住	
17図3	土師器甕	28.5 — —	胎土 密 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部が肥厚化し外反する	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第9号住	
17図4	土師器甕	25.0 — —	胎土 あらい 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部がくの字を呈する	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第9号住	
17図5	土師器甕	24.0 — —	胎土 あらい 色調 内黒褐色 外赤褐色 焼成 良好	口縁部が曲線をもって外反する。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第9号住	
17図6	土師器甕	16.5 — —	胎土 ややあらい 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部が胴部と同じように厚くなる。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第9号住	
17図7	土師器甕	15.5 — —	胎土 あらい 色調 内黒褐色 外赤褐色 焼成 良好	口縁部に比べて胴部はうすい。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第9号住	
18図1	土師器甕	26.5 — —	胎土 ややあらい 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部内部でくびれをもつ	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第11号住	
18図2	土師器甕	27.5 — —	胎土 あらい 色調 内茶褐色 外赤褐色 焼成 良好	口縁部内部でくびれをもつ。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第11号住	
18図3	土師器甕	27.0 — —	胎土 こまかい 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部が肥厚化、特に外面が肥厚化する。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第11号住	
18図4	土師器甕	25.5 — —	胎土 あらい 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部と胴部の厚さが同じ。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第11号住	
18図5	土師器甕	23.5 — —	胎土 こまかい 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部と胴部の厚さが同じ。	胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第11号住	
18図6	土師器甕	— — 9.0	胎土 砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好		胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第11号住	底部は木葉痕
18図7	土師器甕	— — 10.0	胎土 砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好		胴部縦位の刷毛目	横位の刷毛目		第11号住	底部は木葉痕
19図1	土師器甕	27.0 — —	胎土 色調 茶褐色 焼成	口縁部はゆるやかに外反する。	口縁横位の刷毛目、胴部は縦位の刷毛目			第12号住	
19図2	土師器甕	27.0 — —	胎土 色調 内赤褐色 外茶褐色 焼成	口縁部内に浅いくびれをもつ。	口縁横位の刷毛目、胴部は縦位の刷毛目			第12号住	
19図3	土師器甕	25.0 — —	胎土 色調 茶褐色 焼成	口縁部が肥厚化する。	口縁横位の刷毛目、胴部は縦位の刷毛目			第12号住	
19図4	土師器甕	25.5 — —	胎土 色調 茶褐色 焼成	口縁と胴部が同じくらいの厚さである。	口縁横位の刷毛目、胴部は縦位の刷毛目			第12号住	
19図5	土師器蓋	20.0 — —	胎土 密 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁部内面に浅い細線	ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		第12号住	



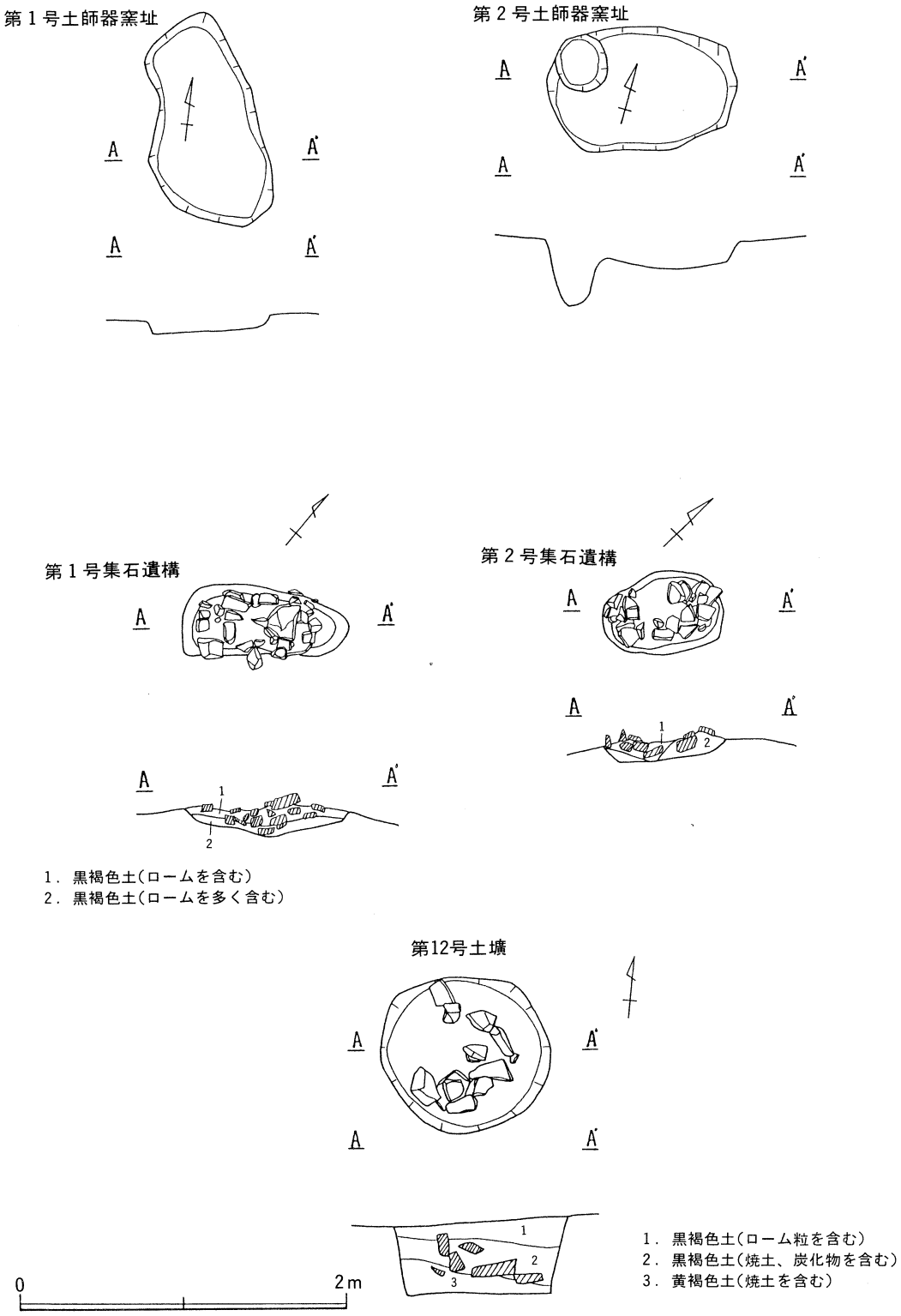
第20図　第１号掘立柱建物址



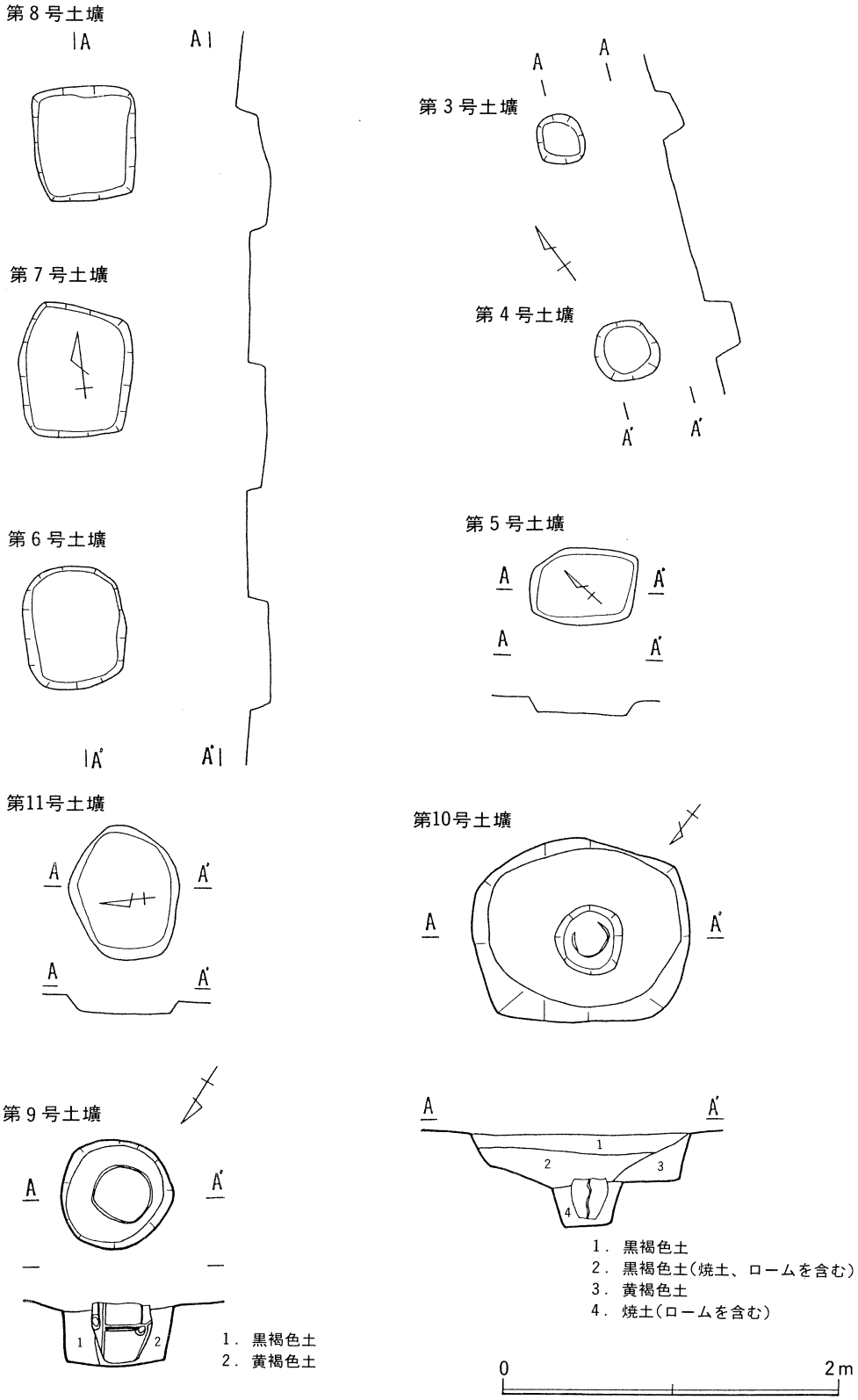
第21図　第２号・３号掘立柱建物址



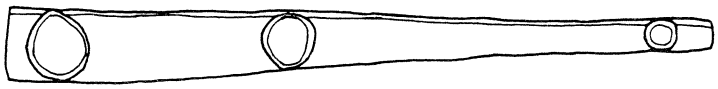
第22図　第４号・５号掘立柱建物址



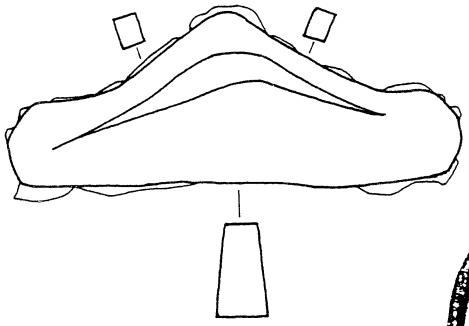
第23図　第１号・２号土師器窯址、第１号・２号集石遺構、第12土壙



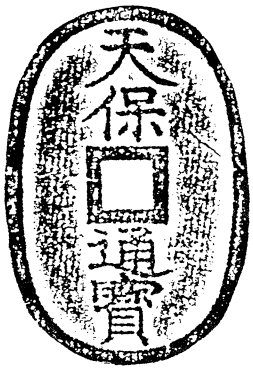
第24図　第3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号・11号土壙



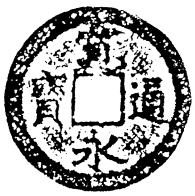
1



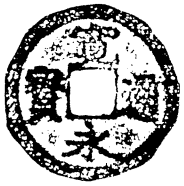
2



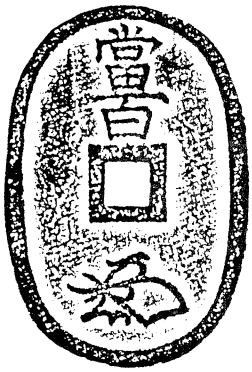
5

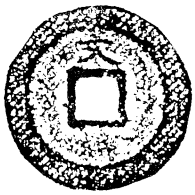


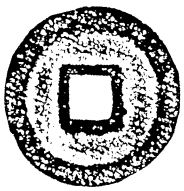
3



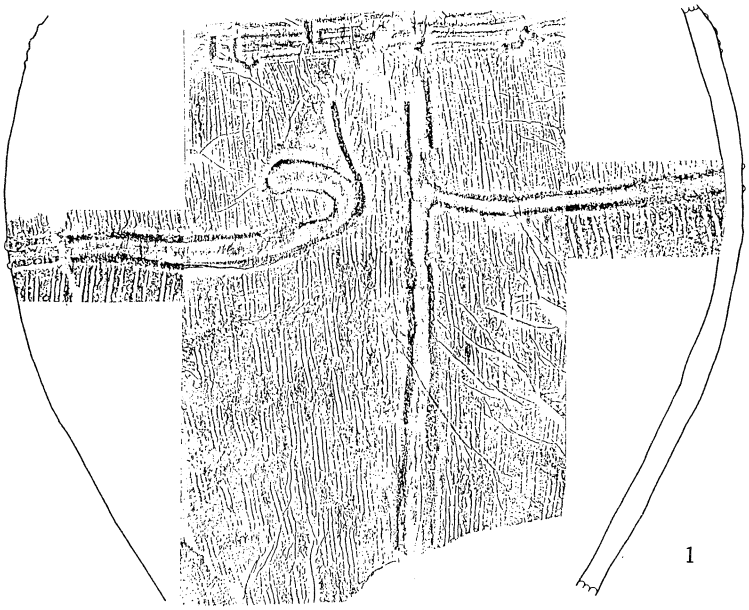
4

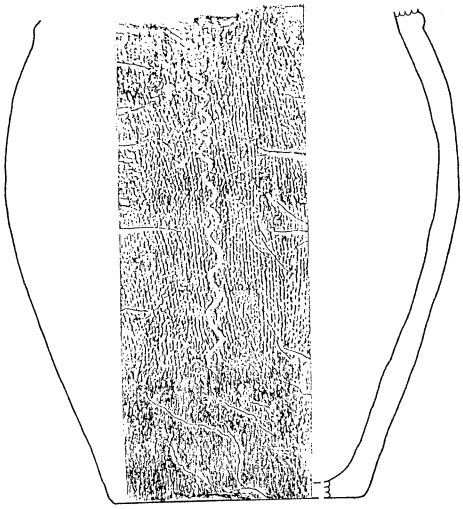


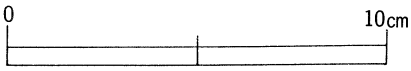




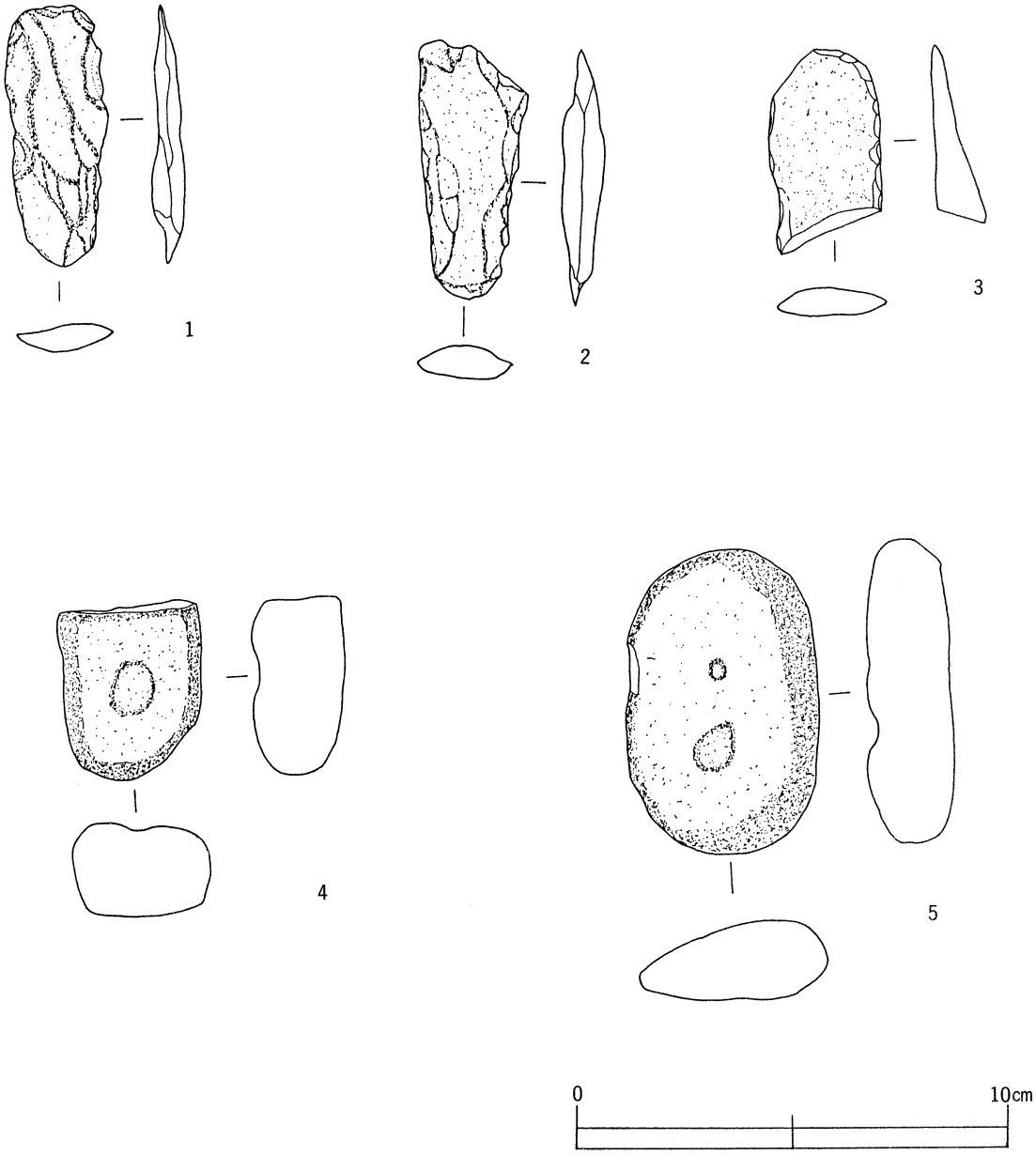
第25図　第６号土壙・第７号土壙・第８号土壙遺構外出土遺物







第26図　第９号土壙(2)・第10号土壙(1)出土遺物



第27図　第11号土壙(1)・第12号土壙(2・3)、第１号集石遺構出土遺物(4・5)

Ⅳ. ま　と　め

前田遺構において検出された遺構・遺物の詳細は前述の如くである。検出された遺構は、竪穴住居址９軒、掘立柱建物址４軒、土師器窯址２基、集石遺構２基、土壙10基で時期は竪穴住居址、掘立柱建物址、土師器窯址は平安時代の所産であった。一方、出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、石製品、縄文式土器などがあるが、遺構に伴出する遺物は土師器が主体を占めた。以下、平安時代の遺構・遺物を中心として、若干の検討をし、まとめとしたい。

遺　構

竪穴住居址について

前田遺跡で検出した住居址は９軒で、完掘できた住居址は７軒である。住居址形態には、方形、長方形があり、形態規模は、長辺４メートル、短辺３メートル前後を基本的な住居址としている。各コーナーは全体に丸味をもち、全体的には整然とした形態のものが多い。カマドの位置は、カマドの残存した住居址が東壁部に設置される規則性がみられ、中央部より南側に片寄る傾向が指摘でき、第２号、第10号住居址では、東南コーナー部に接するほどである。柱穴と認められるピットは、存在しない第５号、第７号、第９号、第10号住居址があり、存在しても、規則的な位置関係が無く、主支柱穴の区別も明瞭ではない。柱穴が存在しない住居址のなかで、壁側近くの床に、平石がいくつかおかれ、礎石的な役割をはたしていたとも考えられ、上屋構造の機能的役割が問題となる。壁溝は、検出された全住居址で確認された。カマドの構造は、大半の住居址に関して、燃焼部で焼土が少ない。袖は平石を何枚か立てて、それを被うようにし、白色粘土、ロームを補強材として用いている。掘り方の平面形態は規則性はないが、燃焼部は屋内にもち、楕円形のもので、煙道部は、燃焼部より急傾斜をもって壁外へ立ち上がっている。以上形態及び内部施設について見てきたが、前田遺跡の住居址はめだった変化はみとめられないが、共通して見られる現象は、住居址に占めるカマドの構築位置が必ず同じ位置にあることであり、住居址の構築に対する集落の規制、あるいは、戸の規制等があつたかもしれない。なお、２号住居址、６号住居址については、鉄滓などの遺物だけではなく、炉と思われるピットのあり方や台石の存在等、たんなる住居址というより、小鍛冶的遺構と考えられる。

掘立柱建物址について

本遺跡で確認された掘立柱建物址は、全部で５軒確認された。これらの掘立柱建物址は、３間×６間（１軒）、１間×１間（１軒）、２間×３間（２軒）、２間×２間（１軒）で、５軒のうち、４軒は、南北方向に長軸を有する掘立柱建物址である。１軒が東西方向に長軸を有する建物址である。１号掘立柱建物址は東西に廂をもつ住居址である。２号掘立柱建物址と３号掘立柱建物址はその規模、構造から、倉庫と考えられる。４号掘立柱建物址は束柱がなく、住居址と考えられ、５号掘立柱建物址は束柱を有し、小規模な総柱式の倉庫址である。

土師器窯址について

本遺跡から検出された土師器の窯址は、2基検出され、その平面形態は楕円形を呈し、内部の覆土は、焼土層、炭化物層、灰層が堆積している。壁・底は極度の加熱により赤化していた。出土遺物は少量であるが、二次的な焼成をうせた遺物もみうけられた。

遺　物

出土土器について

山梨県内の奈良・平安の歴史時代（特に平安時代）を中心にした土師器の編年研究は、北巨摩郡を中心に末木健氏、東八代郡を中心にして坂本美夫氏、又富士山麓を中心に堀内真氏が、そして都留市の堀之内原遺跡を主体にした奈良泰史氏によっておこなわれ、いくたの成果をあげている。昭和58年に至り、末木健、坂本美夫、堀内真の三氏により、神奈川考古同人会の主催する「奈良、平安時代土器の諸問題」と題するシンポジウムで、甲斐型土器を中心とした奈良、平安時代の土師器編年の大綱が呈示された。

ここでは以上の研究成果を基にして本遺跡の出土土器について、その編年的位置について考えたい。（特に本遺跡が北巨摩郡に所在することにより、末木健氏の北巨摩郡地方の土師器編年に依拠するところが大きい。）尚、昭和57年におこなった発掘調査において出土した土器も使用することにし、前田遺跡出土の土器を概観し、便宜的にⅠ～Ⅳ期を設定した。

第Ⅰ期（第4号住居址より出土した土器が相当する。）

第4号住居址からは内面内黒のいわゆる信州系の土器は出土していない。土師器坏は口唇部が内湾し、底径が大きい、体部下半に横ないし、斜位のヘラケズリをおこなう。内面には放射状ないし鋸歯状の暗文が施される。色調は内外面共に赤褐色を呈する。本坏はいわゆる「甲斐型土器」といわれる土器である。末木健氏編年の第Ⅱ期に相当する。

第Ⅱ期（第2号、6号住居址の2軒が相当する。）

土師器坏は口唇部形態が丸形から玉縁への時期にあたる。整形等で、器体部下半に斜位のヘラケズリがみられ、内面に鋸歯状の暗文がこの時期まで残る。土師器坏でも、内面に暗文がなく、器体部下半に斜位のヘラケズリを施し、底部を回転糸切後ヘラケズリをおこなっている坏もみられる。又外面赤褐色であるが、内面が黒色の甲斐型坏が供併し、この時期に、信州系の内面内黒の坏が伴出する。皿は盤状で、大きな底部と内面に一段くびれをもつ。甕は口縁部が肥厚化し、外面は縦方向、内面は横方向にハケ目整形が施される。又小さな甕もみられる。

末木健氏編年の第Ⅲ期に相当する。

第Ⅲ期（第3号、5号、7号住居址の3軒が相当する。）

土師器坏は口縁部が玉縁化となり、肥厚する。器体部下半つは斜位のヘラケズリされ、底部は回転糸切り後全面のヘラケズリが施される。この時期より内面に暗文がみられなくなる。皿は口縁部が玉縁化し、くびれがめだたなくなる。甕は一段と口縁部が肥厚化し、くの字状を呈すする。末木健氏編年の第Ⅳ期にあたる。

第Ⅳ期（第８号、９号、10号、11号住居址の４軒に相当する。）

土師器坏の口縁部は完全に玉縁化する。信州系の内面内黒の坏の口縁部も玉縁化してくる。本時期より灰釉陶器が伴出する。甕は口縁部が非常に肥厚する。末木健氏編年の第Ⅴ期に相当する。

以上、本遺跡の第Ⅰ期～第Ⅳ期の土器群の様相を述べたが、次に各時期の年代観は、末木健氏の編年によると。

第Ⅰ期（末木健氏編年のⅡ期）は９世紀末～10世紀初め。

第Ⅱ期（末木健氏編年のⅢ期）は10世紀前半。

第Ⅲ期（末木健氏編年のⅣ期）は10世紀中頃。

第Ⅳ期（末木健氏編年のⅤ期）は10世紀後～11世紀前半である。

参　考　文　献

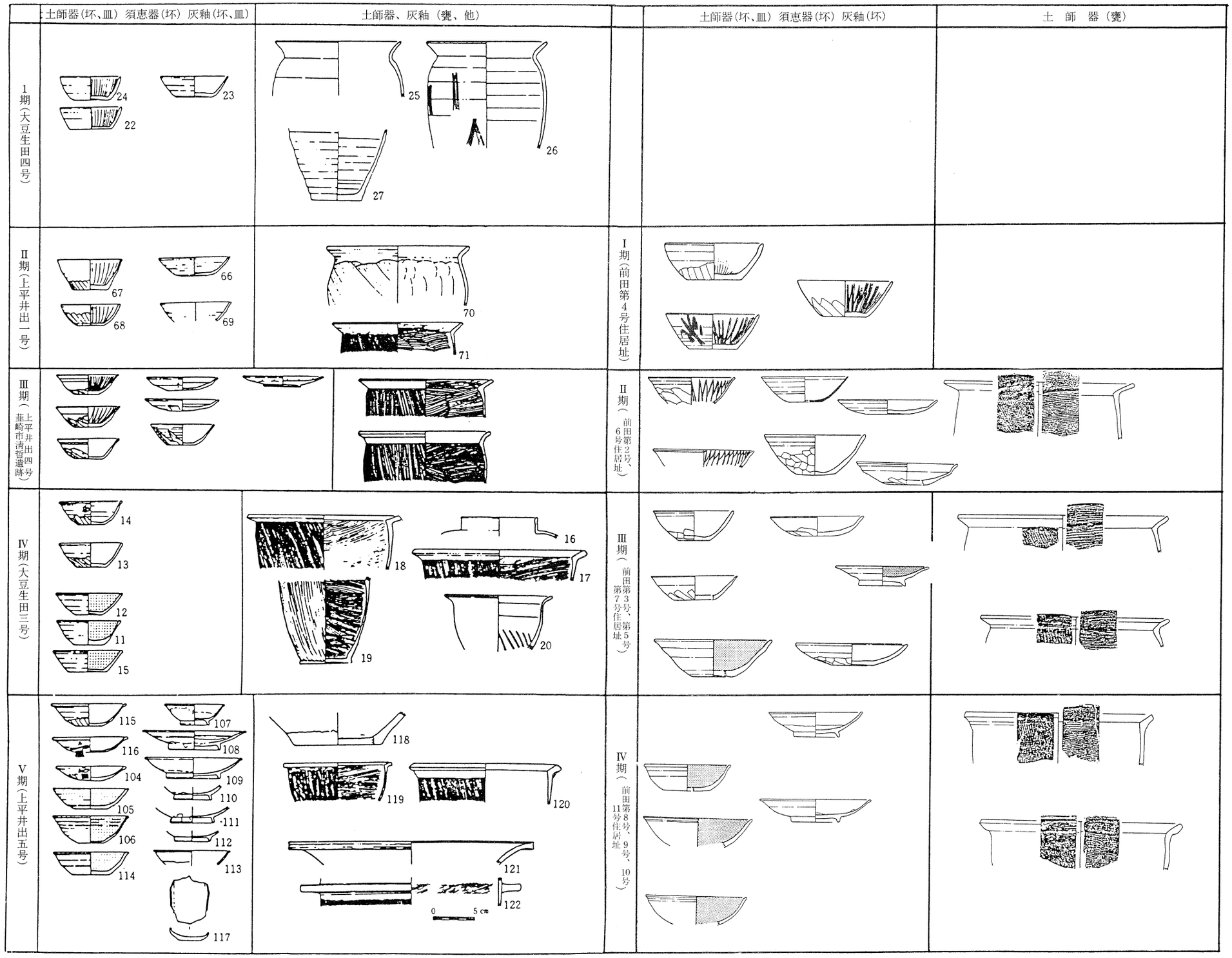
末木　健　　1974『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』―北巨摩郡小淵沢町地内―山梨県教育委員会

末木　健　　1976『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』―北巨摩郡須玉町地内―山梨県教育委員会

末木　健、坂本美夫、堀内　真　　1983「シンポジウム、奈良、平安時代土器の諸問題、甲斐地域」神奈川考古第14号　神奈川考古同人会

小淵沢町教育委員会　　1978『小淵沢町の原始古代遺跡』

小淵沢町教育委員会　　1983『前田遺跡発掘調査報告書』



第28図　　北巨摩地方平安時代土師器編年表(末木健氏原図に付図)　　前田遺跡編年図

おわりに

今回の調査では、以上のような多大な成果を得ることができました。本報告書が北巨摩地域の平安時代研究の解明の一助になれば幸いである。

文末ではありますが、調査に参加され、又協力していただいた地元下笹尾の方々をはじめ、発掘調査、整理又報告書を刊行するにあたり適切な助言をいただいた、県文化課、山梨県埋文センター、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区に対し、厚く感謝する次第であります。

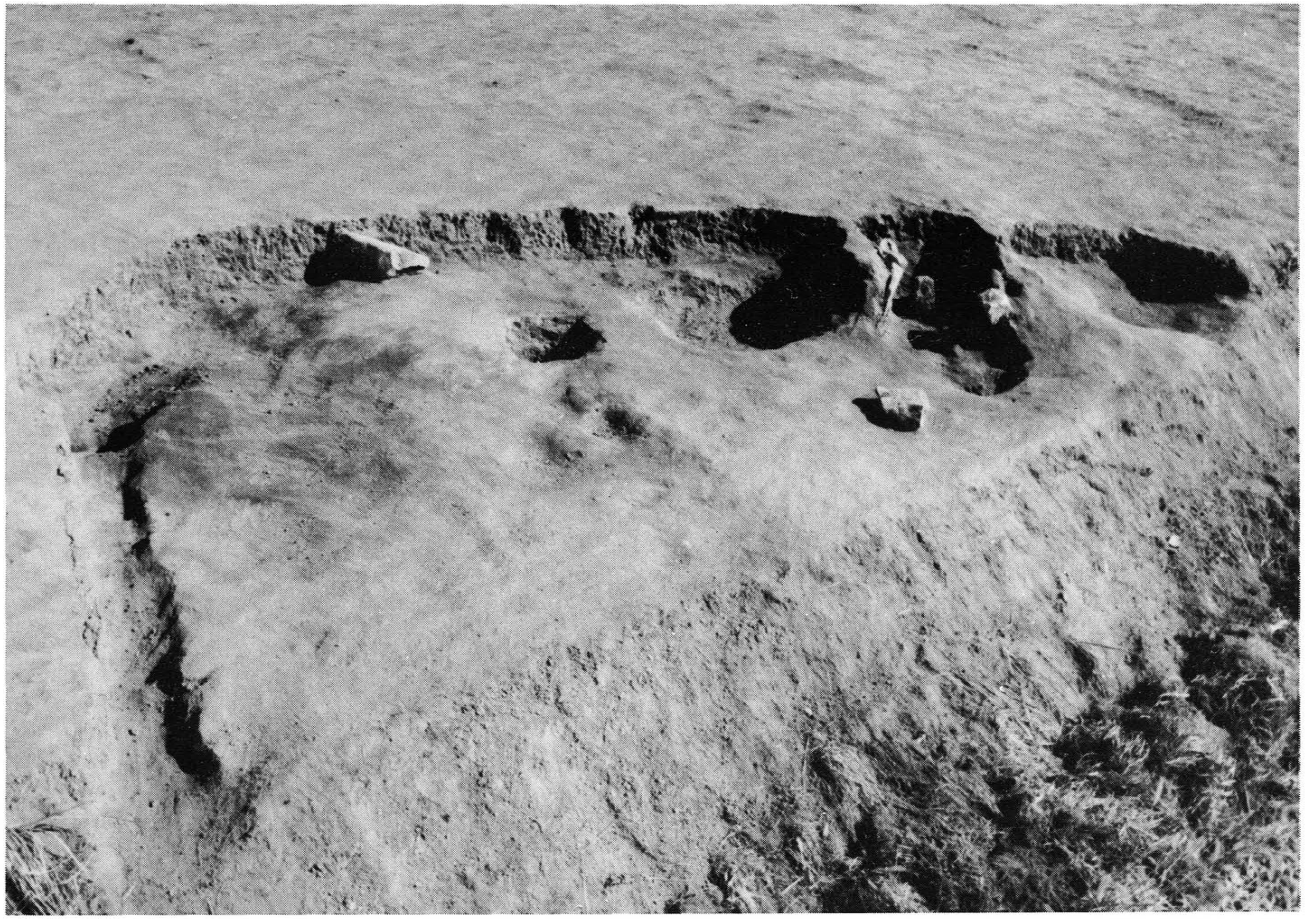
図　　版

図版1

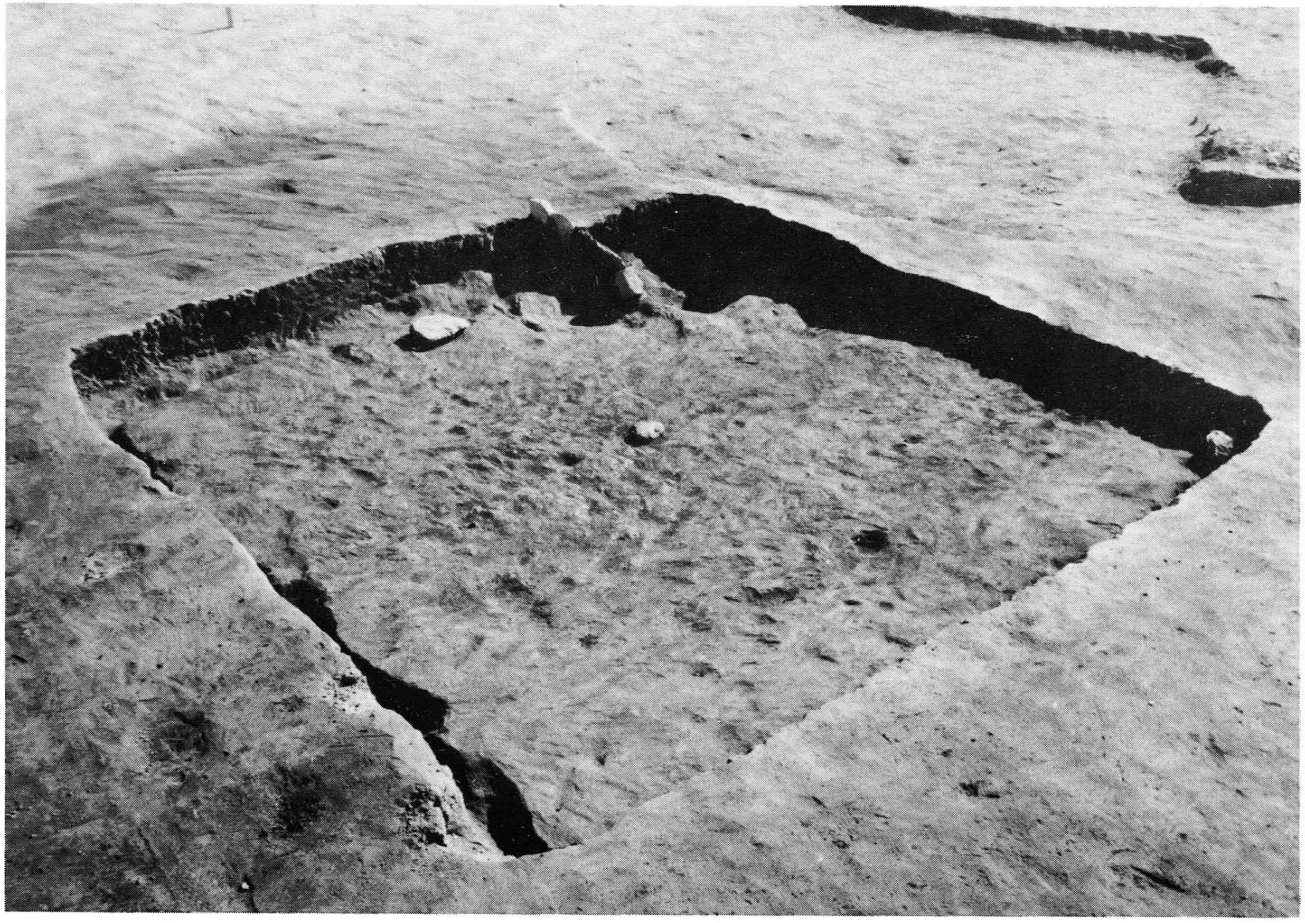
遺跡近影（南より）

遺跡近影（遺構確認作業）

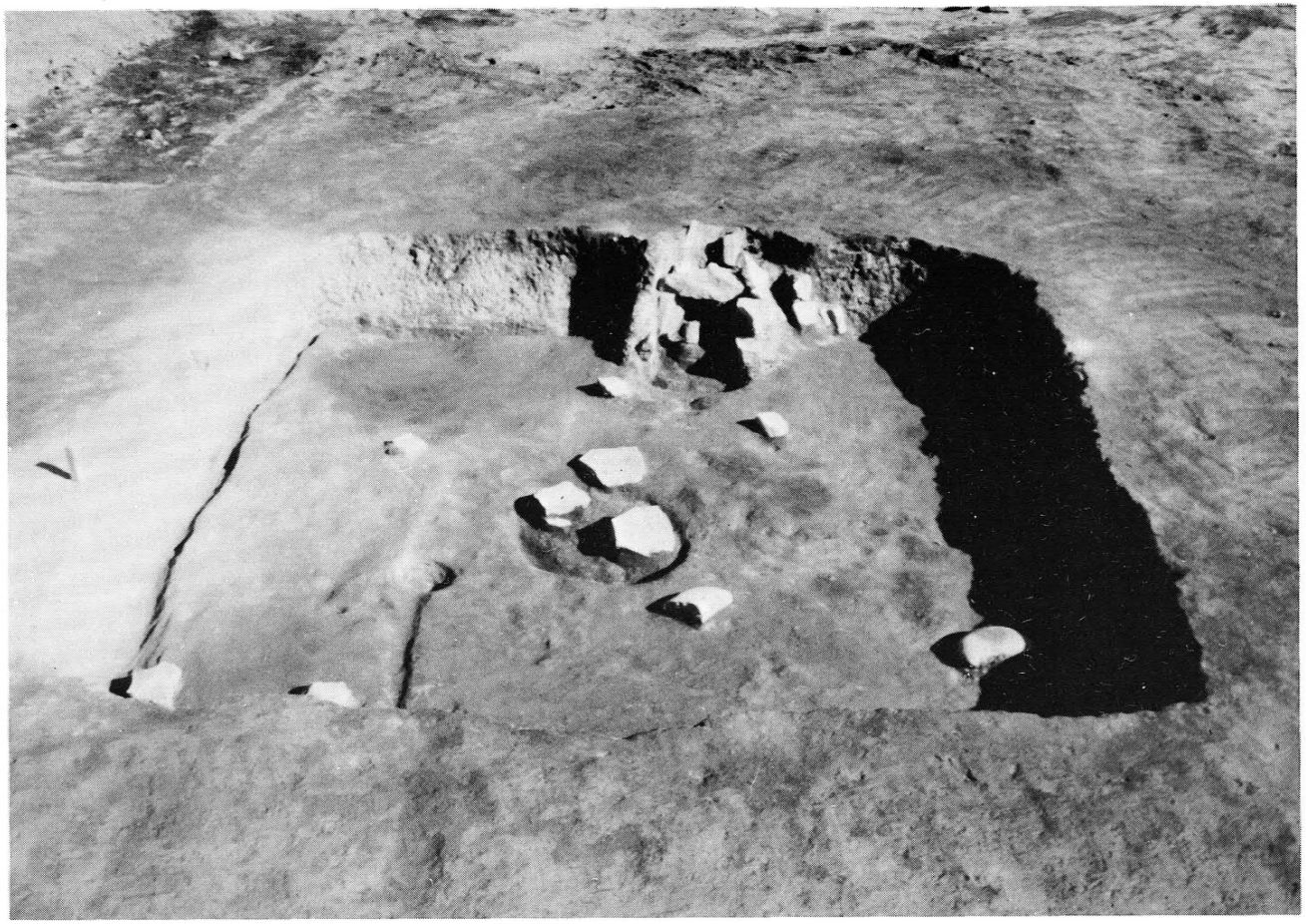
図版2



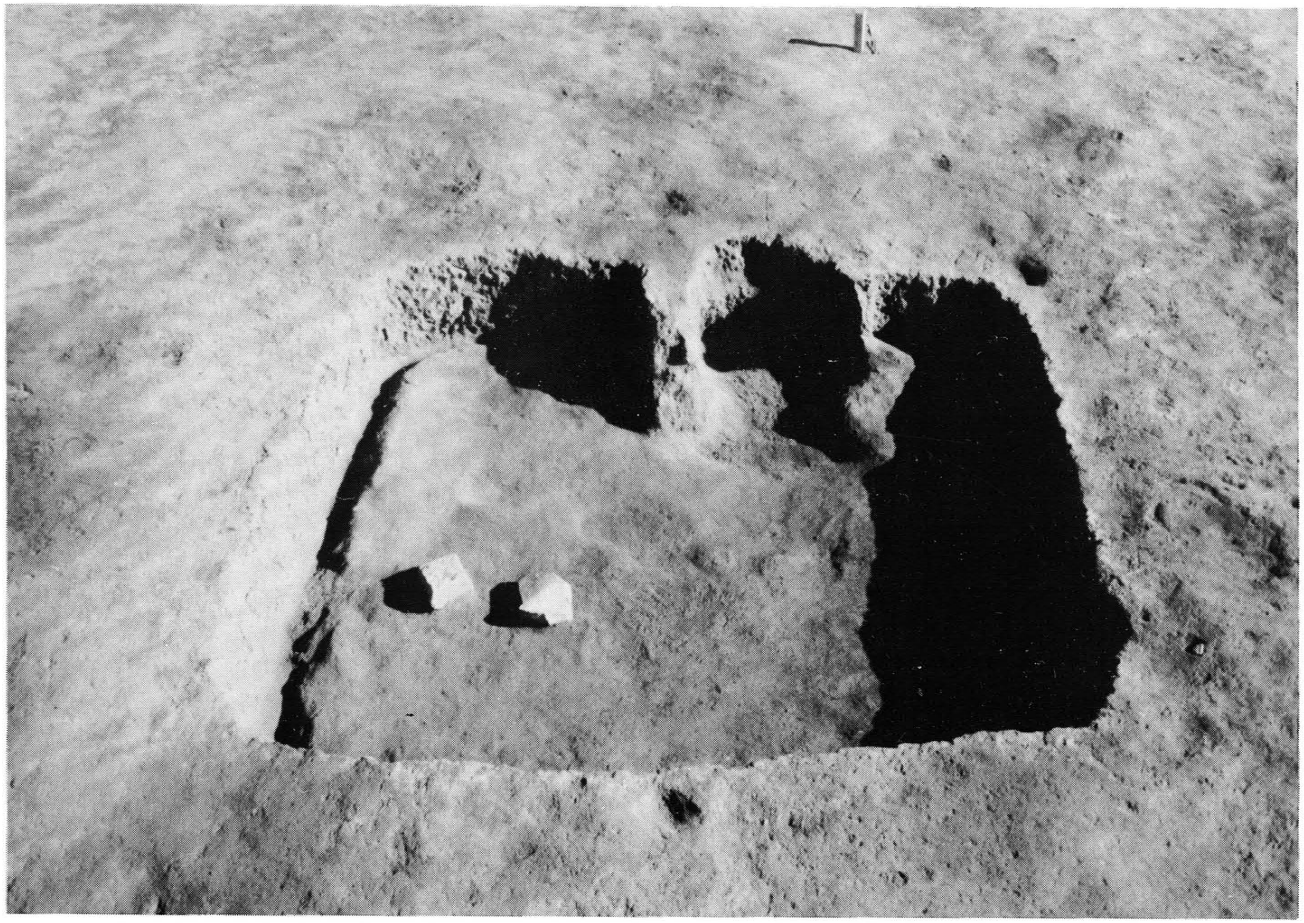
第2号住居址



第5号住居址

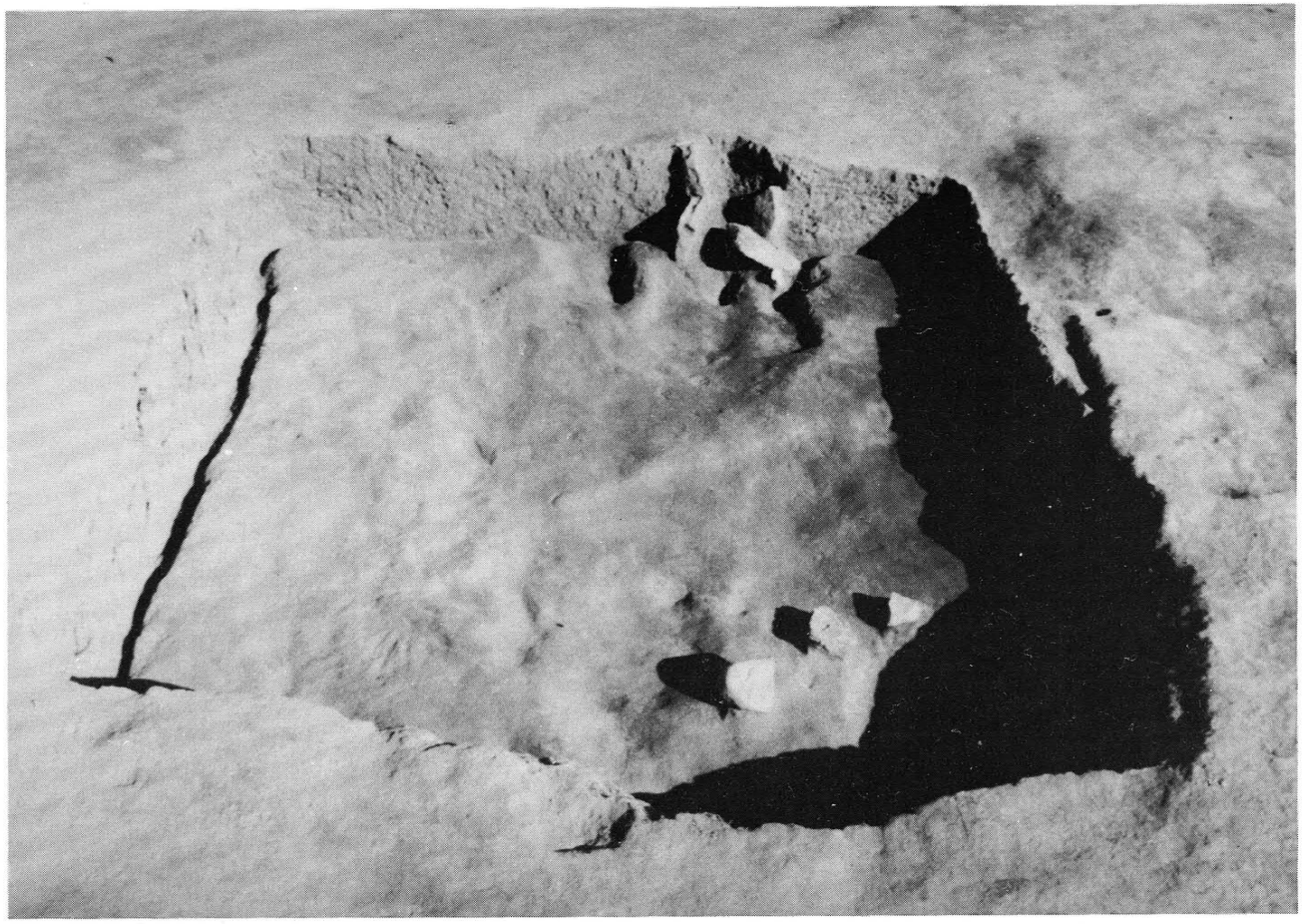


第6号住居址



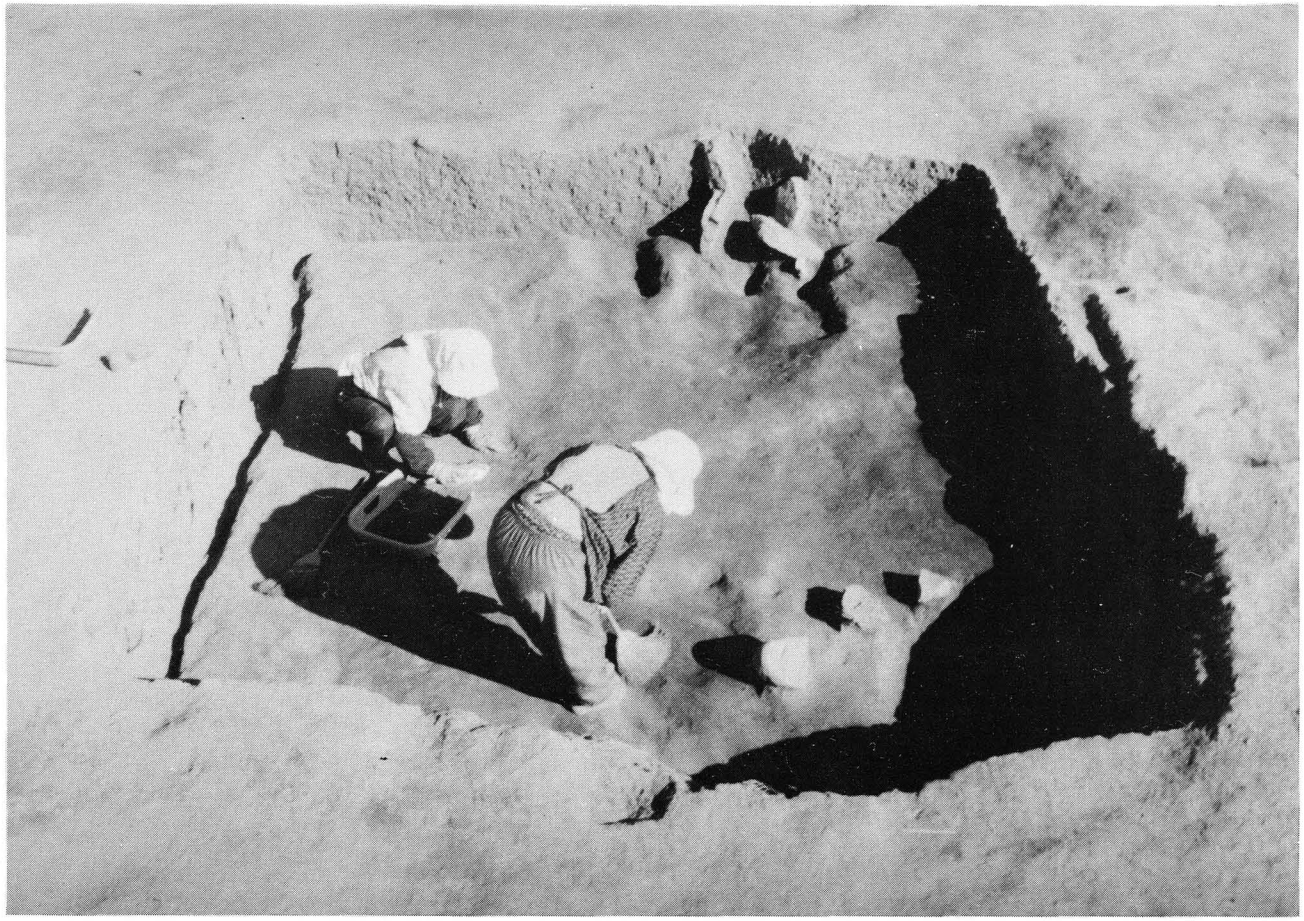
第7号住居址

図版6

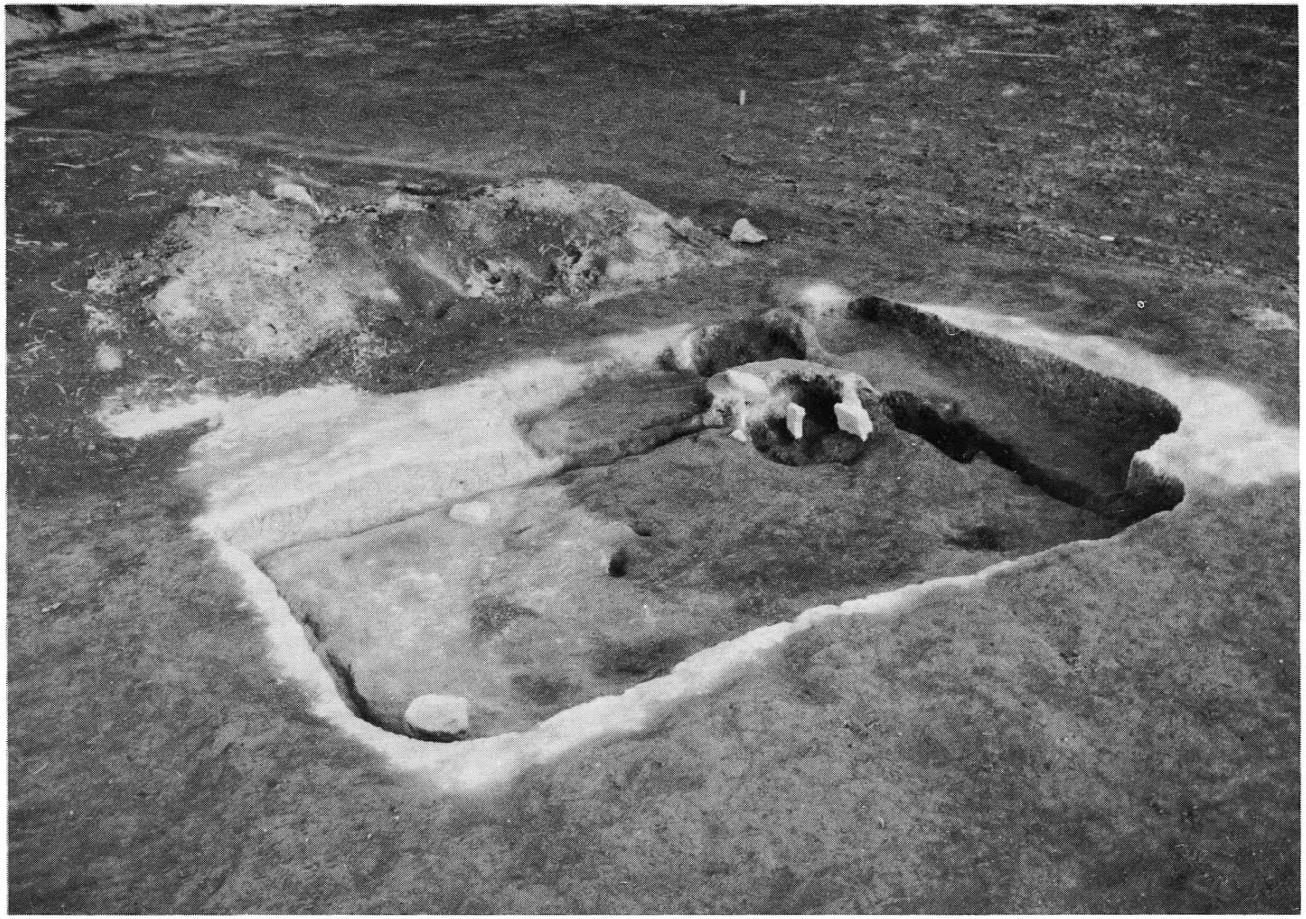


第8・9号住居址

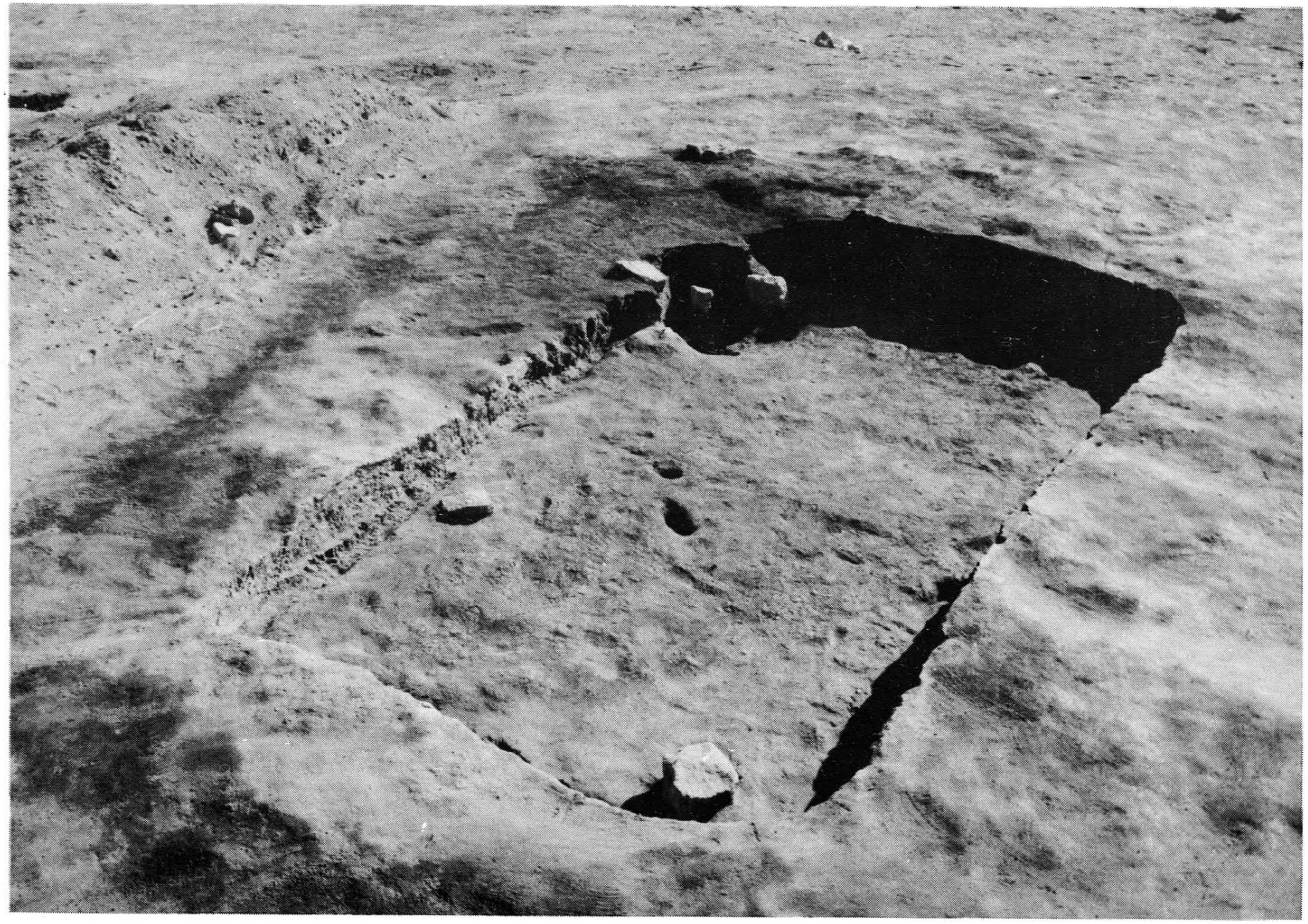
図版7



調査風景

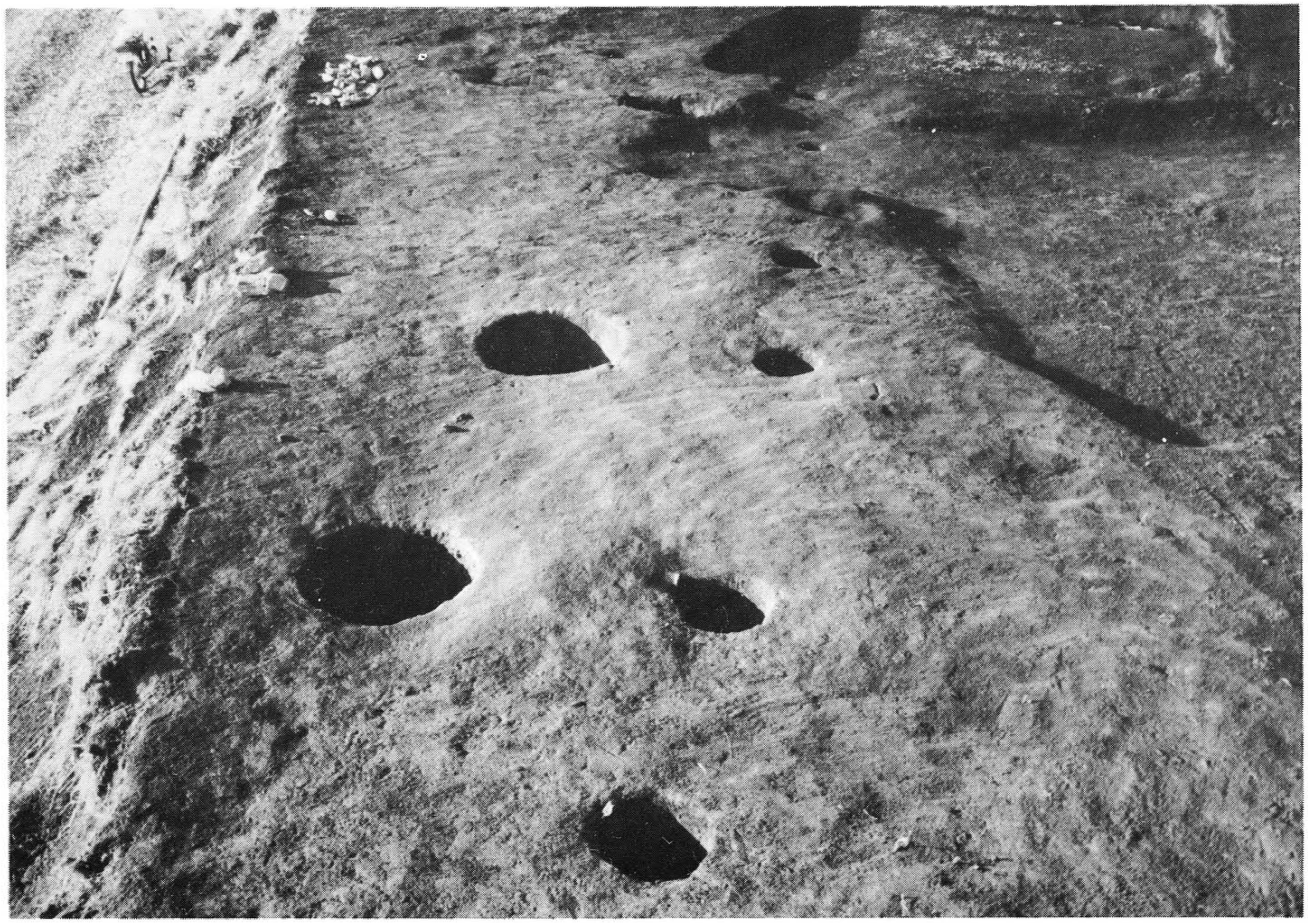


第10・11号住居址



第10号住居址

第12号住居址

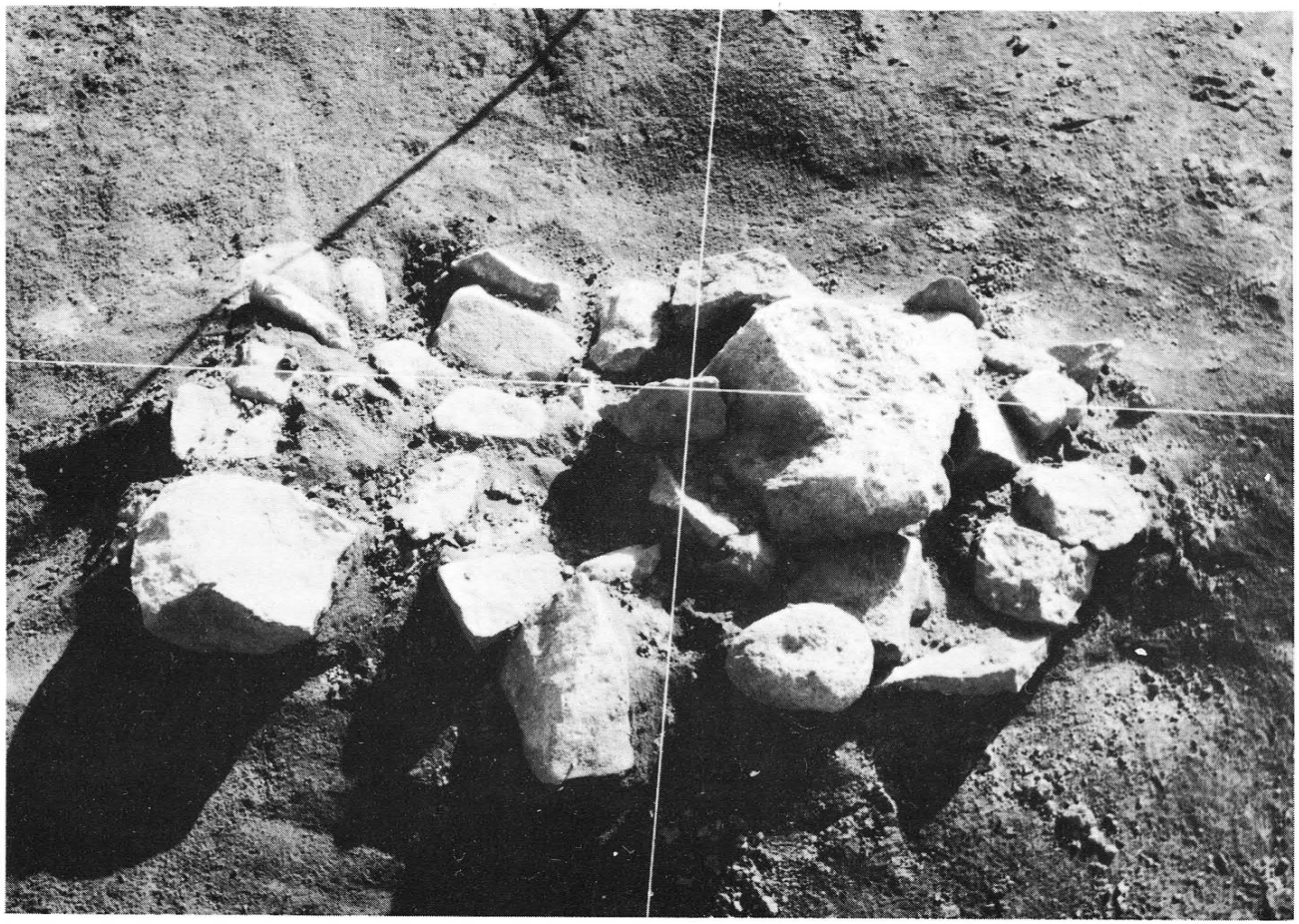


第1号掘立柱建物址

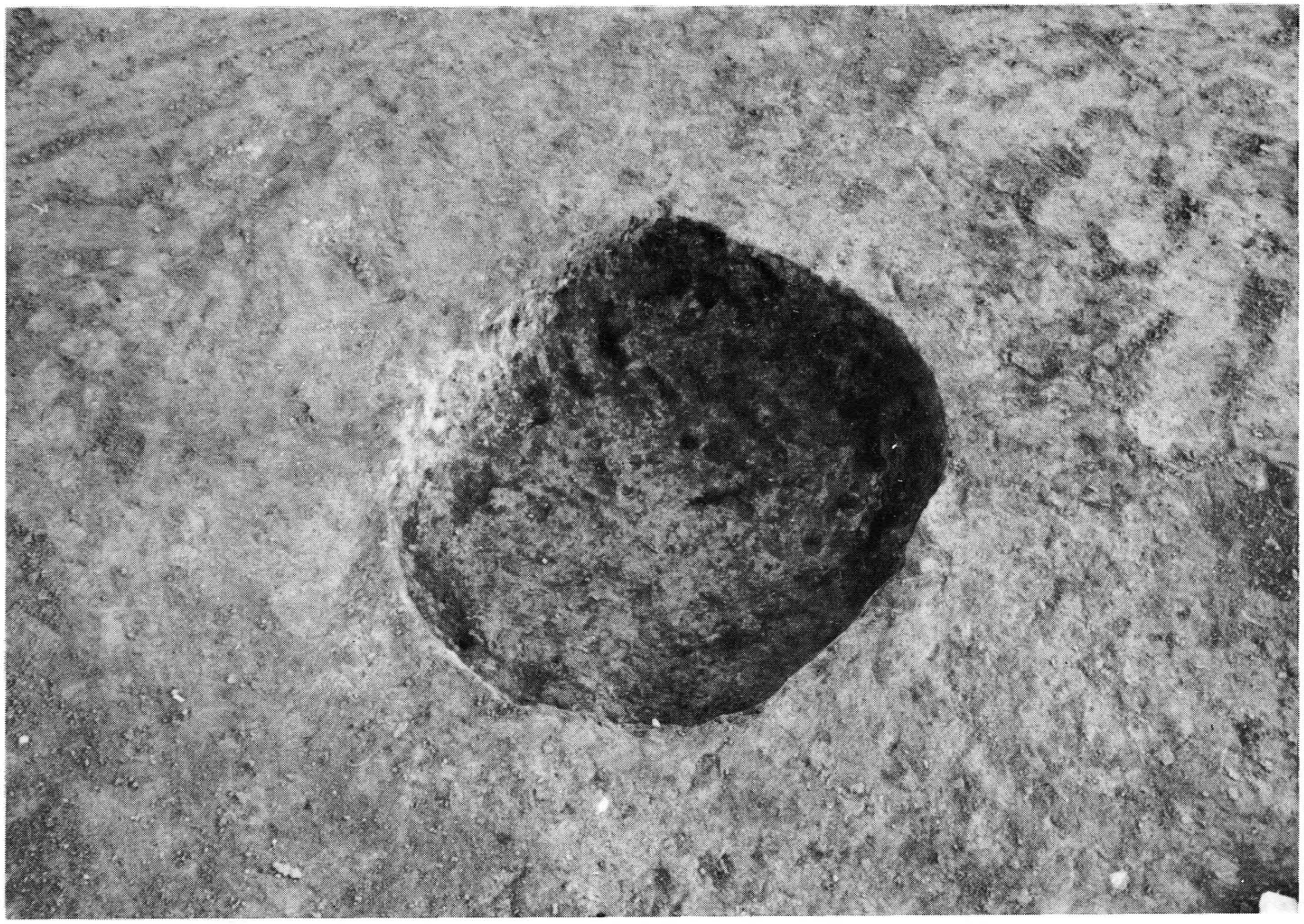
第2号掘立柱建物址

第1号・第2号土師器窯址

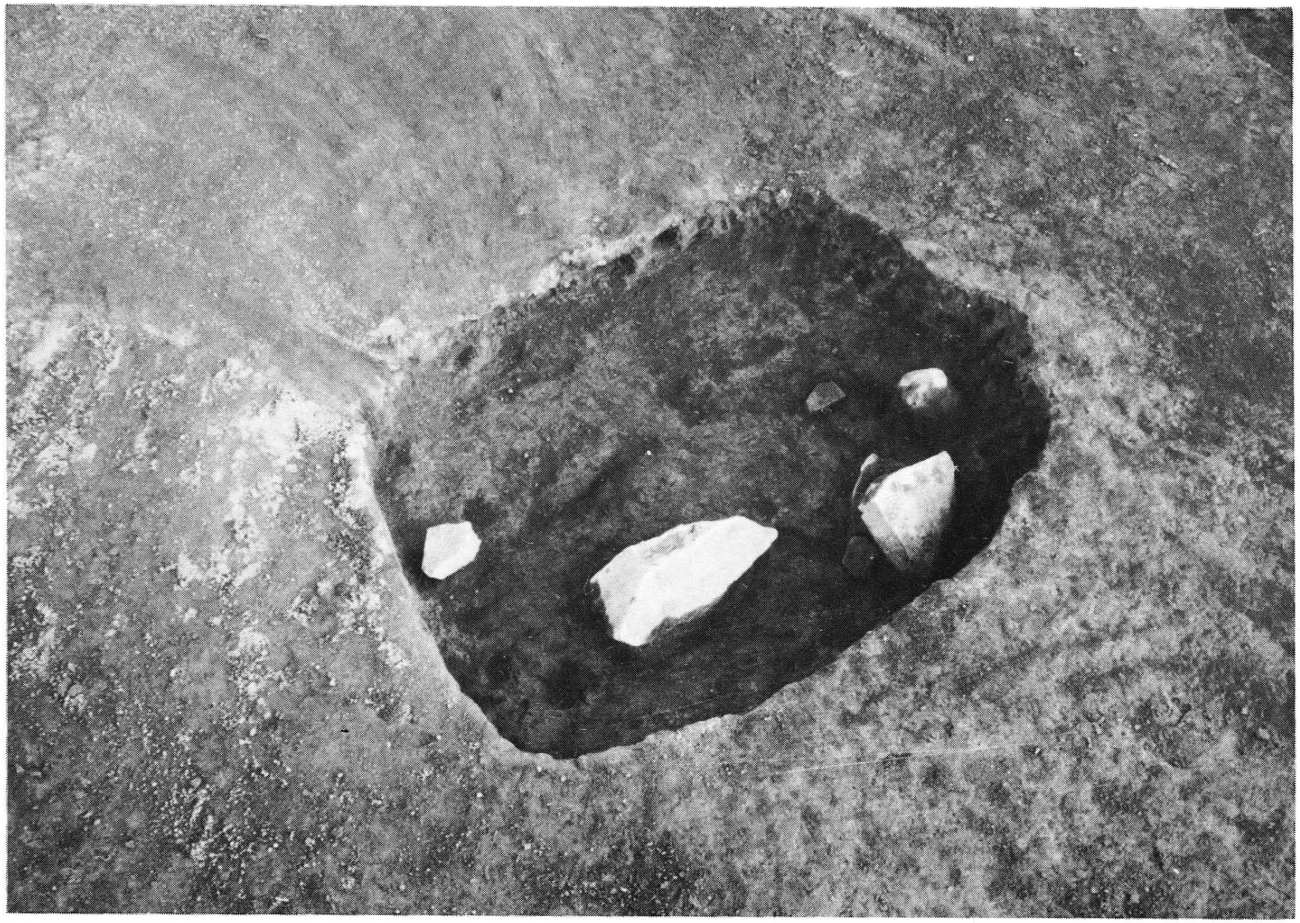
第1号集石遺構



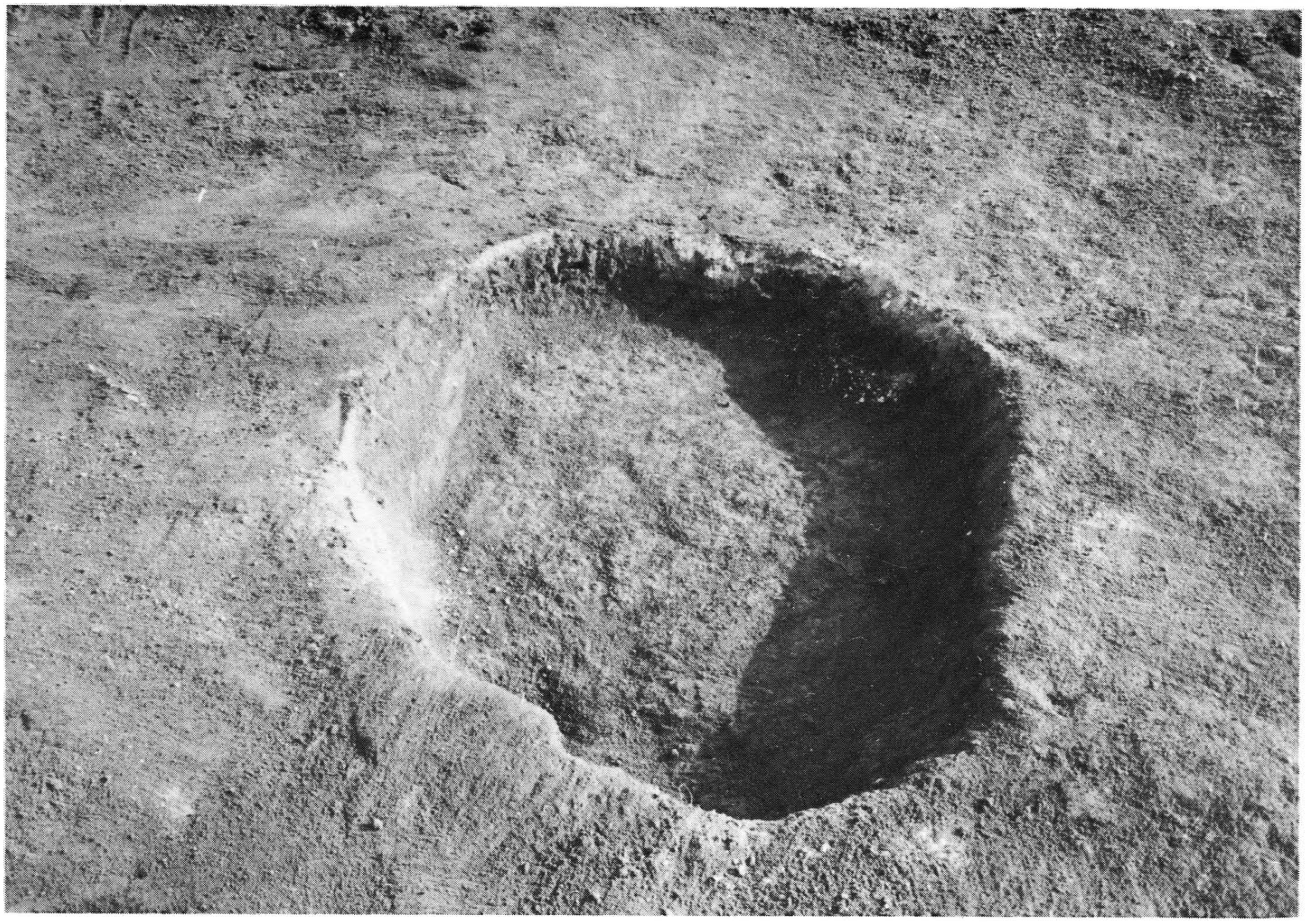
第2号集石遺構



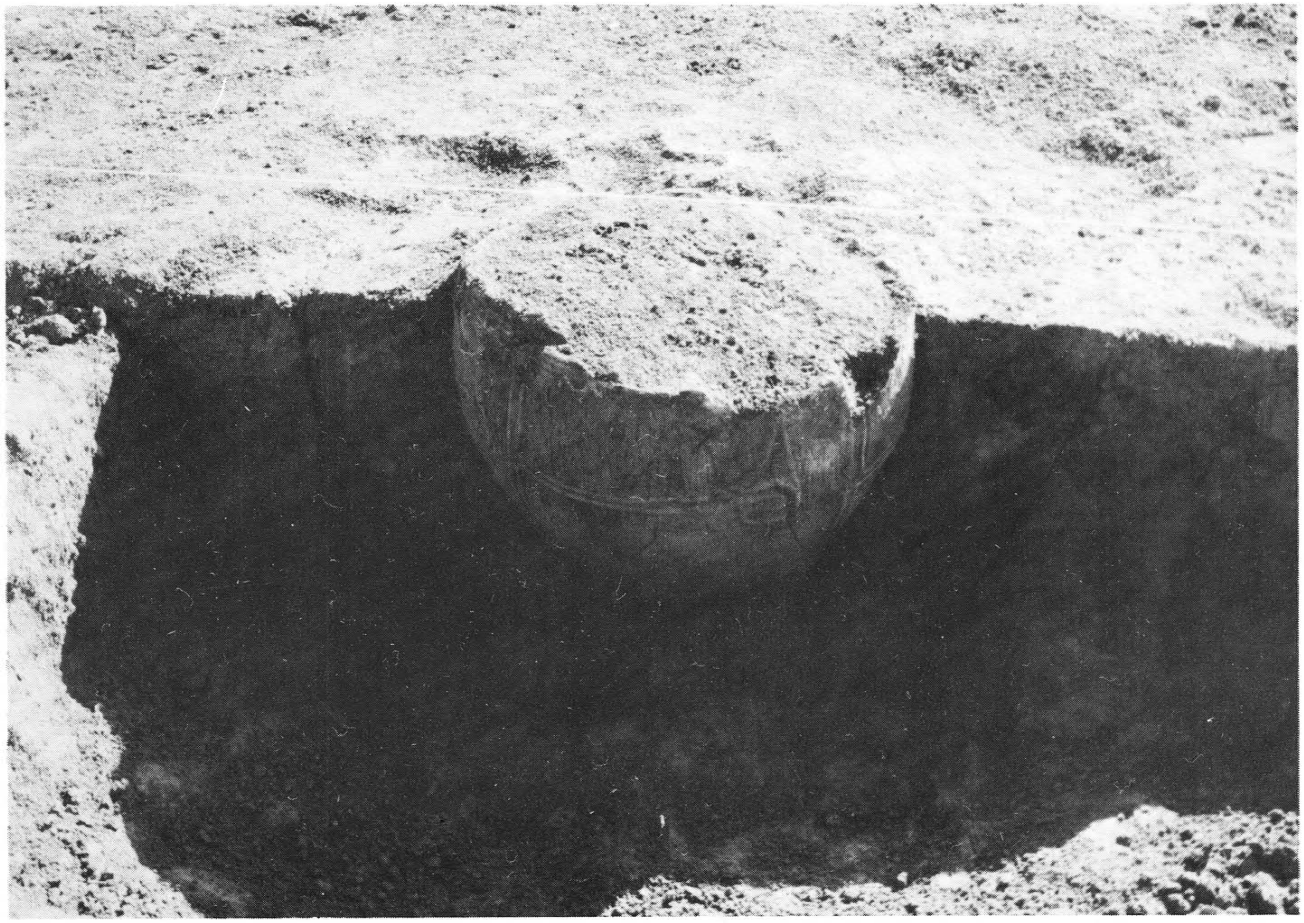
第6号土壙



第7号土壙



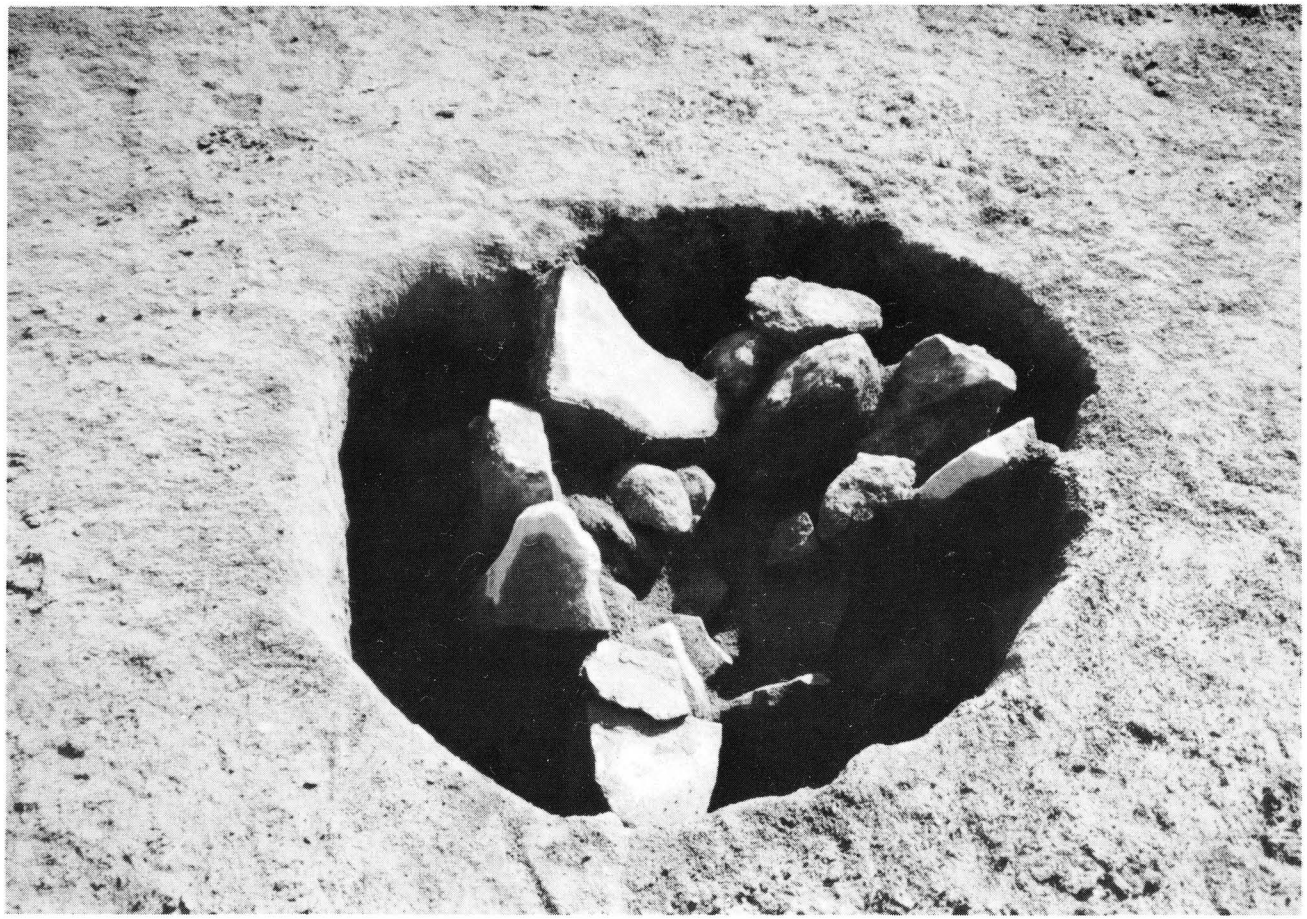
第8号土壙



第9号土壙

第10号土壙

第11号土壙



第12号土壙

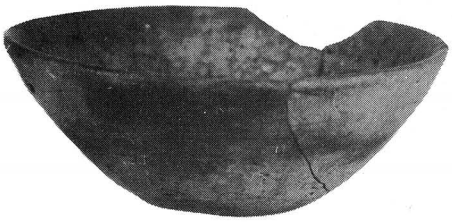
第２号住居址
出土遺物

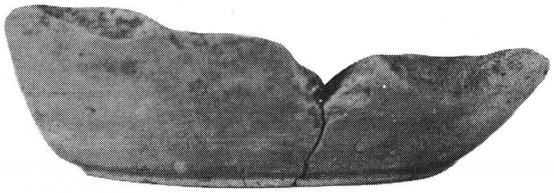
第２号住居址
出土遺物（鉄滓）

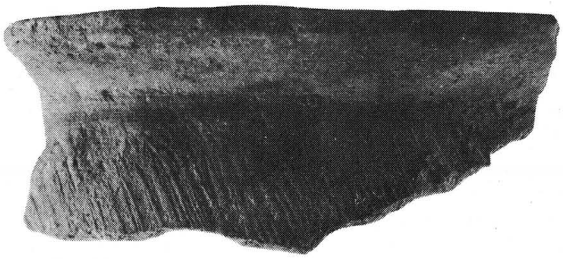
調査参加者

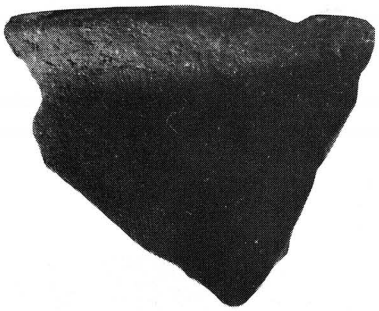
第２号住居址出土遺物(1)

第２号住居址出土遺物(2)



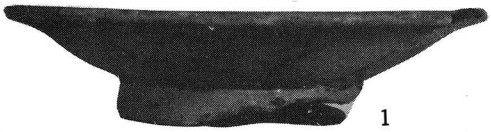




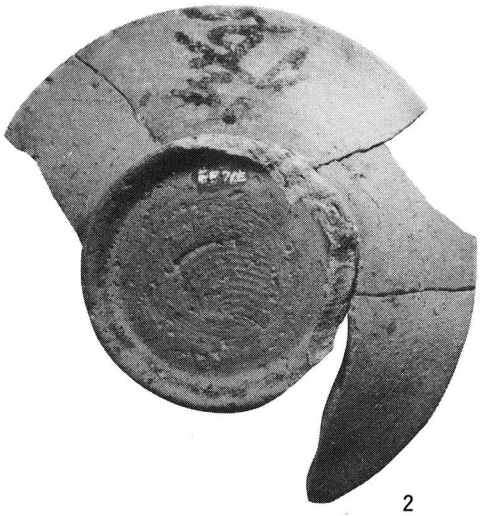


第5号住居址出土遺物

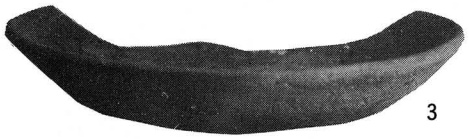
第6号住居址出土遺物



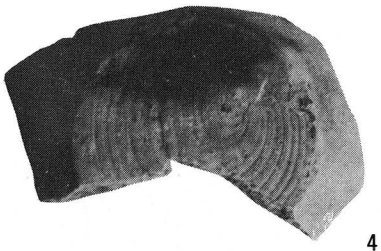
1



2



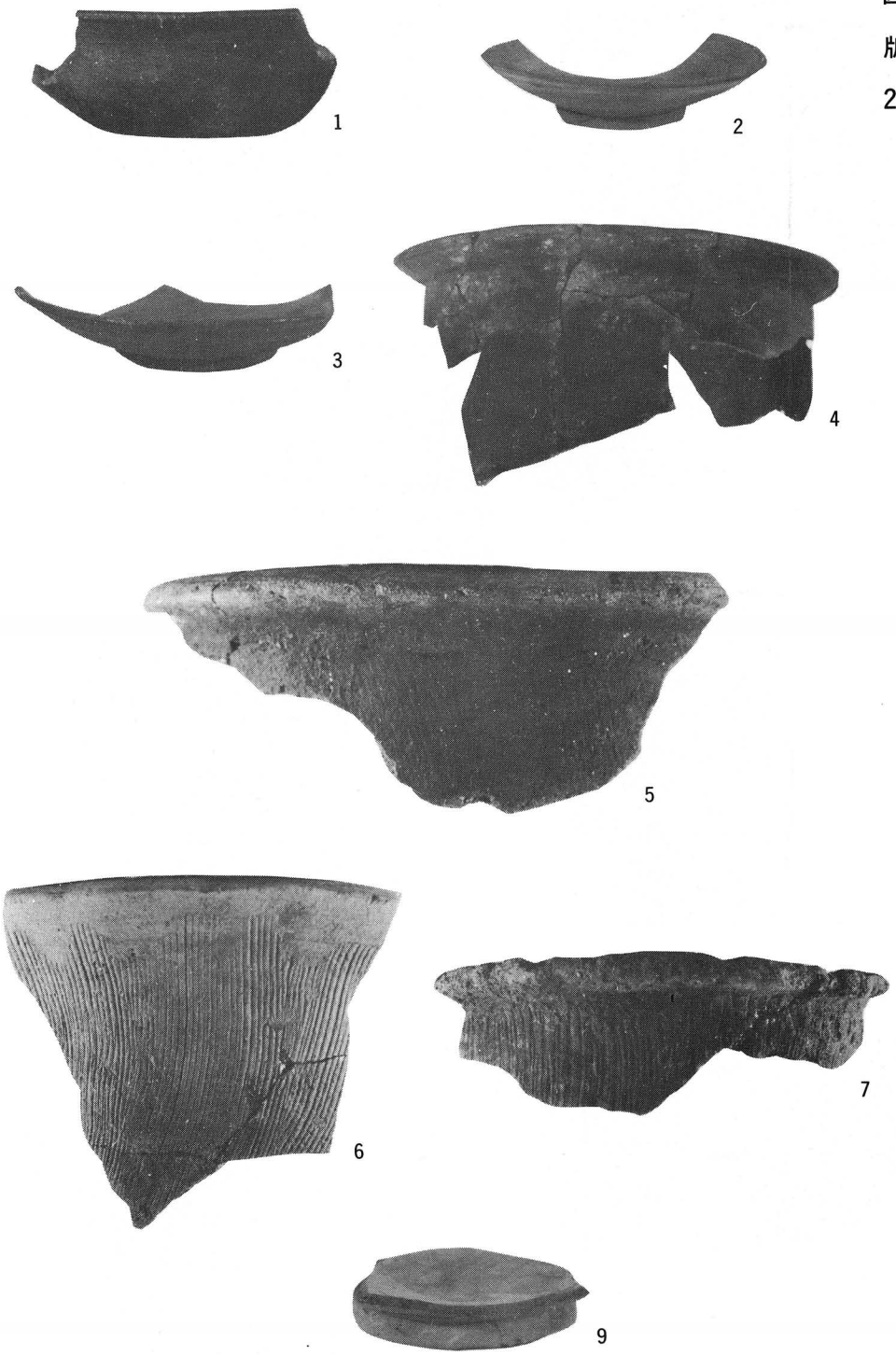
3



4

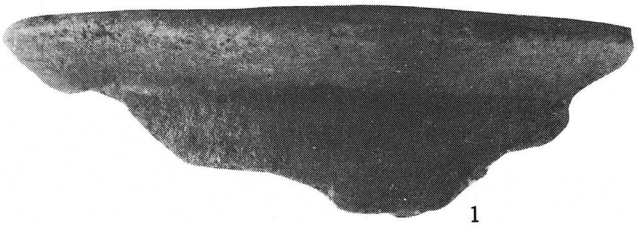
5

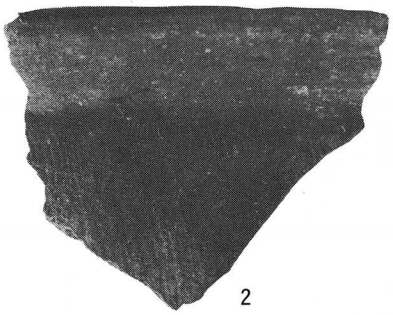
第７号住居址出土遺物（１～４）・第８号住居址出土遺物（５）

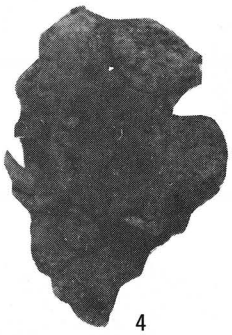


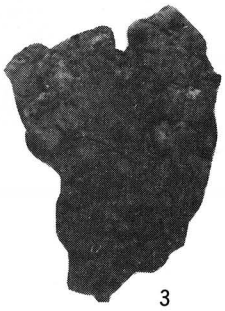
第９号住居址出土遺物（１～８）・第10号住居址出土遺物（９）

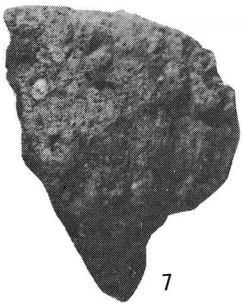
第11号住居址出土遺物

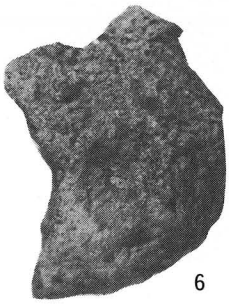

1

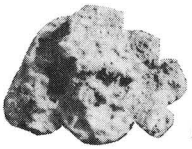

2

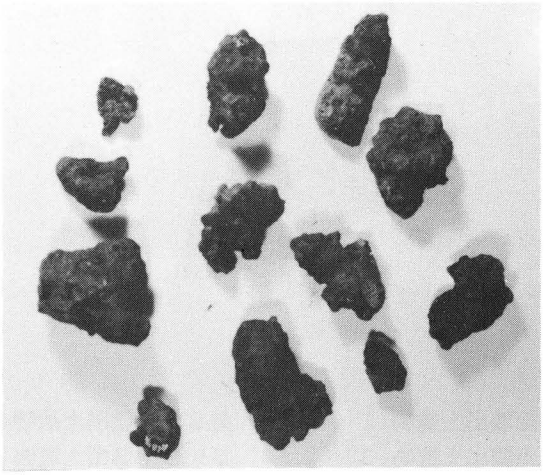

4


3

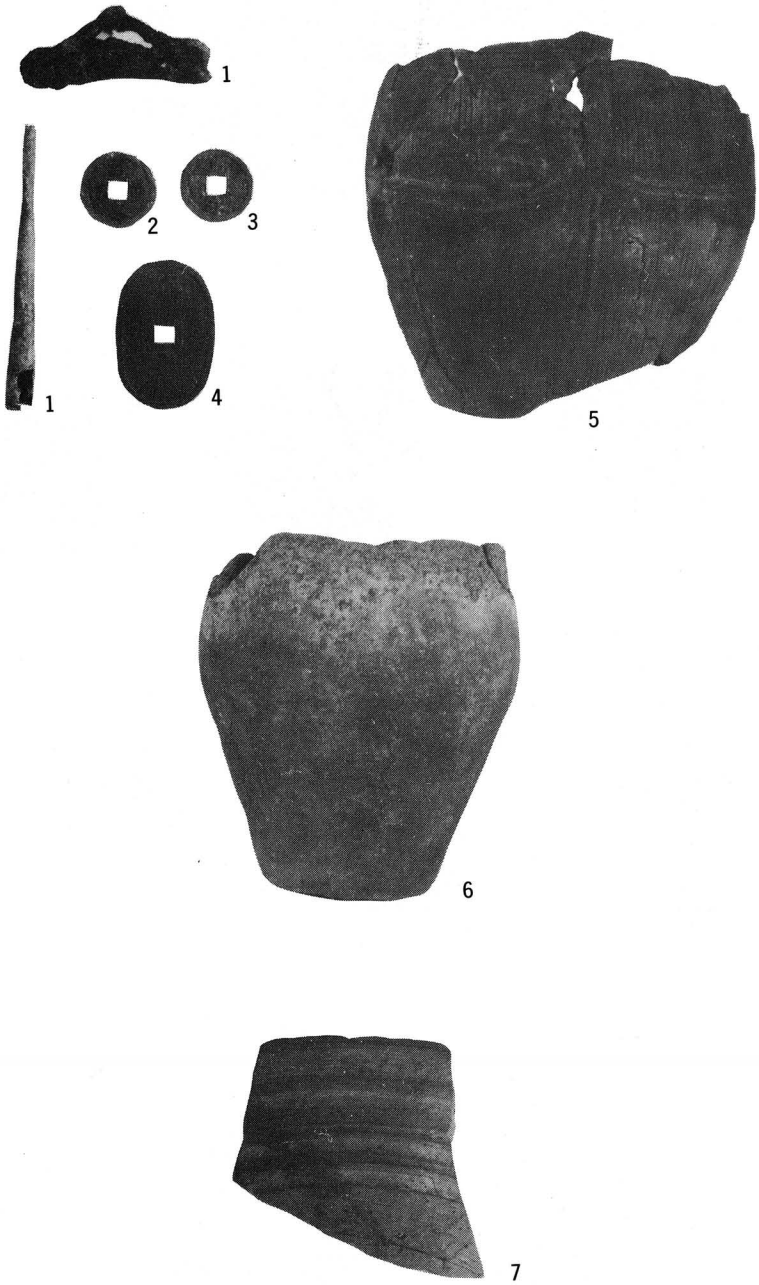

7


6


5


8

第12号住居址出土遺物（1～2）・第2号住居址鉄滓（3・4・8）
・第6号住居址出土遺物（5～7）



第６号土壙出土遺物（１・４）
第７号土壙出土遺物（３）
第８号土壙出土遺物（６）
第９号土壙出土遺物（６）
第10号土壙出土遺物（５）
第１号土師器窯址（７）出土遺物

前田遺跡

―――発行日―――

昭和60年3月31日

―――発　　行―――

小淵沢町教育委員会
山梨県北巨摩郡小淵沢町7711

―――印　　刷―――

峡北印刷株式会社